

海冬レイジ
Illustration
まるまる

J
09-13

13

Facing
"Elder
Empress"

機巧少女は
傷つかない

傷つかない

機巧少女は傷つかない13

海冬レイジ

夜会終了まで
あと五日!

かがり

魔王、神性機巧、そして雷具の運命の行方は……

MF文庫J

お楽しみ景品は、iOS・Android
向け、公式ゲームアプリ

機巧少女は傷つかない Facing "Burnt Red"

雪月花シリーズいずれかがもらえる、限定シリアルコード封入!

中!

WALK-ON



MF文庫J

【監修】



海冬レイジ

かいふ れいじ

アニメが終わっちゃったよー!! (号泣)

皆さまに支えていただき、本当にありがとうございました。
经典小劇場もいっぱい置きましたので、
ぜひぜひ尸體をチェックしてくださいね!

ちなみに原作はまだまだ続くよ!

——密なフタグじゃないよ!

札幌市在住。1月8日生まれ、A型。

【イラストレーター】

るろお

「オール カドカワ フェア」

KADOKAWAの対象商品を3冊買って応募しよう!

実施



A

コース

本 雑誌をものと
買みたいコース

→ 図書カード

B

コース

電子書籍を
買みたいコース

→ BOOKの
貸出専用カード

C

コース

映画を買みたいコース

⇒ ムビチケオンライン
ギフトカード

毎月
1,200名額
に達する



2013年10月1日～
2014年3月31日まで
(商品販売期間)

キャンペーンの開催は終了いたしました。

<http://www.kadokawa.co.jp/allkadok>





9784040663081

ISBN978-4-04-066308-1
C0193 ¥580E



1920193005806

定価：本体580円(税別)

発行：株式会社KADOKAWA

KADOKAWA

\\メディアファクトリー

機巧少女は傷つかない13

機巧魔術——それは魔術回路を内蔵する自動人形と、人形使いにより用いられる魔術。
硝子奪還から五日。夜々を労りながらも夜会の再開を待つ露真に、神性機巧ディンクに関わる
秘宝（聖石）を奪還せよ、との学院長の密命がくだる。急ぎ捜索を始める露真だが、
硝子、さらには夜会を競う相手（女帝）ソーネチカまでもが襲撃され、状況は錯綜。
一方、夜会は最終幕に突入。口玉を含めた残りの手袋持ちは露真の陰謀に巻き込まれ、
戦いは観客の予想しなかった方向へ……!? シンフォニック学園バトルアクション！
終わりが近づく夜々を救う、唯一の方法は——「坊や、魔王になりなさい」



MF文庫J

『海冬レイジの本』

機巧少女は傷つかない1~13

(イラスト みるめ)

MF文庫J



MF文庫J編集部公式アカウント

@MF_bunkoJ

Twitterやってます!

フォローする

図書図書
プレゼント中!

アンケートに答えて
無料待受をGET!!

※ この本の巻末にある二次元コート表を切り取り、同表でアンケートをアンケートページへ送ります。

※ 最後まで回答してくださった方には、見当分の間、図書図書からプレゼント、より良い本作りのため、ご協力をお願いいたします。

さらにメールアドレスに回答すると、最新刊図書やMF文庫Jの最新情報もメールでお送りします。もちろん、お名前やメールアドレスなどお断りください。



図書図書
プレゼント中!

アンケート
2022
10/31

海冬レイジ
Illustration
るるる

12月
J
9-08-13

13
Facing "Elder Empress"
機巧少女は傷つかない
Mechanical Dolls Don't Get Hurt

機巧少女は傷つかない13

海冬レイジ

海冬レイジ
J

海冬レイジ
J

580

【漫画】



海老レイジ

かいえらいじ

アニメが終わっちゃったよー!!! (号泣)

皆さまに支えていただき、本当に幸せでした。
特典小説もいっぱい頂きましたので、
ぜひぜひ尸體をチェックしてくださいね！

ちなみに原作はまだまだ続くよ！

——高なフタダじゃないよ！

札幌市在住。1月8日生まれ、A型。

【イラストレーター】

るろお

冬なれど、暖えて悪いよスケジュール。



9784040663081

ISBN978-4-04-066308-1
C0193 ¥580E



1920193005806

定価：本体580円(税別)

発行：株式会社KADOKAWA

KADOKAWA

\\メディアファクトリー

機巧少女は傷つかない13

機巧魔術——それは魔術回路を内蔵する自動人形と、人形使いにより用いられる魔術。
硝子奪還から五日。夜々を勞りながらも夜会の再開を待つ露真に、神性機巧ディンク・マシナリーに関わる
秘宝〈寶石〉を奪還せよ、との学院長の密命がくだる。急ぎ捜索を始める露真だが、
硝子、さらには夜会を競う相手〈女帝〉ソーネチカまでもが襲撃され、状況は錯綜。
一方、夜会は最終幕に突入。口丰を含めた残りの手袋持ちグローブ・ベアラーは團長の陰謀に巻き込まれ、
戦いは観客の予想しなかった方向へ……!? シンフォニック学園バトルアクション！
終わりが近づく夜々を敷う、唯一の方法は——「坊や、魔王になりなさい」

1000円以上



海冬レイジの本

悪巧少女は騙つかない1~13

[イラスト みるめ]

マシントール

機巧少女は傷つかない13

Facing "Elder Empress"

海冬レイジ

角川文庫





機巧少女は

傷つかない

海老原しんぢ ○ 2013年



使用人は

主の肌を見ることなく、

目を伏せておくものですわよ。

いやらしい」



● 機巧都市リヴァプールにて







「行きますわよ、ヨルムングンド！」



contents

- Prologue 惜別と、決意とp13
- Chapter 1 玉座を目指せp25
- Chapter 2 運河の夜 ... p57
- Chapter 3 原点には回帰せずp90
- Chapter 4 服従の対価p128
- Chapter 5 太陽が見ているp165
- Chapter 6 夜会、彼女たちの終わりp197
- Chapter 7 凍てつく世界の絶対者p234
- Epilogue 惜別と、友愛と ... p279



マシンドール

機巧少女は傷つかない13

Facing "Elder Empress"

海冬レイジ

MF文庫 



夜夜

自称「魔法の使」。花柳道楽師の異母妹(異母兄)の妹。



赤羽雷貞

魔法の秘伝を継ぐ一族の次男。計ったとおりマダラスの命を奪う。

機巧少女は傷つかない

登場人物紹介



イオネラ

17歳で工学部科長の天才少女。花柳道楽師の異母妹を自衛。



キシバリー

機巧物理学の教師で道楽の道化。その正体は「黒十字」の戦士。



シャルロット・ブリュー&
シダムのメイド

ブリュー伯爵家の元ご令嬢。父道楽の「道楽」は特殊能力者。

監視



ラザフォード

19世紀倫敦の暗黒街にして学園裏。悪性能力を宿している。



リキ

「道楽」の替身を取る能力者。暗のために能力を1段階下。



ムレイ

日本の道楽。いづれザルム式に3階に昇れている。1人。



アリズ

ラザフォードの妹。父のためにあれこれ道楽。自身が道楽。



ソーネチカ

「道楽」とあだ名がある才能。気品はあるが、個性は強い。

世界中から道楽が集まる「魔術の最高学府」。4年に1度「道楽」を開催し、「同時代でもっとも優れた才能」に魔王の称号を与える。ラザフォードの副任後、神性機巧開発を重点に推進中。

王立機巧学院



花柳斎硝子

内務省に勤務する暗探の一人。硝子に復讐の機会をうとむ。

雪月花



小紫

硝子の姉。〈雪月花〉の元。硝子と手ではばからぬ。



いろり

硝子の姉。〈雪月花〉の元。硝子と手ではばからぬ。硝子に口づけてデングラ習慣。

日本軍



火垂

マダガスカル島に侵入中。硝子の妹。硝子にそっくり。



生門日輪

生門いづなが養育院院長。硝子の姉。硝子に愛着がある。



グリースェルダ

硝子の養育を嗣した養育の母。愛着。硝子を娘にした。

魔術師協会

監視



マダガス

硝子の母。硝子にそっくり。硝子の母。硝子にそっくり。

硝子の母。硝子にそっくり。硝子の母。硝子にそっくり。



アストリッド

硝子の母。硝子にそっくり。硝子の母。硝子にそっくり。

硝子の母。硝子にそっくり。硝子の母。硝子にそっくり。

これまでのおはなし

機巧文明華やかになりし20世紀初頭。ひとりの日本男子が至高の自動人形を引き連れ、王立機巧学院の門をくぐった。滅亡した毒刺一門、何より妹の仇を討つために……。硝子を硝子の魔手から救い出した雷蔵。夜々も一応の復讐を果たすが、その命は燃え尽きようとしていた……。他方、学院は王妃の支配を脱し、夜会内閣に向け動き出す。残る手袋持ちは7人――！

口絵・本文イラスト●るろお

編集●池本昌仁



Prologue

惜別と、決意と



「雷真、本当のことを言ってください！」

冬枯れの林の中、雷真の背にひたいを当てて、相棒は言った。

雷真は胸騒ぎを覚えながら、半分以上はごまかしたくて、そっけなく答える。

「その話、鍛錬の後じゃ駄目か？　今、それどころじゃない——」

「夜々は俺の嫁ですよね？」

「それは違う——」

夜々は裏切られたような顔をして、恨みがましい眼で雷真をにらんだ。

「こ、これが倦怠期……っ？」

「現実には帰ってこい。現実はこの枯れた庭園みたいに寒々しいんだ」

「詩人ですね雷真。それとも頭の具合が悪いんですか？」

「おまえが！　おまえの頭がおかしいの！」

「ひどいですー♡」

怒って雷真の肩に頭をぶつける。それから、こころと明るく笑った。

仕方のない奴だ——なんて思いながら、一緒になって笑っている自分を発見し、驚く。

以前よりも、二人の感情は優しく、やわらいでいる。

その優しい空気に、冷たい風が水を差す。冷気の発生源は夜々の姉いりだった。

「なりませんっ……雷真殿の女癖が治らぬ限り、夜々を嫁にはやれませぬ……！」

「女癖は悪くない！」

「どの口でおっしゃるのです！ はあれむとかいうのを築かれるならまだしも！」

「……ハレムはいいのか」

「ええ、全員の面例を見る、ということですので、むしろ誠実かと思えます」

「まあそうか——って、んなわけあるか！ おまえの感覚はおかしい！」

「あつ、いえっ、付け決して私が加わりたいというわけではっ」

「姉さま……またわざとらしいアピールを……！」

「これ夜々！ くだらぬ邪推はよせ！ そそそのような……みだらな妄想！」

「みだらな？ 何を妄想してるんですか姉さまーっ！」

姉妹がきょんきょんと言い合いを始める。もう放っておこうかと考えていると、ぴとつとやわらかい物体が背中にくっついてきた。

三姉妹の末っ子、小紫だ。小紫は雷真の背中に頬ずりをして、

「漁夫の利♡ 鬼の居ぬ間に洗濯♡」

「どこらへんが洗濯だ！」

「心の洗濯だよー。そ・れ・と・も、お洗濯が必要になるようなこと、しちゃう？」

「こー、むー、らー、さー、きー、雷真から離れなさいー 機巧戦闘ならともかく、夜の姉妹井なんて姉さまが許しませんー」

「そうそれだー 夜々でかしたー」

雷真は姉妹を振りほどき、厳しい声で言った。

「ふざけてる場合じゃないだろう。夜会に向けて特訓中だぞ、俺たちは」

そのために、寒風吹き荒ぶ屋外にいたのだ。三姉妹はばつが悪そうに黙り込んだ。

「そ、そうでしたね……」

「夜々も忘れてたのか！ だよな！ もういいから、陣形のおさらいをするぞ」

雷真は和綴じの本を取り出し、傷けた表紙を二、三度払った。

「これを自分で使う機会があるとはな……。捨てなくてよかったぜ」

赤羽一門の戦術書、集団戦法について記したものだ。紅翼陣を会得した赤羽流の傀儡師が、複数の自動人形を同時に使役し、効率よく戦う方法が解説されている。

かつては夜々と雷真の二人だけだったので、自分が使うというより、仇敵の戦術を予習する意味合いが強かった。だが今は、これが武器となる段階にきている。

「不思議なもんだな。落ちこぼれて家を飛び出した俺が、赤羽流を使うのか」

「不思議はありません。夜々はずっと信じてました」

夜々はにつこりと微笑み、力強く言った。

「雷真はいつか、誰も追いつけないような、すごい人形使いになるってー」

「嘘つけ。おまえ俺を毛嫌いしてただろ『こんな馬鹿な子とも』って」

「そ、それは（序幕）部分だけです。（一巻）以降はすつと雷真を信じてました」

「……幕って何だ」

「『愛妻日記』 序幕です。もしくは『女狐殺 油地獄』」

「俺の半生に妙なタイトルをつけるな」

「最初は確かに、雷真を疑っていました。でも今は信じています。心の底から」

——そう、夜々は雷真を信じてくれる。この学院に到着してからは、特に。

朝地であればあるほど、夜々は雷真の腕と勘を信じ、命を預けてくれた。

ついこのあいだ、硝子に言われた言葉が脳裏をよぎる。

「十日後。その答えは、出ているでしょう」

「雷真？ どうかしりました？」

「……俺はおまえの信頼に足る人間じゃない。こないだだって、硝子さんと」

「硝子と？ 硝子と何ですか？」

これはヤブヘビもいいところだ。雷真は急いで言い足した。

「間違エマシタ。何モ、ナカタデス」

「カタコトじゃないですかー！ 硝子と『一線を越えた』って聞こえましたー！」

「言ってねええええー 思っただけどー」

「やっぱりー」

「そうそう、私とイイコトをしたのよねえ。」

ふわっと風にのって、ほのかなクチナシの香りが漂う。風上を振り向くと、煤けた林の向こうから、艶やかな着物姿の女性が歩いてくるところだった。

ちようと話に出ていた硝子だ。小紫が真っ先に駆け出して、硝子の豊かな胸に飛び込む。甘える妹を見て、いりりは目を三角にした。

「これ小紫！ 人前でみっともない！」

その言葉通り、硝子には黒コートの魔術師が二人、つき従っている。一人は若く、一人は金色の瞳を持つ男で、こちらは雷真も知っている顔だった。

彼らの力量はよく知っている。思わず身構えてしまう雷真に、硝子は軽く、「私のお迎えなの。協会から呼び出しを受けてね。だけど、任意よ」

安心させるように言う。

強制ではない、という意味だ。が、そうは言っても、実質的には逮捕——硝子の逃亡を阻止し、結社の脅威を妨害するのが目的だろう。花柳斎は禁忌人形製造に加え、金書齋とつるんでオーストリア皇太子暗殺を企てた嫌疑をかけられている。

聴取は過酷なものになるだろう。くだされる審判も、たぶん、軽くはない。

三姉妹も、雷真も、暗い顔になる。だが、硝子は明るく言った。

「心配しないで。逃げ回るより、事情を話して、お仲間になってもらおうと思うの。今日はそれを断りにきたのよ。出発前に、坊やたちには伝えておこうと思っただけ」

雷真は少なからず衝撃を受けた。かつての硝子なら、こんなふうに、自分の意図を明かしてはくれなかった気がする。

硝子は笑みをこぼし、懐かしそうに冬空を見上げた。

「思い出すわね。あの日の坊やも、こんなふうに焼け跡で鍛錬していたわ」

「ああ……そうだな。夜々と硝子さんが、俺の前に現れて――」

「雷真。そんな昔話で夜々はごまかされません」

夜々が割り込んでくる。雷真は首をひねった。

「ごまかす？ 何の話だよ？」

「さっきの続きです！ 硝子とイイコトをしたって！」

「だから、何もなかったって。……最終的には」

「結果論！ うう！ 未遂は十分有罪です！ 夜々にも同じことをしてください！」

「夜々、こつちにいらつしゃい。そんなに髪を振り乱すものじゃないわ」

硝子が切り株に腰掛け、手招きをする。

その穏やかな声に、夜々は怒りを吸い取られてしまったらしい。吸い寄せられるように、硝子の方へと歩いて行く。硝子は夜々をとなりに座らせ、櫛で黒髪を梳き始めた。それを見て、小紫が硝子の膝にまとわりつく。

「ずるーいー 私も！」

「順番ね。お座りなさい」



「はいー」

「こ、これ小紫こむらさき！ 霞練はどうするのだ！」

「いりりも。いらつしやい」

硝子しょう子が呼ぶ。いりりは判断に困り、雷真かみまことを見た。雷真は笑つて、

「してもらえ。俺おれは指南書を復習しておく。おまえたちに説明しやすいようにさ」

「……わかりました。雷真殿がそうおっしゃるなら」

「あら、まあ。私より坊やの言葉が優先なの？」

「か、からかわないでください主ぬし！ 流れと申しますか、勢いです！」

いりりは恥はづかずかしそうに目を伏せ、しかしいそいそと、硝子のもとへ向かった。

冬の淡い日差しの中、姉妹と剣り主の穏やかな時間が流れる。

硝子に寄り添い、髪をとかしてもらう姉妹たちは、絵画のように美しく、きらびやかで、

何より幸福そうだった。黒コートたちも気を遣い、急いそかすようなことはしない。彼らなら、

硝子を悪いようにはしないのではないかと……と、そんな期待を抱いてしまう。

一方で、締めつけられるような痛みも感じている。

この幸せな光景を、彼女たちはいずれ、どんな気持ちで思い返すのだろうか？

夜々の命が尽きた後、小紫は、いりりは、硝子は、そして雷真は……。

硝子の言う「十日後」とやらは、もう五日後に迫っている。

もちろん、絶望するのはまだ早い。硝子は希望もくれたのだ。与えられた使命は難しく、

条件は過酷だが、達成の可能性はゼロではない。

やがて三姉妹の髪を梳き終わり、硝子は立ち上がった。

「じゃあ、行くわ。私が戻るまで、万事、坊やの言う通りになさい」

「はい、主。夜伽であつても、雷真殿の思うがままに」

「もう突っ込みねえぞ？　それで硝子さん、何日で戻つてくれるんだ？」

硝子は黒コートたちを振り向いた。金の瞳の男がかぶりを振る。教えられない、という意味だろう。硝子は肩をすくめ、投げやりな返事をした。

「ですってよ。あまり期待しないで」

「……わかった。こつちの心配はせず、硝子さんは自分の心配だけしてくれ」

「ふふ、ずいぶん頼もしくなったものね」

硝子は品よく笑い、雲紋つばい目線をくれた。

「戻ってきたら——そうね、今さら日本軍の屋敷に戻るわけにはいかないし、私も男子寮に泊めてもらおうかしら。坊やのお部屋にね。いいでしょう？」

「駆け込み寺か——いいわけねーだろそんな無法！」

「今さら、なあに？　うちの子たち、みんな同様してるのよ？」

「そ、それはそうだが、その……硝子さんと同室つてのは、いろいろ具合が悪いっつーか……眠れなくなりそうっつーか」

夜ごと悶々とする未来が視える。仮設の寮はそこそこ広いが、五人で暮らすにはやはり

狭い。至近距離で硝子しょう子が寝息を立てているなど、考えただけで鼻血が出そうだ。

先日もみしだいた、神々の霊峰たまげの感觸を思い出し、体が火照ほてってくる。

夜々ややがふてくされ、しくしくと泣き出した。

雷真らいまっ……夜々の前では平気で安眠するくせに……！」

「いや、安眠はしてなかったぞ。夜通よどいとか警戒してたし」

「余計ひどいですー！」

こぶしを振り上げる夜々を、硝子しょう子が後ろから抱き寄せ、ささやいた。

「夜々、おまえは働仕やうつかえなのだから、坊やより先に死んでは駄目よ」

「あ——はい、もちろん！」

答えに満足したのか、硝子しょう子はうなずき、姉妹を順に見つめた。

別れを惜しんでいるようにも見える。ふと、彼女がこのままいなくなってしまうのでは

ないか、という不安に駆られた。

予感めいた、ざわめき。引き止めようか迷う雷真とは対照的に、硝子しょう子は思い切りよく背

を向け、瀧たきとした大人の背中を見せつける。

そのまま、魔術師たちに連れられて、硝子しょう子は学院を離れた。

しばらくのあいだ、四人は硝子しょう子の去った方を眺め、突っ立っていた。

「行っちゃいましたね……」

「ああ、責任を果たしにな。俺たちもやるべきことをやろう——」

「あ、見てー あの人たちー」

小紫が木立ちを示す。遠くの遊歩道を、奇妙な一団が歩いてた。

そろいのドレスを着た少女たち。その中に銀の仮面の男子学生——マダナスがいる。技術科の方に向かっている。こちらに気付いていないはずはないが、視線も奇惑さない。

雷真はにやりとして、

「ちようどいい。あいつに確かめたいことがあったんだ。戦隊のこととか、一門のこととか。いざとなりや、ぶっ飛ばしてでも吐かせてやる」

「いやいや、それは認められんよ」

とぼけた声が背後から聞こえ、雷真と三姉妹は一斉に飛び退いた。

いつから、そこにいたのか。それとも今、現れたのか。

今さら暴力的な威圧感がのしかかる。学院長エドワード・ラザフォードが立っていた。

「神聖な学び舎で殺し合いなど、あってはならんことだ。それに、夜会最終章を彩るべき手袋持ちが、正試合で決着をつけるというのも興ざめな話だろう？」

雷真の手袋を示し、好々然とした笑みを見せる。

……この男を突破して行くなど現実的ではない。雷真はあきらめ、構えを解いた。

「機械を直してくれたまえ。代わりに私が話し相手になろう」

一瞬、何を言われたのかわからなかった。

「午後の紅茶をご馳走しよう。ついてきたまえ」

言うだけ言つて、先に立つて歩き出す。雷真はかかしのように立ち尽くした。

（何を……企んでやがる……）

戸惑うばかりの雷真に、夜々がそつと耳打ちする。

「きつと尋問ですよ。東欧でのこととか、いろいろ訊かれそうです」

「……そのくらいで済めばいいけどな」

「どうした？ 紅茶は嫌いかな？」

あちらでラザフォードが振り返る。口ぶりは優しいが、有無を言わせぬ強圧的な態度。

雷真は覚悟を決め、赤羽の戦術書をいろりに押しつけた。

「小紫と二人で、これの予習をしててくれ」

「えー、私たち、お留守番？」

小紫がぶーと膨れる。雷真はその頭を抱え込み、ぼんぼんと叩いた。

「何があるかわかんねーからさ。夜々、俺たち二人で行こう」

我々は胸を張り、「はい！」と元気よく返事をした。



Chapter 1 玉座を目指せ

1

夜々の残り時間は、あとどのくらいなのか――

ゼムリン市での、あの夜。雷真の発した問いに、硝子はこう答えた。

「十日後。その答えは、出ているでしょう」

硝子は袖袂一枚で、紫煙をくゆらせている。先ほどの誘惑は強烈だったが、既に部屋の空気が緊張をはらみ、浮ついた気配は微塵もない。

硝子が語った神性機巧の話は、雷真にはまるで理解できなかった。質問しようにも、何から訊けばいいのか、どこが疑問なのかもわからない。かろうじて理解できたのは、硝子は（人造人間）であり、人間でも人形でもない、境界線上の存在ということだ。

改造ではなく、一から製造された――その点では硝子も（人形）と言える。

一方、（イブの心臓）なしでも知性を持ち、魔力を放って自動人形を操ることが出来る。この点では、間違いない（人間）と言えるだろう。

両方の性質をあわせ持てば、それは神性機巧――というのが雷真の理解だったのだが、



硝子はあくまでも人間のレベルに留まり、神性機巧に届いていないという。

頭がこんがらがる。だからまず、そこではなく、今一番知りたいことを訊いた。

「十日後つてのは、何だ？ まさか十日後、夜々が……」

その先が言えない。口にしたら、現実になってしまいそうな気がしたから。

「私はね、坊や。坊やを雪月花の餌にしたかったのよ」

「……それはもう聞いたよ。紅翼の血が欲しかったってんだろ？」

「赤羽一門のもっとも恐ろしいところは、魔性の湧えでも、千年かけて編まれた戦術でも、

集團戦法を可能にする秘術でも、組織化された血族集團のあり方でもない」

「じゃあ……何だよ？」

硝子はそつと振り向き、雷真の胸、心臓のあたりに触れた。

「このしぶとい、異能とも言える生命力よ。いざなぎ一門が婚にと望んだのも、私が坊や

を拾ったのも、とどのつまりはそれが理由。ひどい話でしょう？」

「そうじゃない。少なくとも、硝子さんが俺を連れてくれたのは」

まっこのうから否定されて、硝子はきょとんとした。雷真は登み掛けるように、

「硝子さんは『喰われても死なない』餌が欲しかったんだ」

「――」

「硝子さんは、本当は……すごく優しい人だからさ」

照れくさい。硝子もそうだったのか、ちよっぴりはにかんだように笑った。

「女たらしね、坊や」

「その評価は心外だ——」

「確かに、坊やなら喰い尽くされなかったかもしれない。……いずれにせよ、坊やをたいらげる頃には、夜々はあちら側の存在——神性機巧に昇華されているはずだった。だけど、夜々はもう食事を拒む。この意味がわかるでしょう？」

わかる。神性機巧に変異する道は、閉ざされたということだ。

「あとは寿命を使い切るのを待つばかり。この先は実戦を経るたび、目に見えて衰弱していくでしょう。遠からず、夜々も己の死期を悟るわ」

「もう……どうしようもないのか？」

自分の声が震えるのを感じる。だが、硝子は返答をためらった。

「……本当に、雲をつかむような……奇跡を願うような……話なのだけど」

言い訳じみた前置きを並べる。これから言うことに、期待を持たせまいとしている？

「『七の七倍の夜、六つの種が芽吹くとき、人が神の名代となる』」

「——何だっけ、それ？」

「教父の手見よ。統きはこう——『其は完全なる玉の如し。はじめに権威が覆り、異邦人を受け入れる。次いで支配のくびきが解かれ、浄化の歌が都に満ちる。やがて星の雨が降り、天地開闢の先触れとなる。ついに子どもはきたり、天の玉座に君臨す。彼の者を見よ、そのかたわらに神性機巧あり』」

頭の中でたどたくしく意味を追い、雷真ははっとした。

神性機巧は（玉座）の（かたわら）にある？　ということとは、つまり――

「坊や、魔王になりなさい」

――

「神性機巧の持ち主、（予見の子）になるの。そうすれば、坊やの人形は神性機巧ということになる。神性機巧は『完全なる玉の如し』、人形としての寿命なんて問題にならないはずよ。坊やはキングスフォートの権威を覆し、夜会に受け入れられた『異邦人』と言えるわ。『天の玉座』を魔王の座と読み解けば――」

そこまで一息に言つて、硝子は言葉を止めた。自分でも迷信じみたことを言っていると思つたのだらう。だが、雷真は馬鹿にせず、硝子を見つめて言つた。

「俺が魔王になれば、夜々は助かるかもしれない。そういうことだな？」

「……奇跡を期待するようなものね。だけど、魔王は禁忌の研究が許される」

硝子は居住まいを正し、雷真と正対して、真剣に言つた。

「魔王になったら、私を助手として雇つて頂戴。そうすれば、誰にはばかることもなく、生体機巧を研究できる。私がこの手で探すわ。夜々を承らえさせる方法」

それは、子どもが描く夢に似ていた。

祖父母の死病を治したくて医者を目撃すというような、叶わぬ夢に。

だが、間に合わずとも、その夢は尊い。その価値は決して、傷つけられない。

「赤羽天全に勝って、魔王になって。私のために——夜々のために！」

雷真は奥歯を噛んだ。今日まで、天全を討つことだけを考えてやってきた。

英団に渡ったのも、夜会を勝ち抜いてきたのも、そのためだ。

だが今、こんなにもはつきり、そして初めて、魔王の座を欲している。

「……任せてくれ、なんてことは、とても言えないが」

雷真は顔を上げ、まっすぐ硝子の眼を見て言った。

「任せろ！」

2

（すべてが終わるまで、残り五日ってことだよな？）

夜々と二人、ラザフォードについて歩きながら、考える。

硝子によれば、十日という数字を弾き出したのは金鑿術の数秘術——統計と確率に基づく、一種の予言だそうだ。その予言の通りなら、あと五日で夜会は終わる。魔王が選出され、神性機巧も生まれている……かも知れない。

それが相棒なら、夜々の命はつながる……かも知れない。

逆に、もし教父の予見が真実でなければ。

別の解釈があるなら。雷真が敗北したら。最後まで夜々の命がもたなければ。

——考えたくない。雷真はかぶりを振り、ラザフォードに視線を戻した。気がかりと言えば、この男の存在もそうだ。

いまだに後の計画の全貌を理解できていない。面倒と手間をかけて、ややこしい策謀を遍らせ、実の娘すら利用して、何をしようとしているのか。

神性機巧を狙っているのは間違いないが、問題はその先——神性機巧を得て、彼は何をするつもりなのか。まさか世界征服、ということはないだろうが。

やがて、一行は学院長公邸に到着した。先日シグムントが大破させたため、かつて日輪が住居としていた別邸が臨時に使われている。

「入りましたえ」

学院長自ら扉を開け、雷真と夜々を応接間へと導く。内部はほどよく暖められ、掃除も行き届いていた。テーブルにつき、身を硬くして待っていると、秘書官アヴリルが紅茶の配膳台を押してきた。スーツの上から巻いたエプロンが可愛い。

アヴリルが軽く頬を染め、鋭い眼光を浴びせる。

「おかしな真似をすれば、首と胴体が生き別れになるぞ？」

雷真は眉をすくめた。正直、もう彼女にやられる気はしなかった。とは言え、学院長との力量差は依然として感じているので、おかしな真似をするつもりもない。

夜々と二人で茶をいただく。紅茶は意外にも美味で、まろやかな味わいだった。

「ふむ——私が手袋を授与したときは、まるで別人だな」

一見は優しい笑みを浮かべ、ラザフォードがそんなことを言った。

「あのとき、私が言ったことを覚えているかね？」

「……学生諸君の模範となるような、素晴らしい人形使いとなってくれ、だろ。あいにく最悪の不良学生になっちゃったな。けど、実戦ならそこそこやるぜ」

「私はむしろ逆の意見だ。君は技術的にはまだまだだが、ほかの優等生諸君より、よほど学院の理念を体現している」

「理念？ 俺が？」

「君の問題行動の数々には大いに悩まされた——が、それはすべて、君が自ら望み、挑み、己の行動で成し遂げたものだ。それこそが学院の伝統を貫く魂、独立独歩の気概と言える。あまり誉められたことではないがね」

「結局は誉めてもらえねえのかよ……」

雷真は苦笑した。だが、決して不愉快ではなかった。

「それで？ そんなふうに俺を持ち上げて、何かやらせようって腹か？」

「学院の地下に何があるか、知っているかね？」

雷真はかろうじて平静を装ったが、夜々の方はびくつと反応してしまった。

「……そういや、初夏の頃、あんたと一緒に地下に落ちたことがあったな」

シャルが時計塔を破壊したとき、アンリもろとも大空洞へ落ちた。

「あのとき、シンは俺を襲った。あれはあんたがやらせたのか？」

「私もこれで教育者の端くれだよ。学生を救せと命じたことはない。ただ、娘はやりすぎてしまふらしいがあつた。そして、それは私の責任なのだろう」

「他人事（ひとこと）みたいない言ひ方するな！ あんたのせいで、アリスは——」
夜々が雷真（かみまこと）の袖をつかみ、青ざめた顔でかぶりを振る。

アブリルの手がサーベルの柄にかかつている。雷真は浮かしかけた腰を下ろした。

「……あのとき、マダナスの鎌切（かみきり）を呼べば簡単に脱出できたはずだ。レメゲトンにも転移の人形くらい入つてゐるだろう。だが、あんたは使わなかつた。でかい魔術を使いたくない——そんな感じだった」

内心は白々しいと思ひながら、たつた今気付いたでいいと言う。

「あそこに、巨大で繊細な（魔術装置）があるんだな」

「その通りだ。我々は古文書にならない、（愚者の聖堂）と呼んでいる。実は先日、そこに賊が侵入しようでね。金蔵（きんぞう）が学院を占拠した、あの日だ」

急所に切り込まれる。ラザフォードの鋭い眼光が雷真に突き刺さった。

「賊は最深部に侵入し、制御基盤から（アインの石）を奪い去った」

「アイン——」

「虚無という意味だよ。虚無石。工学の分野では（要石）の方が通りがいい」

聞き慣れない単語だが、何のことかはわかる。雷真が抜き取り、いろりが硝子（しょうし）に渡し、硝子が日本軍への提出を拒み、結社に亡命する契機となつた、あの石——

ラザフォードはカップを皿に置き、膝の上で両手を組んだ。

「虚無石を取り戻してもらいたい。私からの『頼み事』だ」

無駄な抵抗だとわかつていながら、雷真は苦しまぎれに言った。

「……制御基盤って言ったよな？ 何の制御をしてたんだ？」

「（魔炉の一種）と言っておこう。魔力で動く内蔵機関だ」

嘘だ、と思った。あれはそんな存在ではない。本人が言ったのだ。

「わたしは、にんげん」

だが、それを指摘することはできない。指摘すれば、見たことになる。

「……何で俺にやらせる」

「理由を言っただけいいかね？」

はつきり凄みが増す。雷真は威圧を受け流し、軽い調子でこまかした。

「これでも多忙な身の上だ。一応、今夜から夜会が再開されるんだろ？」

「一応ではなく正式に、だ。ゆえに、期限は四日とする」

「四日——なぜだ？」

「夜会は五日後、決着する見込みだ。その前に取り戻さねばならない」

雷真は言葉を失った。ラザフォードもまた、教会とやらと同じ予測を立てている。算定

方法が同じということも考えられるが、信憑性はいや増した。

五日後にはやはり、仇敵と決着がついている。

「……断ると言ったら？」

「君は断らない。私は学生諸君、とりわけ君の友人たちを大切にしたいと思っているのだ。君と同じようにね。その上、私はアリスの父親でもある」

「まるつきり、脅しじゃねえか……」

仲間たちはともかく、アリスはラザフォードの言いなりであり、譲りようがない。

「実の娘まで人質に使う。清々しいほどの悪党っぷりだ」

雷真は聞き直り、投げやりに訊いた。

「どんな報酬をくれる？ タダ働きつてわけじゃねーんだろ？」

「（レーテの水）という高度な工業を知っているかね？」

思わず、雷真は前のめりになった。

「学院にあるのか？ あれはイオが造ったものじゃないって聞いたぞ！」

「学院にはない。サンプルを手したので、解析させているが——さすがに古代の秘法、複製に何年かかるかわからん。君の用には間に合うまい」

ラザフォードは意味ありげに夜々を見やった。どうやら、雷真が急ぐ理由を知っているらしい。何から何まで、お見通しというわけだ。

「複製は間に合わんが、私は顔が広い。融通してくれるよう、交渉してみよう」

「……交渉？ 強奪してくれるんだろ？」

「それもまた、選択肢のひとつだ」

軽口をすんなり肯定され、雷真は当惑した。

そこままでしてくれるのか。そんなに大事なものなら、なぜ盗み出すのを放置した？

……民の臭いを感じた。だが、餌はとてつもなく美味そうな匂いを漂わせている。

もし（レーテの水）を手に入れて、夜々の時間を再び（固定）できたなら。

（夜々を救える……！ 希望が生まれる！）

夢物語に過ぎなかった硝子の言葉が、具体的な（計画）になる。硝子の研究が間に合うかも知れない。夜々の時間を停めて、雷真が魔王になれば！

尻に飛び込む覚悟が決まる。少なくとも、硝子に相談してみる価値はある。

「わかった。虚無石とやらの奪還、引き受ける」

「雷真っ？ 本気ですか？」

夜々が驚きの声をあげる。だが、雷真はすっかりそのつもりで、

「なあ学院長先生、ついでにもうひとつ報酬をくれないか。前払いで」

「ほう。言ってみたまえ」

願いを告げる。ラザフォードはびっくりと片肩を上げ、探るように雷真を見た。

3

公廊を出ると、雷真は急いで寮へ戻った。

男子寮はまだ仮設だが、トータス寮がオンボロだったため、むしろ小奇麗こきれいになった気がする。隅取りは広くなり、日当たりも真好で、言うことなしだ。

暖かい室内に入ると、いろりが控えめな笑顔で迎えてくれた。

「お返りなさいませ雷真殿。夕餉を先にご用意します？ それともお風呂を？」

——一瞬、結婚っていいなあ、と思つてしまった。

「姉さまっ……ナチュラルに新妻定形文を決めるなんて……！」

着物の袖を噛み、夜々が悔しがる。いろりはあわてた。

「ちちち違つ……雷真殿、私にそのような邪念はありませぬ！」

「メシも風呂もいいから、出かける準備をしてくれ」

雷真の鋭い声を聞き、いろりと小紫に緊張が走った。雷真は二人に向かつて、

「俺たちはこれから、虚無石つてのを探す」

「それって、雷真がこないだ、地下から盗つてきたやつ？」

さすがに勘がいい。雷真はうなずき、しかし皮肉っぽく言い添えた。

「人間きが悪いぜ。誰かが盗ったその石を、取り戻せて命令だ」

「命令？ 誰から？」

「学院長だ」

ずん、と空気が重くなる。いろりは小紫を支えるようにして、意見を述べた。

「では、ただちに硝子しょうしのもとへ。心当たりがないか、たずねましょう」

「でも姉さま、硝子はさつき協会の人たちに連れて行かれました」

夜々の言う通りだ。どうしますか、と問うように、三姉妹が雷真を見る。

「協会に頼んでみるしかない。学内で協会と接点があるのは……」

「キンバリー殿、イオネラ殿、グリゼルダ殿、アンリ殿ですね」

「手分けしよう。小雲はイオ、いろりはお輔にさま、夜々と俺でキンバリー先生とアンリだ。上手くいっても、いなくても、中央食堂で落ち合おう」

「はい！」

三姉妹の声が重なる。雷真は二人を送り出し、自らは夜々と医学部に向かった。

——その一〇分後、何の成果もなく、医学部校舎を追い出されることになった。

「くそっ、面会謝絶かよ……」

未練がましく校舎を振り向く。窓から見える廊下を、看護師が忙しなく行き来している。

何があったのか、先ほどまでいたというキンバリーも、どこかへ外出したようだ。

雷真は不穏な気配を感じ取ったが、夜々は雷真の腕を抱き、にこやかに言った。

「アンリさんの意識が戻ったみたいで、よかったです」

「まあ……そうだな。それがわかっただけでも、きてよかった。——寒いのか？」

夜々はほんのり頬を染め、かぶりを振った。

「いいえ。それに、こうしていれば、あったかいです♡」

さらに身を寄せてくる。夜々に包まれた腕は、確かにあたたかかった。

「やめろ、歩きにくい」

などと文句を言いながら、雷真は彼女の体温に安堵する。

夜々はまだ、生きている。生きて、動いている。

「アンリさんの病室に、シャルロットさんもいたんでしうか？」

「そりや……いたんじゃねえか？ 久々の姉妹水入らずなら、邪魔するのも悪いな」

仕方ない。アンリとキンバリーはあきらめ、別ルートから協会に連絡しよう。

前回「電話を借りた」ので、拠点のひとつを知っている。最悪、そこに転がり込むことになるだろう。ほかに頼りになる人物と言えは――

（アリス……なんだけどな。学院に戻ってから、全然会えてない）

訊きたいことが山ほどあるのに。特に、夜々復活の経緯が知りたい。だが、あれっきり連絡がつかず、学内にいるのかどうかすらわからなかった。

「……知ってますか雷真。密着していると、普段以上に心が読めるんです」

おどろおどろしい声で夜々がつぶやく。雷真はぎょつとした。

「は、ほかの女のことなんて考えてないぞー」

「語るに落ちてますー 夜々と肌を合わせながら、よくもほかの女のことを……っ」

「嫌な言い方すんなー ほら、食堂まで急げー」

あちらの首尾はどうだったのだろうか、と気をもみながら歩くこと数分――

「あつ、きたー 雷真、姉さま、こっちー」

ガラス張りの中央食堂の前で、小柄なシルエットが手を振っている。

小紫だ。食堂の中にはもう、毛皮のコートを着たイオネラと、彼女そっくりの自動人形エヴァが待っていた。もう午後三時半を過ぎたので、食堂はすいている。

食堂に駆け込むと、開口一番、雷真は謝った。

「悪いな、イオ。呼び出しちまって」

「気にしなくていいよ。ほかでもない雷真くんのお願いだからね」

とろけるような、無防備な笑顔を見せる。雷真はなごんだが、夜々はふてくされた。

雷真はイオネラの対面に座り、早速、話を切り出した。

「もう聞いてるよな？ 協会に渡りをつけて欲しいんだ。もっと言うと、硝子さんの移送先を教えて欲しいんだが」

「はあ……雷真くん、零点だね」

「相変わらず点数からいなー」

「花柳斎先生は元（組織）だよね？ 移送先なんてトップシークレットでしょ？」

——その通り、いつときとは言え、硝子は結社の大幹部の身分にあった。拠点の組織構造など、結社の機密を握っている。敵が奪還にこないとも限らない。

「重要参考人なんだから。居場所なんて、教えてくれるわけないよ」

「……緊急の用件なんだが、それでも駄目かな？」

「協会がすんごく頭の固い組織だってことは？」

「うんざりするほど……わかってる」

それでも、時として、融通をきかせてくれることがある。今回はそのケースに該当するのではない。事情を詳しく話せば……。

（——って、できるわけがねえ！）

ラザフォードの極秘研究は協会の目を盗んで行われている。協会に詳しい事情を話すということは、ラザフォードを裏切り、彼の秘密を漏らすということ！
煩悶する雷真を見て、イオネラはくすりと笑った。

「わかったよ。私がうまくボカして、協会の偉い人と交渉するよ」

「やってくれるのか？ 事情も明かせないままの、不明瞭な状態で？」

イオネラはにつこりと、聖母のように微笑んだ。

「私は雷真くんを信じているからね」

雷真の行動には、それなりの意味があると。

決して、仲間たちを不幸にするためではないと。

となりを見ると、普段は無機質なエヴァの表情も、優しく見えた。

「……ありがとう、先生」

「こら！ 私たち、対等の友達でしょ？ 今度そんな他人行儀呼び方したら、もう工学の単位あげないからね！」

「明らかに対等じゃねえ！」

「ちゅーしてくれたら、特別に単位あげるかも？」

「おーい！ この教授、学生に不適切な関係を迫ってるぞー！」

夜々がテーブルを握りつぶしそうになっている。相棒が誤解を加速させる前に、雷真は話を切り上げることにした。

「じゃあ、協会の方は任せる。俺たちはちょっと出かけたいんだが、いいか？」

「いいけど、無茶しちや駄目だよ。雷真くんはトラブルメーカーなんだから」

「俺がトラブル起こしてるんじゃないくて、あっちから寄ってくるんだよ」

「それもひとつの才能だね。だから、積極的な行動はダメ。約束できる？」

「メシを食いに行く、くらいは？」

「それならOK。夜会が終わる頃に、もう一回会おう」

「夜会が始まるまでは……二時間か。じゃあ、三時間後くらいに」

話がまとまる。だが、イオネウは席を立たず、言いにくそうに言った。

「……ねえ、ロキくんのこと、試かないの？」

「何のことだ？」

「ジブリールだよ！ あんな高性能機、どうしてタダであげたのとか。どうして魔活性不協和の原理を無視できたのとか。機巧的な秘密とか、弱点とか！」

「いや別に……。攻略法なんざ自分で考えるし、特段ひいきとも思っていない。もともと、自動人形の比較で言えば、こっちが圧倒的に有利だったんだ」

ケルビムは量産化を念頭に置き、コストまで考慮して設計された機体。一方、雪月花は採算を度外視し、一体の値段が軍艦一隻と吊り合うという最高級人形。

「あの新型、魔術回路を三つも四つも搭載してゐるんだろ？　なら、これで五分の勝負さ。つっても、俺の相棒たちは世界最高、勝ちば振るがねーけどな」

「……花柳斎先生の人形は確かにすつこいよ。よだれ出ちゃうくらい。だけど、うちの子だって、そうそう見劣りしないからねー」

「上等。夜会の舞台で見比べてくれ」

ようやく、イオネラの顔に笑みが戻った。まぶしそうに雷真を見つめる。

「キミって、ほんと凄いいね。なかなか言えないよ、そうゆうこと」

「阿呆なだけさ。それじゃ、協会の方をよろしく頼む」

「うん、三時間後にまたね。時間厳守だよ」

「はいよ、先せ——じゃない、イオ」

「よくできましたー」

イオネラはエヴァをとめない、食堂を出て行った。厚手のコートは暖かそうだが、あの下が全裸かもしれないと思うと、風邪を引かないか心配になる。

イオネラと入れ替わりで、いろりが食堂に到着した。

「おう、いろり。どうだった？」

表情が曇る。彼女が悪いわけではないのだが、いろりは申し訳なさそうに言った。

「グリゼルダ殿は不在でした。硝子の護衛として駆り出されたそうです」

「あ、お師匠さまが護衛なのか。それはだいぶ安心だな」

「それと、アリス殿とも連絡が付きませんでした」

「そっちも当たってくれたか。さすが、いろりは気が利くぜ」

「そ、そのようなことはっ」

「姉さま……あざとい点数稼ぎ……！」

小紫がちょこちょこ寄ってきて、妙に色っぽく雷真を見上げた。

「ねー、夜会が始まるまでどうするの？ 男と女があつたまること？」

「何を言ってるのか知らねーが、まずは腹ごしらえだ。あつたかいもんを食おう」

「でしたら、私が用意します。半時ほどいただければ」

いろりが寮に戻ろうとする。その手をつかみ、雷真は三姉妹に言った。

「いや。街に食いに行こう。みんなで外食だ。たまにはいいだろ？」

「……お気遣いは嬉しく思いますが、我らは雷真殿の登録人形、市街地に出すことは」

「それが、できるんです」

夜々が横から言う。それから、確かめるように雷真を見た。雷真はうなずき、

「そういうことだ。だから、ブーツとやろうぜ！」

と、たきつけるように言った。

ただし——そうすんなりとはいかなかった。

食堂を出て、正門方向へ向かう途中、背後で何かが光った。

「見てください雷真—— あっちで何か——」

台詞は九割、聞こえなかった。突然の轟音で、聴覚が機能不全に陥る。

急いで背後を振り向くと、残像のような影が網膜に映った。

天を衝いてのびきった、長い、長い、大蛇。

法甲が夕陽を浴びて輝く。その大蛇の頭部には、見覚えのある少女が立っていた。

大蛇が消え失せる。自分だけの幻視かと思ったが、三姉妹もぼかんとしていた。

あたりは静かだ。最初に聞いた轟音は、砲火の音に似ていたのだが……。

「これ、〈急激結界〉ってやつか？」

中で大蛇を撃とうが魔術を使おうが、外側からは気付かれない——という高度な結界が

存在する。雷真が過去に体験した限り、それを好んで使ってくる相手は……。

「また結界かよ……今夜からもう、夜会が始まるってのに」

「今の光景、すぐそこですね。確認に行きますか？」

いろりが慎重に問う。雷真が黙っていると、夜々がもどかしそうに袖を引いた。

「どうしたんですか？ 行きましょう！ 先手を打たないと！」

——正しい意見だ。後手に回れば、不利になる。いや、既に後手なのだ。あちらはもう

学院の敷地内で暴れているのだから。

だが、雷真の行動はいつになく遅い。夜々はますます焦れつつあった。そうにした。

「雷真！」

「……小紫、その医学部まで走って、誰でもいいから教授に伝えてくれ」

「おっけー！ 雷真たちは？」

「先に街へ向かう。運河沿いに行くからよ、小紫は後から追いついてこい」

夜々が驚いた様子で、雷真の体にしがみついた。

「のんびりしすぎです！ あの蛇が見えなかったんですか？ すぐそこでソーネチカさんが襲われてるんですよ！」

「学生の出る幕じゃない。警備と教授に任せよう」

夜々は裏切られたような顔をした。その視線に耐え切れず、雷真は言葉を足す。

「女帝さんとは夜会でぶつかる。それに、何かの見間違いかも知れないだろ？」

「それでも！ いつもの雷真なら、助けに行きます！」

夜々は疑わしげに、それ以上に悲しげに、雷真を責めた。

「どうしちゃったんですか？ 雷真は馬鹿で、考えなしで、単細胞なのに……っ」

「……少しは利口になったんだよ」

「嘘です！ それとも、ほかに何か理由が——」

はっとする。夜々は両手を広げ、元氣よく飛び跳ねて見せた。

「夜々の心配なら、いりません！ ほら、もう泊ったんですから！」

いよいよ、雷真は窮した。それが一番、雷真を困らせる台詞なのだ。

「……ならもう、ここで待っていてください。夜々が見てきます！」

「何だって!? 待て、夜々——くそ！」

制止は間に合わない。夜々は金剛力を勝手に起動し、百メートルも先にいる。

雷真は凍えるような気分で、遠ざかる粗棒を追いかけた。

4

時間は少し戻り、雷真が学院長と紅茶を飲んでいた頃——

硝子は黒コートの二人に護られ、学院の正門へと向かっていた。

かつて城壁が囲っていた敷地は、今は鉄の柵が巡らされているだけだ。その柵の向こうに、橙に色づく機巧都市が見える。都市と学院の境界に新たな正門が築かれていて、そこに小さな箱型自動車が停まっていた。

金の瞳の魔術師が、すまなそうに車を示す。

「粗末な足ですまない。豪華な馬車を用意すべきだったかな？」

「いえ、私にはこれで十分。ただ、同乗者が可愛い女の子ならよかったわね」

「それは僥倖。この先のエスコートは綺麗どころが務める」

後部座席のドアを開ける。と、中で足を組んでいた者が、皮肉っぱく笑った。

「綺麗どころとは嫌みですか、山鳩の同胞？」

「まあ、キンバリー先生……」

「こんな形で再会するとは奇遇だな、花柳斎殿」

ゼムリーン市では結局、最後まで顔を合わせなかった。

「ごめんなさい。このたびは本当に、お騒がせしたわ」

折り返し正しく頭を下げる。さすがのキンバリーも驚愕し、眼鏡がずれた。

「……貴女にそんな素直な謝罪を受ける目がこようとは、夢想だになかったよ」

「同感だわ。こんな気持ちになるなんて、私も思っていなかった」

「もっと詫びてくれてかまわんよ。あの問題児のおかげで、私は滅惨となり、足を貰かれ、

始末書を書かされ、処刑されかける日々だ」

キンバリーは意地悪な笑みを浮かべ、硝子を追い詰めるように言った。

「それに、『お騒がせ』はまだ続いているだろう？ アインの石を渡したまえ」

空気がにわかに緊迫する。黒コートたちも、硝子の一挙手一投足に注目している。

硝子はふつと口元をほころばせ、カラの両手をひらりと振って見せた。

「もう逃げも隠れもしないわ。これからゆっくり、そのお話をしましょう」

「……そうしてもらえたと助かる。貴女の身柄、正式に魔術師教会が預かろう」

「よろしく——いえ、こう言うべきね。どうぞ、おてやわらかに——」

自然と笑みがこぼれる。そんな硝子を見て、キンバリーはやはり驚いたようだ。

「貴女は少し……変わったな。つまり、その……丸くなった」

「あら。「丸くなった」なんて、女に言うこと？」

「ふくよかになった、と言い直そうか？」

笑い合う。空気の弛緩とともに、寒さまでゆるんだような気がする。

「どうぞ、車内へ。少し待ってくれ。間もなく護衛が到着——したようだ」

直後、木立ちの向こうから、二人の怪物が現れた。

「なぜついてくる——部外者はすっこんでいろ！」

「いやいや、護衛は私の職分ですし。あと私、難しい英語はわかりませんし」

二十そこそこの女教授と、女と見間違ふような刺客。

グリゼルダと雲雀だ。怒り顔のグリゼルダに、雲雀が懇願するように言う。

「オーウ、ミス、そんな怖い顔をしないでください。ここは年上の顔を立ててくださいよ——あ、ひょっとして私より年上でいらつしやる？ 行かず後家？」

「ぬぐつ？ き、き、きつ、貴様……言つてはならぬことを……！」

「マスター、お気を確かに」 「まだ晩婚というほどではありませんわ」

「慰めるな馬鹿ども——」

二体の機械天使を怒鳴りつけ、グリゼルダは涙目で雲雀をにらんだ。

「くくく……面白い。この際、力尽くで排除してやるぞ。私を愚弄した馬鹿者め！」

「やめたまえゼルダ。一体、何をやっている」

キンバリーが車を降り、あきれ顔で仲蔵に入る。

それから雲雀を見て、硬い口調で言った。

「先日、ゼムリーンでお目にかかったな。花柳斎殿の護衛と聞いているが、今日のところはお引き取り願おう。彼女はこれより、我らの預かりとなる」

「私は置いてきぼりですか。魔女さんは同行を認めてくれましたが」

「貴殿との同乗はごめんこうむりたいな。魔王に手傷を負わせるような御仁だ」

雲雀がざくりとする。この男がそんな仕事をするとは思わなかったので、硝子は思わず噴き出してしまった。情けない顔の雲雀に、車中から声をかける。

「お世話になったわね、雲雀さん。少将によろしく伝えて頂戴な」

「……わかりました。貴女もお気をつけて」

一瞬、雲雀の眼光が鋭さを増した。

気のせいだろうか。雲雀は普段通りの闊抜けた笑顔を残し、去って行った。

「ふん……不愉快な男だ。いずれ切り身にしてやる！」

グリゼルダが殺気を垂れ流す。キンバリーは二体の機械天使を見て、

「君と二体は車外を頼む。飛行で随行できるかね？」

「女史よ、それは誰に言っているんだ？」

平然と答える。キンバリーはうなずいて、発進を指示した。

金の瞳の魔術師が助手席に収まり、ゆっくり車がすべり出す。

硝子はシートに身を沈め、キンバリーに訊いた。

「それで先生、私はどこへ連れて行かれるのかしら？」

「我らが教父、《時の翁》に会ってもらおう」

「——ファザータイムに？」

驚きを隠せない。一介の人形師が協会の指導者に会うなど、完全に予想外だ。おまけに、こんなに早く明かしたということは、さほど時間がかからないということである。

「機巧都市に……いらしているの？」

「機密だがね。貴女と直に会い、自ら審判をくだすとの仰せだ」

先ほどのまでの張機が嘘のように、硝子の体が硬くなった。

灰十字は協会の意に染まぬ者を超法規的手段で断罪する。その死神を手足のように使う者——世界一《黒幕》という言葉が似つかわしい人物、それが教父だ。

果たして、どんな目に遭わされるのか。交渉の余地など、あるのか。

（……いえ、余地がないのなら、作るまでよ）

待っている者がいるのだ。こんな私の帰りを、待っていてくれる子どもたちが。

車はなめらかに都市を駆け抜ける。大通りを抜け、マンチェスター方面へ。高い建物が並ぶ、曲がりくねった道に差し掛かると、急に速度が鈍った。

人通りが激しい。なかなか進まない車中で、キンバリーが口を開いた。

「時間を無駄にしたくない。ここで情報交換と行こうか。——と言っても、いきなり尋問したところで、上手くはぐらかされる」

「まあ、ずいぶん信用がないのね」

「逆だよ。貴女の知性を高く評価し、信用しているという意味だ。そこでまず、こちらの手札を見せておこうと思う。貴女が石を渡したくなるように」

「あれがもし私の手にあるのなら、誰にも渡さないわ。だって私も興味があるもの」
「人間を造るために、かね？」

「ええ、そう。生命の樹から実をもうで」

「神の子を造り——神と等しい者になる、か」

キンバリーは肩を揺すり、皮肉っぽく笑った。

「そう肩肘張らず、聞いてくれ。我々は長期にわたり、結社の内情を探ってきた。貴女が先日やかしたような、考えなしの潜入ではなく、地道な内偵でね」

ずいぶんな言われようだが、無謀だったという自覚はあるので、硝子は黙る。

「調査の結果、数合わせのお飾りではない、有力な誘惑をリストしている」

「凄いのね。だけど、それが私に関係のあること？」

「あるとも。その中に、日本人の名があった」

「——」

「貴女が知っている——聞きたがっていた——名ではないか、と我々は考えている」

硝子^{しょう子}が結社内部に入り込んだ、もうひとつの理由。

あの人を殺した者。金薔薇^{きんばい}とつるみ、花柳斎^{はなやうさい}を追いつめた者――

紫薔薇^{むらさきばい}はやはり、日本人か！

誘うような笑みを見せられ、硝子^{しょう子}は歯噛み^{は噛み}したくなった。

「そんな顔で、私を釣ろうって言うのね」

「そうなれば理想だが、その前にまず、貴女^{あなた}の誤解^{ごかい}を解いておきたいな」

「誤解？」

「魔術師協会^{まじゆしけい}は、決して貴女の敵ではない」

真顔で断言する。

前席の二人も笑っていない。騙す^{だます}ためではなく、真摯^{しんし}な沈黙に思えた。

「協会はバチカンの庇護^{ひご}のもと、宣教師と行動をとみにし、各地の魔術倫理を統制しよう
と試みてきた。それは価値ある行動だったと私は思う」

「……私も同じ意見よ。だけど、協会が定める倫理規定は、私の研究の枷^{かせ}になる」

自由を無制限に認めては、人類全体に不幸をもたらすと協会は考えている。

硝子の考えは逆だ。人間の知的探究心に枷など不要、むしろ害悪だと思っている。

「私は我慢が嫌いなもの。どちらかと言えば、薔薇^{ばい}の魔女に近いのでしょうね」

「いや、貴女の思想は学院に近い。貴女は決して、非道な行いを望んではないな」

「――私を信じるとおっしゃるの？ 私は禁忌^{きんぎ}人形を生み出した……その意味するところ

はおわかりでしょう？ それに、私は一度、書齋の席にも座ったわ」

「だが、貴女が生み出した人形たちは、三人そろって善良だ。彼女たちの倫理は西洋人の正義と大差ない……どころか、より倫理的であるとすら思ふよ。それは遠り手、すなわち貴女の倫理を反映している」

同乗の二人も異論を挟まない。彼らはそこまで硝子を買っているのか。

「学院は本来、探究の自由とモラルの両立を目指した組織だ。ゆえに『魔王』の選定権が付託されている。その本質が正められたのは、ここ十数年の話さ」

「——エドワード・ラザフォードによつて？」

「そうだ。彼は『実力主義』、『学府の独立』、『探究の自由』を都合よく拡大解釈している。貴女は確かに禁忌研究に手を染めたが、貴女の本性は邪悪ではなく、我々と共存できる。

貴女と我々には、敵対する理由がない」

しばらくのあいだ、硝子は口をつぐんでいた。

不満があるのでも、警戒したのででもない。ただ本当に、驚いていた。

「……正直、意外だわ。灰十字の戦士さまは、死神だと思つていたから」

「間違つてはいない。だが、我々が卑怯な傍観主義者で、戦争やら政治には首を突っ込みたがらないということも、貴女はご存知だろうか？」

「その傍観主義のおかげで、おせっかい焼きの彼女が譴責を受けるわけだな」

助手席の魔術師が口を挟む。キンバリーは惜々しげに舌打ちした。二人の飾らない態度

を見て、硝子の警戒心が溶けていく。

これが彼らの手口なら、実に巧妙だ。すっかり、彼らの話を聞く気になっている。

「——鴛の同胞よ」

突然、金の瞳の男に苦悩がにじんだ。

「いやはや……先日に引き継ぎ、情けない話だ。これはしてやられた」

「急に何です？ 一体何が、してやられたと……？」

「急ぎ、花柳斎殿を安全な場所へ移送する。今回ばかりは詰んだ、かも知れん」

「お待ちを。一体、何を言つて——」

突然、車体が大きく前に傾いた。低速だったのに、凄まじい加重がかかり、硝子の頭が前のシートにぶつかる。運転手があわててブレーキを踏んだらしい。

文句を言おうと頭を上げると、車はもう、黒マントの魔術師に囲まれていた。

そんな馬鹿な、と思った。当然、幻覚魔術を疑う。

こちらは凄腕ぞろい。車外には魔王グリゼルダもいた。なのに、こんな至近距離にまで敵の接近を許すはずがない。まして、ゼムリーン市でも似た状況になった。灰十字が何の対策も講じないわけがなく、当然、警戒していたはず。

だが硝子の機巧服帯を通して見ても、魔術師たちの姿は消えない。

つまり——幻覚ではない？

考えている間に、無数の銃弾が飛んできた。

魔力の壁がそれを阻む。キンバリーが展開した（魔防）の壁だ。その強度は鉄壁だが、銃声は一向にやまず、キンバリーの疲労が見る間に蓄積する。

硝煙の煙が充満する中、硝子は機巧眼帯を操作し、敵の正体をとらえようとした。敵は機械式のゴーレムを連れていて、魔術ではなく火器で攻撃してくるようだ。

（あんなやかましそうな機械人形、どうやって調合いに入れたの……？）

まして、敵の数が多い。少なく見積もっても百人規模。これだけの人間が接近していて、こちらが気付かないはずがない。

——いや、逆か？ こちらが接近したのだとしたら、どうだ？

たとえば、遮蔽結界に飛び込んだとか。

それならば、後援のダリゼルダと切り離された説明もつく——

しかし、見極める余裕はなかった。魔防を貫き、鉄の塊が突っ込んでくる。

それが砲弾だと理解したときには、紅蓮の炎が視界を埋め尽くしていた。

フロントガラスが砕け散り、高温のガスが車内を蹂躪する。蒸発したように消える己の手足を見ながら、硝子は自分が生み出した、三姉妹のことを思った。

とおんっ、という爆発音とともに、自動車が吹っ飛んだ。

衝撃でひしゃげ、つぶれたパンのようになった物体が、標識をなぎ倒して転がる。

そのさまを、付近のアパートの屋上から、素しげに見下ろす淑女がいた。

衣装は学院の制服だが、ウエストをコルセットで絞り、中世の貴婦人めいたシルエツトを造り上げている。小さな尻の下には、機械の大蛇の頭部があった。

「ああ、綺麗だね。これが君への手向けの花だよ、アストリッド」

芝居がかった仕草で手を差し伸べる。そして、ゆったりと真横に目を向けた。

淑女の眼前には、先刻から真珠色の剣が迫っていた。ただし、その速度は鈍い。強靱な魔力の壁に阻まれ、カタツムリのようにしか進めない。

攻撃に特化した完全統制振動の刃が、これだけの抵抗を受けている。使い手も驚愕しているらしく、紋様の浮き出た左眼周りに、冷や汗が光っていた。

「ふふっ、迷宮の魔王——だっけ？ こっちに気を取られていて、いいのかい？」

「……くそっ！」

口汚く罵り、敵はすべるように後退した。淑女は深追いせず、くすくす笑う。

「行っちゃったね。それじゃ後のことは皆に任せて、私たちは学院に戻ろうか。今日から夜会が始まる——遅刻はよくないだろう？」

大蛇をさすり、立ち上がらせる。大蛇は淑女を頭にのせて、するすると音もなく、夕陽と火炎で黄金に染まる市街へ降りていった。



Chapter 2 運河の夜

1

「戻れ、夜々！」

夜々は命令には従わず、ちろつと舌を出した。ドタバタやっっているときならともかく、実戦に準じるこの状況で、こうも反抗するのは珍しい。

まるで三年前に戻ったようだ。夜々の信頼を得ていなかった、あの頃に。

（そんなに不甲斐ねえかよ、今日の俺は……！）

夜々の胸から血があふれた、あの瞬間の光景がフラッシュバックする。水槽の中で標本のように眠る姿も、その前で感じた「取り返しのつかない」恐怖も。

このまま夜々を行かせては、今度こそ失くしてしまうのでは……という雷真の心配をよそに、あの夜々は元氣一杯で、久々の疾走を楽しんでいるように見えた。

やがて急に林が途切れ、貯水池が出現した。

湖面が夕陽を照り返している。あたりは静寂そのもので、閃光や爆音のたぐいは存在しない。きよろきよろしている夜々を、雷真は背後から抱きすくめた。



「待てって！ 勝手に先行すんな！」

「離してください！ 軟弱者の雷真なんて知りません！」

「わかったよ！ 小紫、八重霞で一带を上書きするぞ。結界の穴を探してくれ」

「はい！」

夜々は驚いて雷真を見る。雷真は事も無げに言ったが、それは夜々も知らない、高度な運用方法だ。先日、夜々抜きで硝子を救出するため、雷真も技を磨いている。

最大出力の八重霞が、周縁に眩惑の効果を及ぼそうとする。一带は（結界）と（眩惑）、二つの魔術にさらされることになり、魔活性不協和の原理が適用された。

魔術がせめぎ合い、空間が不安定になる。小さな雷電がパチパチと響けた。

小紫が周縁に目を凝らし、やがて、ほつれを見つけ出す。

「あつた！ そこが入り口！」

雷真は魔力の糸を伸ばし、強引にこじ開けた。最初に開いたのは小窓くらいの亀裂に過ぎなかったが、激しい爆発音と、荒れ狂う魔力が伝わってきた。

「あ、やっぱりソーネチカさんのヘビです！」

夜々が示す先、湖面に水しぶきを立てながら、大蛇がすべっている。そのすぐ横を砲弾がかすめ、頭部に座すソーネチカを揺さぶった。

「雷真殿……どうされますか？」

いろりが雷真の判断を仰ぐ。本音を言えば、今すぐ引き返したいところだが……。

「小紫はここに残って、結界の穴を維持してくれ。夜々といろりは俺と突っ込む」

「はいー 夜々はいつでも突っ込まれる覚悟ができていますー」

「突っ込まれないからな？ こっちが突っ込むんだからな？」

夜々は瞠（も）しそうだ。一方、いろりは責めるような目をした。

言いたいことはわかるが、夜々から目を離す方がもつと怖い。雷真は二人を連れて結界に飛び込み、大蛇の方へ走った。いくらも行かないうちに、流れ弾が飛んでくる。

人頭大の鉄塊——榴弾（りゅうだん）のようだ。回転する弾体がスローモーションで視える。既に体は金剛力（こんごうりき）を使おうとしていたが、思わず魔力の放出を止めてしまう。当然、致命的な隙（すき）が生じる。死ぬ——かと思ったが、砲弾はあきつての方へすっ飛んで行った。

見上げると、いろりが氷壁を生み出している。鉄鋼のように締まった氷が、砲弾をそらしたらしい。夜々が立ち止まり、猛然と抗議してきた。

「何をしてるんですか雷真っー」

「わ、悪い、ちょっと、その、敵の位置に気を取られてた。ありがとよ、いろり」

「造作（ぞうさく）ありません。雷真殿は私がお護（ご）ります」

「姉さま……ここぞとばかりにポイント上乗せ……っ」

「次がくる前に走れー もうすぐそこだー」

前方ではソーネチカの大蛇が暴れている。うねりながら鎌首（かみづ）をもたげ、大きく口を開く。突き出した舌の先から火花が散り、発砲音が連続で響いた。

（機関銃？ そんなものまで内蔵してるのか）

曳光弾が混じつていて、射線が眼で追える。本々が目隠しとなり、敵の居場所は判然としないが、ソーネチカは跳弾の音で位置をつかんだ。

尾の一撃を見舞う。それは大本ごと、自動人形をなぎ払った。

瞬間的な速さと強さは金剛力に匹敵している——気がする。当然威力も凄まじく、土砂が圓穴泉のように噴き上がり、クレーターができた。

（こいつ、やっぱすげえ！）

さすがはオルガの好敵手。ロキやシャル、目輪の陰に隠れがちだが、女帝はあのオルガが一目置く少女だ。学生総代と渡り合えるだけの地力がある。

大姓にやられ、牛に似た自動人形が宙を舞う。背中に砲身を背負った、四足歩行の機関兵器——日本軍の教練で写真資料を見たことがある。ロシア軍が目露戦争に投入した、新しい型の人形兵器だ。

自動人形の自律性で「移動」と「照準」を制御し、魔術ではなく大砲で攻撃する、二十世紀らしい合理的な兵器だが、馬に砲を牽引させた方が安上がりだ。

敵は一体ではない。さらに砲撃が繰り返される。雷真のすぐ目の前にも着弾し、焼けた鉄片と土くれが飛んできた。

「ここは戦場かよ……くそつたれ！」

鎧塚が鼻を料す。思わずついた悪態で、ソーネチカがこちらに気付いた。

「ライシン・アカバネ!」

「よそ見すんな!」

砲弾が大蛇の頭部をとらえ、大爆発が起きる。

一瞬、ひやりとした。が、大蛇は無事で、煙の中から肥大化した頭部が現れた。

装甲が厚みを増し、大盾のように展開している。

（装甲を開いた……いや、増やした? 形や厚みが変わったな……?）

機巧装置か、それとも魔術回路の効果だろうか。

「雷真! 大砲をつぶしました!」

骨めて欲しそうに、夜々が遠くから手を振る。さらに紫電のように動き、機械牛を蹴り飛ばす。それだけで砲がへし折れ、横倒しになった。

雷真は不安を胸にしまい、夜々が魔力切れを起こさないよう、適度に魔力を渡してやる。ソーネチカも攻撃の手をゆるめず、戦場を蹂躪した。

ほどなくして、制圧が完了する。頭合いを見て、雷真はいろりに合図を送った。

「いろり。生け捕りにするぞ」

「お任せを」

とつくに準備は終わり、湖岸全体に氷の粒が舞っている。

しゃこんつ、と小気味のいい音とともに大気が氷結。氷牢がいくつもできあがり、十数

人の魔術師を傷め負わず閉じ込めた。

「使い手がいい加減だったのに、すげえな……いろりは」

「造作もないことです。ちなみにこちら、囚獄殺し（水魚縛り）でございます」

「雷真― 賊が消えます―」

夜々の言葉通り、檻に囚われていた魔術師が、透明になって消えていく。

「……何だ？ どうなってる？ これは転移じゃねえよな？」

消滅に魔力を感じない。魔力で消しているわけではない……ようだ。

やがて、頭上の空に亀裂が入り、一帯を包んでいた遮蔽結界が壊れた。

「らしいーん―」

小紫が身軽に枝を蹴り、びょんびょん跳んでくる。

「おう、小紫。結界はおまえが壊したのか？」

「えっ？ 私じゃないよ？」

雷真の手前に着地して、小紫は困惑の表情を浮かべた。

「こっちで術者を倒したんでしょ？」

「……いや」

「退いたのですわ。倒せてはいません」

きゅるきゅるとギアが鳴き、大蛇が巨大なこうべを垂れ、ソーネチカを下ろす。

それから、バナナの皮がむけるように、口から三つに裂けた。それぞれが長さを縮め、

関節の位置を整えて、二メートル大の機械式ゴーレムとなる。

その精密な機構に驚きながら、雷真はソーネチカにたずねた。

「怪我はなさそうだな。大丈夫か？」

「愚問です。わたくしを誰と心得ますの？」

「誰って、そりゃ、まあ……女帝さんだ」

ソーネチカはじつと言真を見つめた。雷真は少し怯んで、

「何だよ？」

「お氣になさらず。目撃者を消すべきか、思案していただけですの」

「氣にするわー どうすりゃスルーできんだよ？」

「貴方の助勢に感謝します。一人でやるより楽でしたわ」

「今の不穏な発言聞いた後だと、ものすごく形式的な礼に聞こえるんだが」

「噂通りの命知らずですのね。わたくしになど、構わなければよかったものを」

ソーネチカの灰色の瞳が、ふっと剣呑な光を宿す。

「危険な場所に入るな——子どもの頃、教わりましたでしょ？」

「俺もそうしかかったんだが、俺の相棒がどうしても助けるってきかなくてさ」

夜々に目をやる。夜々はどす黒いオーラを引っ込め、愛想笑いを浮かべた。

「その子が……？」

ソーネチカの瞳から毒気が消える。雷真はほっとして、話を進めた。

「さっきの連中は何だよ？」

「さあ。存じません」

「連中が最後に使った魔術、ありや何だ。消えちまったやつ」

「魔術は魔術師の命ですわ。そうやすやすと秘密を明かせまじょうか」
「だよな……、と神妙な顔でうなずきつつ、雷真は内心で苦笑した。

（それ、本当は知ってるって言っちゃったようなもんだぞ）

連中の魔術について訊いたのに、秘密は明かせないと答えてしまった。つまり、両者の魔術は同じもの——ソーネチカは敵の正体を知っている。知っていて言いたくないということは、ロシアの国内事情だろう。

「で、この一件、学院には何て報告するんだ？」

「何とでも。見たままを伝えてくださってかまいませんわ」

「俺にやらせるつもりかよ。あんたが当事者だろ」

「倒したのは貴方です。わたくしは何も存じません」

言うだけ言って、立ち去ろうとする。雷真はその背に向かって叫んだ。

「おい、一人歩きすんなー 狙われたばっかでー」

「わたくしにも護衛がおります。結界が消えた以上、すぐに合流できますわ」

一方的に告げた後、思い直したように振り返り、スカートのすそをつまむ。

「ではまた後ほど。夜会で会いましょう」

優雅に一礼。動揺している様子も見せず、平然と去っていく。

「荒事には慣れてるってか……襲撃慣れしてるって、どういうご身分だよ？」
得休が知れない。呆けていると、夜々は期待に満ちた目を雷真に向けた。

「これからどうするんですか？ やっぱ、ソーネチカさんの身邊を調査——」
「放っておくさ。それより、さっさとメシ食いに行こうぜ」

夜々がふくつとふくれる。雷真はあわてた。

「何ふくれてんだよ。普段は女にや関わるなってるさいくせに」

「雷真こそ、普段ははいはい夜這いに行くくせに」

「行つてねえええ！ いいからメシ！ 俺はおまえたちと食に行きたいの！」
夜々の腕をつかむ。夜々は赤くなり、急に大人しくなった。

「あ、警備がきたよ！」

小紫が耳に手を当てる。直後、木立ちの向こうに複数のライトが揺れた。

先頭で指揮を執っているのは、サーベルを帯びたスーツの女性、アヴリルだ。

「あいつかよ……。こりゃ捕まったが最後、尋問は長引くぞ」

「どうします？」

「逃げよう！」

「はい！」

三姉妹の返事がそろそろ。四人は足音を殺し、さっさと貯水池を後にした。

「わあ……」

と言ったきり、夜々はしばらく絶句していた。

日没後の残照と、ともし始めた無数のあかりが、言葉を奪うほどに美しい。石造りの橋の上から、街の灯が見下ろせる。大きいのも、小さいのも、星のまたたきのように揺れている。冬の冷気に光は透え、神々しいとすら思えた。

夜々は興奮気味に、欄干から身を乗り出した。

「やっぱり綺麗ですね、運河！ あっ、あつちの黒いの、海です！ 船！」

「こ、これ夜々、はしゃぐな！ 落ちる！ 迷子になる！」

駆ける夜々をいろりが追いかける。夜々は俊敏に逃げ回り、つかまらない。猫がじゃれ合うような光景に、小紫がくすくす笑い出した。

「姉さまたち、子どもみたい」

「おまえは慣れてる感じだな」

「そうなのです雷真殿——小紫ときたら、席を抜け出して街遊びばかり……」

牙先が向く。小紫は雷真の背に隠れ、えへへと笑ってごまかした。

（小紫がいなくなったとか言って、いろりが捜しにきたこともあったな……）

夏期休暇の頃だ。夏のおいをかいたような気がして、胸が詰まった。

夜々を追いつのに疲れたのか、いろりが戻ってきて、とがめるように言った。

「雷真殿、なぜ外出を？　今は学院から離れぬ方がよいかと思えます」

「今できることは『待ち』だけだ。けど、待ってるだけってのもつらいだろ」

「それは……そうでしょうが」

「バツタリ硝子さんに遭遇するかも知れないしき。少し羽伸ばそうぜ。夜会が始まるまでの、たった二時間弱だけどな」

「そういうことでしたら、このいろり、精一杯、羽を伸ばします」

「うん。おまえはもう少し肩の力を抜け」

「畏まりました。——これ、夜々！　もう勝手は許さぬー」

いろりは夜々をつかまえ、強引に手をつないだ。小紫もうらやましくなったらしく、姉たちを追いかけて行つて、空いている方の夜々の手をつかむ。

三姉妹が手をつなぎ、夜の街を歩き出す。

三人を邪魔しないよう、雷真は少し離れて姉妹を追った。

夜々がもの珍しげに何かを示し、いろりが丁寧に説明し、小紫がチャチャを入れてい

る。三人の表情は明るく、楽しげに見えた。いろりと小紫は街歩きにも慣れているだろうが、

そんなことにも、雷真は今日まで、思い至らなかつた。

もうずっと長いあいだ、自分のことばかり考えていた気がする。

今さら埋め合わせたいなんていうのは、虫のいい考えだろうか……。

「雷真？ やっぱりソーネチカさんのことが気になるんですか？」

夜々がこちらをうかがっている。雷真は迷いを振り切り、明るく言った。

「いや。何を食おうかと思つてよ。店の希望はあるか？」

「はいー！ お肉食べたいー！」

夜々と手をつないだまま、小紫が手を挙げる。雷真は笑った。

「どこの店でも出してくれるよ。いろりは？」

「私は詳しくありませんので……夜々、どうだ？」

「夜々は——あのお店がいいです」

「どの？」

「雷真がシャルロットさんと、いかがわしい行為に及んだお店です……。」

「そんな事実はない！ けどわかった！ そこにしよう！」

学院にきて間もない頃、シャルと二人で入った店だ。雷真は記憶を頼りにレストランを

探し、あのときと同じように、営業中の看板を見つけた。

外観は石造り。歴史を感じさせるたたずまいだが、畏まった感じはしない。

前菜に鴨のテリーヌ。スープは美しい飴色で、インド流りのスパイスが香り高く、英国らしからぬ——と言うと失礼だが、ととのえられた味わいだった。

お待ちかねの仔牛が運ばれてくると、小紫は目を輝かせた。

林檎酒の風味を利かせたクリーム煮。ふんわりやわらかな肉から旨みがあふれ、洋食には疎い雷真でも、素直に美味いと感じる。

小紫が頬張って、うっとりとした。

「美味しー♡」

「そりゃよかった。夜々は？」

夜々はナイフをぎらつかせ、ふふふと暗く笑った。

「これがシャルロットさんをたらし込んだ味覚……っ」

「……まあ、顔付けしたのは認める」

「というのは冗談です。とつても美味しいですよ」

微笑む。それからフォークを持つ手を止め、自信なさげにつぶやいた。

「ねえ雷真。ひょっとして、なんですけど、自動人形使用制限を解いてくれるよう、学院長にお願いしたのは……こうするためですか？」

先ほど学院長に要求した「先払いの報酬」が、それだ。

「……こう、って何だよ？」

「夜々を、連れてきてくれるため」

返事に詰まる。――国星だったから。

雷真は自分の皿に夢中なふりをして、シラを切った。

「何言ってるんだ。硝子さんを捜し回るために決まってるだろ」

「そ、そうですね。すみません、おかしいこと言つて」

「まあ、でも、半分はおまえのためだよ」

いろりの肩が強張る。雷真は普段のノリで、おどけて言つた。

「たまにはご機嫌とつとかねえと、またぶつ飛ばされそうだからな」

「むむむ……夜々を何だと思つてゐるんですか！」

夜々が怒る。だが、心から立腹してゐるわけではない。

頬がゆるんでいる。夜々も、この痴話喧嘩を楽しんでゐるのだ。キャンドルのあかりの

せい、その顔は普段にも増して美しく、そしてはかなく思えた。

胸を貫いた痛みを、雷真は断固、顔に出さない。だが、いろりは我慢できなかったよう

で、そつとフォークを置き、手洗ひに行くような素振りです席を外した。仔牛をやつつけた

小紫も、姉について行く。

いろりはたぶん、涙を隠しに行つたのだ。変に勘ぐられるとよくない。夜々に氣取られ

ぬよう、雷真は冗談を言つた。

「予期せず二人つきりだな。あいづら、氣をつかつてくれたみたいだぞ」

「はっ！ このテーブルをベッド代わりにしてもいいって意味——？」

「それやったら出禁な？ 語らい程度にとどめておけ」

「愛のささやきですか？」

「そう、それだ」

夜々は赤くなり、フォークでぎくぎくと肉を刺した。

「な、何だか最近、変ですっ」

「……そうだな。自覚がある」

ため息が漏れる。夜々は驚いて、まぶたを上げた。

「雷真……？　ため息なんかついて……？」

「嫌なため息じゃないぜ。俺は幸せ者だなと思っただ」

「——幸せ？」

ごまかすための嘘ではない。雷真の胸に、実感として、その感情がある。

「親父や撫子が死んでから、こんな気持ちになったことはなかった。けど今、心からそう思うんだ。こんな俺を大事にしてくれる仲間がいて、世界一の相棒がいる」

夜々は頬を染め、瞳を潤ませた。雷真は真顔で続ける。

「俺はこの先、どうなるかわからない」

「——」

「大金と戦えば、十中八九、死ぬだろう。その前に、結社の連中に殺されるかもしれない。

学院長だって、俺をどうするかわからない。だが、ここで終わるとしても——」

「終わらせません！ 私たち雪月花が！」

「わかってる。それでも、未来は誰にもわからないだろう？」

夜々は唇を咥んだ。雷真は声をやわらげ、そつと言った。

「この先どうなるとしても、俺が今感じてゐるものは「本当」だ」

半生と呼ぶのもおこがましい短い歳月だが、振り返ってみれば、こう思う。

「赤羽雷真っていう阿呆が、こんな地球の果てまでやってきて、生傷こさえて、大暴れして、おまえと一緒にやってきた。この日々は、確かに……」

その先を、雷真は言わなかった。

夜々もまた、言わなかった。

二人は互いに視線をかわし――

そつと微笑み合つたのだ。

ほどなくして、いろりと小紫が何事もなかったかのように戻ってきた。

デザートにオレンジのジュエライトを堪能し、店を後にする。店内が暑いくらいだったので、外の冷氣が心地よい。雷真は大きく体を伸ばし、三姉妹に言った。

「こんなときに、わがままに付き合せて、悪かつたな」

「いえ、楽しゅうございました。ありがとうございます」

いろりが丁寧に礼を述べる。小紫は雷真の腕に抱きついて、甘えるように言った。

「ねー、運河回って帰ろ？ あかりがいっぱいついてて、綺麗なんだよー」

「小紫っ……無邪気ぶって胸を押しつけるなんて……末恐ろしい子……」

夜々の暗からハイライトが消える。雷真はあわてて小紫をひきはがした。



「夜会まで、まだ三十分あるな。散歩してもいいんだが——寒くないか？」

「夜々は平気です。姉さまは冷たいの得意ですし、小紫は風の子ですし」

「なら、寄り道して行こう。せつかく出てきたんだ」

「はい」

夜々の声が弾む。四人は早速、運河沿いの散歩道へと進路を取った。

途中、曲がりくねった繁華街にぶつかると、古びたバブが並ぶ洒落た通りで、軽快な音楽があたりこの店から漏れ聞こえてきた。

もう少しすれば、クリスマスらしい曲が流れたりもするのだろうか。街が飾られたり、するのだろうか——と、そんなことを考えながら、通りを横断しようとしたとき、三姉妹が一斉に立ち止まった。

雷真のかじかんだ鼻にも、焦げ臭い風がへばりつく。

「何だ、この臭い？ 火事でもあったのか？」

先刻のソーネチカの一件が脳裏をよぎる。小紫が大のようにくんくんと、臭気のもとをたどり始め、雷真、夜々、いろいろも、彼女の後に続いた。

路地を一本入ったところで、警官がたむろっていた。通りがロープで封鎖されている。その向こうに焦げた鉄屑が鎮座していて、どうやらそれが臭気の発生源らしい。

「車の残骸だね。事故かな？」

「ただの交通事故……って感じじゃねえな。警官の数が多い」

二十人以上はいるだろう。ただならぬ雰囲気、通行人もざわめいている。

近付いて見ると、鉄塊は自動車のなれの果てで、ガラス片があたりに散らばり、血痕ともオイルともつかない黒い液体が道を汚していた。

雷真は立哨中の警官に近付き、声をかけた。

「すまない。ちよっと教えて欲しいんだが、これは事故か？」

「ああ、なかなか素敵な車だろ。焚きつけ入らずで、寒い冬にはびったりだ」

「……いつから英国のジョークはそんなに品が悪くなったんだ？」

警官は制服をかぶり直し、肩をすくめて言った。

「ま、エンジントラブルを起こすような車は願い下げだね」

「エンジントラブル——それは確かなのか？」

「接触事故なら、もう一台ローストされた車が転がってるよ」

……いや、エンジントラブルなどではない。雷真の直感が告げている。

「でっかい怪獣に襲われたとかって与太話も拾ったけど、こんな街中で大型の自動人形を使うとは、ちよっと考えられない。車一台を襲うためになんて——」

雷真のように閃いた思考が、雷真の心臓をわしづかみにした。

たった車一台のために、大型自動人形を持ち出す。おかしい話ではない。そうしなければならぬほど、警護が堅固だったなら。

「小紫！」

雷真の意図を敏感に察し、小紫が駆け出した。ロープをくぐり、残骸に近付く。

「あっ、待ちなさい——」入ってはいけない——「現場保全がまだ——」

逃げようとする警官をひょいとかわして、小紫は鉄網を蹴飛ばした。

金剛力を持たずとも、人間離れした脚力がある。強度が落ちたドアはあっけなく外れ、からっぱの座席があらわになった。

——いや、「からっぱ」ではない。小紫が上体を突っ込み、中から何かを引きすり出す。それをじゃらりと両手で掲げ、小紫は泣きそうな顔で叫んだ。

「雷真——これ！硝子の——っ」

小紫の手にあったのは、昔般硝子が腰に帯びている、あの黒い鎖だった。

3

警官に怒鳴られ、学院に抗議するとまで言われて、雷真は解放された。

だが、学院の叱責を受けようが受けまいが、もはやどうでもいい。

雷真も、夜々も、いりりも、小紫も、言葉を失くして立ちすくむ。

三姉妹が受けた衝撃はかなりもので、小紫は小刻みに震え、いりりは青い顔で妹たちを抱きしめている。彼女たちの気持ちは雷真にもわかる。先日、過酷なすったもんだの末に、ようやく硝子を取り戻したというのに、今また行方知れずとなったのだ。

「雷真……どうしましょう……こんなことって……」

狼狽する夜々を、いろりが後ろから抱きしめる。

「案ずるな。主のことだ。このくらい、どうということはない」

まるで自分自身に言い聞かせるかのような言葉だ。雷真は同調して、

「いろりの言う通りだ。銅子さんは無事だろう」

安易な慰めと思ったのが、夜々は濡れた瞳を「きつ」と向けた。

「どうして、そんなこと言い切れるんですか！」

「まだ言い切ってない。「たぶん」の話だよ。——見ろ」

あごをしゃくって、うろつき回る警官たちを示す。

「さっきの調査は事故だと言ったが、連中、まだ確証を持ってねえ。だからあんなに躍起

になって、手がかりを探してるんだ。何せ「遺体」がないからな」

姉妹の震えが止まる。確かに！

「小紫が蹴破るまで、ドアは開いてなかった。ということば——」

「中に誰もいなかった……？」

「そうだ。中に人間がいたんなら、それが怪我人だろうと、死体だろうと、とつぐに外装

をはがして救助してる。中にいなかったんなら、たぶん死んではいない」

「それは理屈ですけど……でも、敵が遺体を回収した可能性もあります」

「それなら、人間の破片が落ちててもよさそうもんだ」

三姉妹があたりを見回す。警官たちが探し回っているのも、つまりそれだ。

「こんな街中で肉片全部を回収する——なんて余裕はないはずだ。そもそも、硝子しやうしさんにはお師匠さまがついてたんだろ。簡単にやられるもんかよ」

まだ裏付けられたわけではないが、三姉妹はしだいに落ち着きを取り戻した。

小茶こちやが涙を払い、仔犬こいぬのような眼で雷真を見上げる。

「これからどうするの？ 硝子しやうしを捜すの？」

返答に困り、雷真は目をそらした。

三姉妹が不服そうな顔をする。雷真も本音は硝子しやうしを捜したい。だが、夜会の開始時刻が迫っている。ほかでもない硝子しやうしに、雷真は魔王まおうになると誓った。

夜会を切り上げた後は、イオネラと会う約束もある。そのとき、協会の協力が得られたかどうかわかるし、この件を協会に伝えられる。

言葉を選び選び、雷真は三姉妹を説得した。

「ひとまず、学院に戻ろう。こっちはもう、協会の魔術師さまが対応してる……はずだ。つまり、俺たちおれたちにできることは……ない」

「お言葉ですが——」

珍しく、いろりが食い下がった。

「それではあの（右）が手に入りません——硝子しやうしを見つけ出さないことには——」

「まあ……そうなんだが」

「学院に戻りましょう、姉さま」

はつきりとした声で、夜々が賛同してくれた。

「夜々は雷真の判断を信じます。今はそれが最善です」

「……おまえ、さっきは俺の指示を無視したぞ？」

「あ、あれは、らしくなかったからです。色徳けの雷真が美少女を無視なんて」

「ボケてねえ！ けどありがとう！」

いろりは不満げだったし、小紫は不安げだった。だが、夜々の決心は揺るがない様子だ。その力強さに動かされたのか、二人も最後にはうなずいてくれた。

硝子の無事を信じることにして、四人は足早に学院へと戻る。

夜会見物のため、紳士淑女、記者、魔術関係者らが集まり、学内は賑やかになっていた。彼らのあいだを縫うようにして、雷真は夜会の交戦フィールドを目指す。

古代の闘技場を思わせる建物は、先日の戦闘でもさほど被害を受けず、そのままの外観を維持している。うす暗い廊下に入ると、いつもの顔ぶれが待機していた。

「よう。そろつてるな」

雷真は気安く声をかける。シャル、日輪、フレイ、ロキ——全員が一斉にこちらを向く。

その途端、不思議と空気が硬くなったように感じた。

「……何だよ？ 緊張してゐるわけでもねえよな、今さら？」

雷真はあくまで軽く言う。シャルは「はああああ」っと盛大なため息をついた。

「本つつつ当に能天気なバカね。どうせ貴方は知らないだろうと思つたわ！」

憎まれ口を叩きながら、疊んだ紙片を突き出してくる。

受け取つて開いて見ると、それはシャル手書きのメモだった。

「〔夜会（最終節）のまとめ〕——わざわざまとめてくれたのか？」

「ちちち違うわよー 自分用よ、自分用ー」

「受け取つてくれ雷真。シャルは該字が許せず、三度も書き直したのだ」

「黙りなさいシグムントー お昼のチキンにマスタード塗ったくるわよー」

「ありがとよ。えーっと、なにに……？」

夜々と小紫が小さな頭を寄せ、のぞき込んでくる。英語の読み書きは苦手な雷真だが、見やすく整理された文字は判読しやすく、じきに内容が読み取れた。

「〔第一位を除く六名で封戦し、第一位への挑戦権を争う。四夜で決着がつかない場合は執行部が挑戦者を決める〕——こんなの初耳だぞ。それに、この仕組みだと……」

口キがふん、と鼻であしらひ、挑発的に言つた。

「バカの頂点に君臨する帝王バカでも、さすがにわかつたか」

「いちいちバカ言うなバカ大陸を統べる覇王バカー」

「元帥が出てくる前に、オレたちの頭数を強制的に減らす——そういう論策だ」

「そんな取り決め、なかったら。今さらルール変更なんて、後出しじゃねえか」

「君たちがあまりにもイレギュラーすぎたのでね」

廊下の奥から、悠然と偉丈夫が歩いてくる。

もちろん学院長ラザフォードで、その後ろにソーネチカの姿もあった。

「参加者がそろったな。開会の前に、改めて説明しておこう」

舞台に視線を投げる。そちらでは学生総代オルガの美声が響き渡り、観客にルール変更の解説をしていた。ラザフォードは満足げにうなずき、説明を始める。

「まず、ここにいない者は、マダナスくんを除き、既に手袋を剥奪した」

つまり、夜会の参加資格を失ったということだ。

「アスラはどうした？ あいつの仲間たちは？」

「アスラ・オーエンくんは自動人形を破壊されている。そうでなくても、彼と彼の賛同者は先日、学院を混乱に陥れた」

「それは王妃のせいだろ！ アスラに罪はない！」

「魔術師は自ら己を律するものだ。君はこれまでに君がしてきた行動をすべて、保護者の責任に帰すつもりかね？」

ぐうの音も出ない。たとえば、Dワークスを襲撃したこと。私闘でドイツの学生を叩きのめしたこと。それらはすべて、自分の判断だ。硝子のせいにするつもりはない。

シャルも過去に時計塔を破壊しているので、何も言えずに黙り込む。

雷真が目輪を見やると、目輪は硬い表情でうなずいた。

「硝と六連も、正式に手袋を返上しています」

やはり、そうか……。シャルが腕組みをして、わけ知り顔で言った。

「あの二人は怪我が主原因よ。あんなに無茶ばっかりしてて、治るわけないもの。貴方やロキみたいな原始生命体とは違うのよ」

「オレはきちんと進化した生物だ。こんなブラナリアバカと一緒にするな」

「怪物扱いやめろー俺だってちゃんと死ぬからなー」

言い合う学生たちを手で制し、ラザフォードは続けた。

「(手袋持ち) はここにるので全員だ。そこまではいいかね？」

その点に関しては、文句が出ない。なるべくしてそうだった、という感じもする。

「では次。知っての通り、夜会の日程は度重なる中断で遅延している。本来であればもう最終夜——マダナスくんが舞台に出ていなければならぬ」

階の上ではその通り。ただし、実際に開催された日数は、まだ九十かそこらだ。

「無論、今すぐマダナスくんを舞台に出してもよいのだが——」

脅すように一同を見回す。息詰まる緊張が廊下に満ちた。

「君たちが仲のよい学友であることは、とうに知れ渡っている。アスラくんとその仲間を放逐した上、今マダナスくんを出せば、恣意的な結果操作と言われても反論できん。魔土の正当性に疑問符がつき、ひいては君たちの利益にならない。そうだろう？」

「それはわかりますけど、私は納得できません」

シャルは悔じもせず、堂々と自分の意見を述べた。

「私たちがつぶし合つて、たった一人の挑戦者を決める——それではマグナスが有利すぎます。疲弊した挑戦者と、無傷でやれるのよ」

「シャルロットくん、学院のもっとも重要な理念を言つてみたまえ」

「それは——《実力主義》です」

「その通りだ。マグナスくんは事前の選考で第一位に選ばれた。異を唱えたくば、彼以上の実力を示さねばならない。違つかね？」

「それは……そうかも知れませんが……でも！」

「わたくしは賛成です。まったくもつて理に適つていますわ」

それまで黙っていたソーネチカが、喜色を浮かべて言つた。

雷真の中で警報が鳴り響く。些細な違和感も見逃すまいとして、ソーネチカを熱心に見ていると、少女たちから冷たい視線が飛んできた。ひどい勘違いだ。

「実を申せば、わたくし危惧しておりましたの。貴方たちが教を頼みにマグナスをくだすようなことがあれば、夜食はお遊戯になつてしまいますもの」

ソーネチカは好戦的な笑みを見せ、一同に訴えかけるように言つた。

「多量なる騒音、暴電、そして魔 姫——わたくし、貴女たちと正々堂々の戦いを所望します。そして、わたくしこそが真に《女帝》であると証明しますわ」

緊迫する女性陣の横から、雷真ははそりとつぶやいた。

「俺と口キは数に入つてねえのか？」

「無粋なことを。男は男同士、仲よくつぶし合っていればいいではありませんか」

「そうねー 男はやっぱり男同士よねー」

「シャルは何で興奮してんだー」

「あいにくだが、それは却下だ。オレたち姉弟は二人でやらせてもらう」

ロキは姉をかばうように立ち、ハーフマントをひるがえして、言い放った。

「女帝がフレイにからむのは勝手だ。そのときはオレを敵に回すと覚悟しろ」

ソーネチカは笑みを浮かべたまま、ロキの背後、ジブリールに視線をやった。

白く輝く機械天使。先日アスラを余裕で撃破した、イオネラの最高傑作だ。戦いの詳細はソーネチカの耳にも届いていることだろう。

ロキは雷真に視線を移し、宣戦布告のように言った。

「そういうことだ。貴様も覚悟しておけ」

「……ああ、とづくにできてるぜ」

雷真はフレイを見る。フレイは申し訳なきような顔をしたが、すぐに表情を引き締め、決然としてうなずいた。拍子にふくらみが揺れ、シャルのひたいに謎の青筋が立つ。

どうやら、この姉弟との戦いは、避けられそうにない。

一同が納得したと判断し、ラザフォードは手を打って話を締めた。

「では諸君、舞台上に上がりましたまゝ。見物の皆さまがお待ちかねだ」

舞台へ向かう道すがら、雷真はシャルに話しかけた。

「面倒なことになっちまったな？」

「……そうね。行きましょう、ヒノワ」

そっけなく応え、歩き出す。雷真は不審に思い、今度は日輪ひろかを呼んだ。

「おい、日輪」

「は、はい。何でございましょう？」

日輪が立ち止まる。だが、振り向いてくれない。

横からのぞこうとすると、顔を背ける。しばらく目線の追いかけてこをした後で、雷真は日輪の肩をつかみ、くるりと回してこちらに向けた。

ぱっちり目が合う。日輪は硬直し、ヤカンのように湯気を出した。

「は、恥ずかしゅうございます……！ このようなところで接吻せつぶんなんて……っ」

「そこまで考えてねえ！ さっきから全然、目を合わせてくれねーからさ」

「雷真……どこでそんなテクを……っ」

「ヒノワ、そんな変態かまってないで、行きましょう」

夜々ナナが暴れ出す前に、シャルが日輪を引き離し、手を引いて立ち去った。

うす暗い廊下に、雷真と三姉妹だけが取り残される。

敏感な小紫はそわそわと落ち着かない。夜々は目をばちくりさせている。

「雷真殿、私をお使いくください。相手が誰であれ、おくれは取りませぬ」

いろりが前に出る。存在が凄みを増し、吹雪にまかれたような脅威を感じた。彼女の性能はよく知っている。だが、雷真の判断はまったく逆だった。

「夜々といろりは、ここに残れ」

まさか自分が外されるとは思っていなかったのか、夜々は怒った顔をした。

「待ってください雷真っ！ どうして夜々で勝ちスこうとしないんですか！」

「発音おかしいぞ。夜々は病み上がりだ。小紫、今夜はおまえと行く」

「あ、うん！ 私でイタのね！」

「おまえも助詞がおかしいぞ。今夜は実戦があるかもしれないからな、逃げに徹してその後の活動に備える。そして、逃げに徹するなら小紫が一番だ」

すぐに硝子の捜索が始まる。車を襲撃した敵と戦闘になる恐れがある。

もし、それが結社なら——余力を残しておかなければ、命に関わる。

だが、いろりは納得しない。胸を押さえ、強く訴えた。

「ならば、なおのこと私をお使いくください。私なら、学生などたやすく——」

「おまえは口キを厭めすぎだ。あいつはおまえたちを三人そろえて、ようやく五分の相手

……やるなら、決戦に挑むくらいの覚悟がいるぞ。わかつてくれ」

雷真はこっそり目配せを送った。

本当は夜々だけを外し、いろりと小紫で夜会に挑むべきだ。が、それでは夜々が不満を待つだろう。先ほど雷真に反抗したように、勝手な行動に出ないとも限らない。寿命の件に触れず、夜々を納得させる上手い言い訳が、雷真には思いつかない。

いろりは察してくれたようだ。夜々の肩をつかみ、そっと引き戻す。

「では、どうかお気をつけて。舞台袖より、夜々と見守っております」

「そうしてくれ。それじゃ行くぞ、小紫」

小紫が小さなガッツポーズを取る。からみつく嫌な予感を振り払い、雷真は相棒と別れ、舞台へ続く通路を抜けた。

大歓声が雷真を迎える。雷真は床を蹴り、舞台に飛び上がった。

先に入場した面々は、とつくに臨戦態勢で待っている。

機械天使ジブリールを運れたロキ。一三頭ものガルムの群れを率いるフレイ。魔剣の竜を籠手にとまらせたシャル。呪符を手拭んだ日輪。女帝ソーネチカは舞台の外れに隠れて陣取り、緒戦は戦況を見守るつもりでいるらしい。

リン、ゴン、と軽やかに鐘が鳴り、楽隊のファンファーレが響き渡った。

いよいよ、夜会のセミファイナル——生き残りを賭けたバトルロワイヤルが始まる。

鐘が鳴り終わる前に、鋼鉄の刃が走った。

雷真と小紫めがけ、フィン状のブレードが飛ぶ。一枚一枚が鳥の羽のようなその刃は、ジブリールの腰の翼が千切れ飛んだものだ。ケルビムの（熱風操作）とは違い、噴射音は

ない。風を切る鋭い音が、一度に十数枚、連続して襲いかかってきた。

小紫が銀剣を抜き、フィンブレードを次々に弾く。その隙に、回り込むように、フレイがガラム犬を走らせた。

「仕掛けてくるな。離れてろシャル、俺の側（そば）にいろと巻き添え食う——」

背後で膨れ上がった魔力を、雷真の（天眼）がとらえた。

小紫を控えて横っ飛びする。そのすぐ横を、ラスターセイバーの光がかすめた。

ラスターセイバーの放射がやんだとき、客席は完全に静まり返っていた。

雷真もまた、呆然（ぼうぜん）とシャルを振り向く。

「何よ、その顔。何かおかしいなことでも起こったの？」

シャルは左手で髪をはね上げ、右手のシグムントをこちらに向けた。

「私はプリュー伯爵家のシャルロット。家名に恥じない戦いをするつもりよ。そして勝つ

——ラスターフレアー」

シグムントがあごを開き、光の散弾をまき散らす。一発一発が拍（う）のように太く、威力も凄まじい。小紫の手足なら、軽く吹き飛ばせる威力だ。槍は見事、小紫の脛（すね）から下を消滅させ、舞台の床に突き刺さった。

——否、その小紫は幻影だ。銀剣を構えたまま、平然と立っている。

客席がどよめく。ロキ、シャルの顔にも、かすかな驚きが広がった。

小紫の魔術回路（八重葎）の効果は知っている。だが、雷真がいつ魔術を起動したのか、

わからない。シャルはほっとした顔をして、強気な調子で言った。

「そうくると思ってたわー ヒノワ！」

「——急々如律令！ 妖星軍、きたりま征！」

日輪が呪符を空中にまく。呪符はおびただしい数の式神に変じ、大嶺のような、老人のような、猛背の怪物になった。そのすべてが、こちらに敵意を向けている。

小紫の腰が返ける。機を逃さず、式の軍勢が襲いかかってきた。

「いやあー 気持ち悪い！」

「ビビるな小紫—— 大丈夫、こっちの位置はまだバレて——」

いる！ 嶺の群れは実際の小紫がいる場所を狙ってきた。

八重霞を看破したか。いや、見抜けていなくとも、おおよその勘で攻撃はできる。小紫をかばいながら、雷真は紅翼陣の糸を猿に浴びせた。

糸を鋼線のように扱い、からめ取る。魔力を収束させた糸は、相手の魔術を妨害する。

魔法生物たる式神には効果てき面で、式神は次々に両断された。

その攻防で大気の魔素が乱れ、八重霞が破れる。再び姿をさらした雷真と小紫に、仲間たちの視線が刺さった。

——仲間たちの全員が敵。

氷柱が落とすしずくのような、冷たい汗が雷真の背に落ちた。



Chapter 3

原点には回帰せず

1

観客にとっても、雷真にとっても、夜会は意外な方向に転がりつつあった。

ロキ、フレイとの戦いは覚悟していた。だが、シャルや日輪まで敵に回るとは。

「四対一かよ……つか日輪！ おまえもか！」

「う、う、恨みっこなしでございます雷真さま！ 畢意の念とは別でございます！」
日輪は叫び返す。その必死な様子に、雷真は彼女の速いを見て取った。

「あのよ、日輪。こっちきて、俺たちの将来について相談しないか？」

「えっ♡」

ひよおとおおおと氷雪のような殺気が吹き込んできた。

かぶりつきの客席で、夜々が眼を光らせている。ついでにシャルまで怒っている。

「ら・い・し・ん……正妻の夜々を差し置いて……」

「こんなときに女を口説くなんて見下げ果てた男ね！ 色魔！ 変態！」

「どっちも黙れ！ 搦さぶりかけただけだろ！」



「えっ!? 揺さぶり、なのですか……っ?」

華やいでいた日輪の顔が、たちまち涙で曇った。

「むごうございます…… わたくし……わたくし……っ」うるるっ。

「最っ低…… 女の敵だわ! 焼き殺すわよ、シグムント!」

「ライシン! それはさすがに、めっ!」

「フレイまで何——いや、確かに俺が最低だった! すまん!」

小紫の視線まで冷たい。あちらの敵意が増し、味方の意欲が下がる最悪の展開だ。観衆の多くもこのノリに慣れているので、どっと笑いが起こった。

雷真は一度冷静になり、改めて許婚に確かめた。

「日輪。決心は、固いんだな?」

「——はい。わたくしは、シャルロットさまと組みます」

「どうしても、か?」

「どうしても、でございます!」

問答は無用とばかり、さらに式神を増やす。殺戮する式神をいなし、魔力を叩きつけて霧散させながら、雷真は思案した。日輪は泣き虫だが、言い出したら聞かない芯の強さも持っている。こうなってはもう、考えを改めてはくれないだろう。

（一緒に天全と戦ってくれるって、言っただじゃねえかよ……!）

だが、彼女の行動は正しい。バトルロワイヤルになった以上、戦わなければならない。

そうでなければ、敵陣の一門に示しがつかないだろう。

「気を散らしている場合か？」

——というロキの言葉は、真後ろから聞こえた。

背後を取られた。繰り出されるジブリールの剣を、雷真は最小の動きでかわす。

「事前に警告とはお優しいな。手加減のつもりかよ？」

「丁度いいハンデだろう」

「四対一で言うことか！」

順りで剣を縦飛ばす。と同時に魔力を繰り、小紫にそそぎ込んだ。

フィンブレードをさばいていた小紫が、再び八重葎を全面にする。

全員がこちらを見失った一瞬に、小紫の銀剣がジブリールの首を狙う。

機械天使の首関節は細い。小紫の瞬発力なら、シリンダーを破損させられる——

はずだったが、相手の反応は雷真の予想を上回っていた。

ジブリールが盾の形に変化し、《完全統制振動》が発動する。刃は一ミクロンも進まず、

斬りつけた小紫の手が痺れ、得物を取り落としてしまう。

（ロキの野郎、俺の考えを完全に読んでやがる！）

がおん、がおんとやかましく、ガラムの《音の砲弾》が発ぶ。シャルも遠距離から魔剣

の光を放ち始めた。ランダムに撃っているように見えて、ともに舞台のスペースを埋めて

いる。こちらが存在できる範囲をしばり、位置を特定するつもりだろう。

目輪の動も浮え渡り、立ち止まっていると、すぐに式神が寄ってくる。

「雷真、どうしよう……!?」

小紫が弱気な声を出す。実を言えば、雷真も少々、弱気になっていた。

今さら八重葎の特性に気付く。逃げ回るのに最適だと思っていたが、それは違う。

「八重葎は奇襲で最大の効果を発揮する、攻撃的な魔術……!」

たとえば、グリゼルダが用いたなら、どうなるか。いかなる魔術師も間合いへの侵入を

許し、たやすく命を刈り取られる。比類なき暗殺者の誕生だ。

「もう姉さまたちを呼ぼう? いろり姉さまだけでも!」

小紫に言われ、客席に意識を向ける。夜々が今にも飛びだしそうになっていて、いろり

がそれを引き止めていた。今いろりを呼べば、確実に夜々も入ってくるだろう。

いろりにあわてた様子はなく、夜々を抱きながら、涼しげにこちらを見ている。

——心配性のいろりが、小紫を心配していない?

（岡目八目……か!）

実戦経験豊富ないろりには、どの程度の窮地なのか、雷真以上に見えている。

「いや、応援は呼ばない。俺たちだけでも、この場はしのげる」

「ええっ? 無理だよ!」

「無理じゃない。おまえは天下の雪月花だぜ、どうにかなる」

「そんなこと言って、あっちだってほとんど伝説級の人形なのにも!」

「泣き言は後だ。行くぜ！」

魔力を爆発させ、八重霞を追加で使用。見えている世界が歪み、シャルの狙いが狂った。ラスターセイバーが式神をなぎ払い、あわてて魔剣を止める。

これで射撃は封じた。このまま膠着状態に持ち込めば……。

「姉貴！」

「うん！」

ロキの指示に、待ってましたとばかり、フレイが指笛を吹く。ガルム犬は舞台をぐるりと取り囲み、遠吠えを始めた。

（——まずい！）

ガルムの魔術は音で伝導する。つまりは「魔力を帯びた音波」であり、空間全体に効果を及ぼす。八重霞（八段の調）も空間にかける技であり、両者は互いに干渉するのだ。

単純な力比べでは押し負けない。だが、少しでも効きが甘くなると――

「ジブリー！ 撃ちまくれ！」

「シダムントー！ ラスターフレア！」

「（胡蝶の舞）――きたりま征！」

敵の不利が決定的になる。怒涛のような攻撃が押し寄せた。

雷真と小紫が攻撃の波にさらわれる寸前、ざららっと舞台の表面を削り、金属のつらなりがすべり込んできた。

鋼鉄製の機械大蛇が、雷真を護ってくれていた。

鋼鉄のボディは堅牢で、式神を閉み、フィンブレードを防ぎ、魔剣の光に焼かれながらも、貫通させずに耐え切った。尾を払うだけでガラム犬がつぶされそうになり、犬たちがきんきん鳴いて逃げ惑う。

乙女が大蛇の頭に横座りしている。彼女は舞台を睥睨し、

「この学院にきてよかった。心からそう思いますわ」

ふふっ、と愉悅の笑みをこぼす。

「だってわたくし、猛烈に昂ぶっておりますもの！」

登録コード（凍土の炎帝）——（女帝）ことソーネチカ・スニートキナ。

彼女の派手派手しい介入に、客席から歓声が上がった。

雷真は大蛇の巨体を見上げ、性能を見積もる。普段、ソーネチカは機械式ゴーレム三体を連れている。そのゴーレムが互いに連結して、この大蛇が形作られる仕組みだ。しかし、それでは理屈に合わない点がある。

いかに複雑な変形機構が組み込まれていようと、たった三体からではこの大きさにならない。少なくとも十体、いや二十体ぶんの体積がある。

仮に質量を増やせるのだとしたら、（魔剣）に似た特質を持つのでは？

ロキがソーネチカをにらみ、雷真も気になっていたことを試いた。

「女帝……そのバカに加勢するつもりか？」

「女帝は誰にも与しません。ゆえに、そちらに敵する、と云うべきです。剣帝と姉、魔姫と暴竜はベアなのでしょう？　ならば、わたくしが（魔王殺し）」と組めば、ちよつと面白い展開ではありませんか？」

三組のベアによる、三つ巴の戦い。なるほど、雷真が数で封殺されるよりよほど見ごたえがある。賭けのオッズも面白いことになるだろう。

客席が沸き立つ。ソーネチカ本人も自分の思いつきに興奮したらしい。横顔は際立って美しく輝き、瞳から星が散った。

（……そうか。こいつは）

心底から、戦うことが好きなのだ。

かつて、オルガが仕掛けた（円卓戦争）の際、ソーネチカは己の派閥を作らなかつた。それには、群れることを嫌う以上に、別の理由があつたらしい。

（自分の出番が減つちまう……ってか）

不正を憎み、快憤を嫌う。一見は高潔な、その行動原理の根っこに（戦闘狂）の素地があるのだと思うと、雷真は可笑しくなった。

笑いをこぼすかこぼさないかのうちに、ずどんと凄まじい衝撃が舞台を襲った。

大蛇の尾がハンマーのごとく振り下ろされ、雷真の立っていた場所をへこませる。

「つぶねーな！　やっぱ敵か!?」

「わたくしの不興を買わぬが賢明ですわよ。何を笑っているのです」

じろりとにらみつけ、威圧感たつぷりに訊く。

「身の振り方をお決めなさい。貴方はどうしますの？」

「……さっきあんた、廊下で言ったよな。女同士で戦いたいって」

「ええ、そのようなことを言いました」

「なら、お望み通り——女子はあんたに任せる」

「そうじゃなくては！」

満面の笑顔。思いがけない野性の美しさに、雷真は面喰らう。

客席の夜々が騒わしげな視線を向けてくる。雷真は咳払いしてごまかし、ソーネチカと背中合わせに立った。盛大な拍手が巻き起こり、観客がこの構図を歓迎する。

「何でそうなるのよ……!?」

シャルが肩を震わせ、雷真を指差して、罵倒した。

「ほんつつつとに馬鹿ね！ どうしようもない馬鹿——馬鹿で最低の……女たらし——」

「最後のは違う——」

ロキのフィンブレードがうなり、日輪の式神が殺到してきた。どちらも数が多くて厄介だが、こちらはもう一人ではない。

「行きますわよ、ヨルムンガンド——」

大蛇は返事をしなかったが、代わりに眼球が赤く光った。巨体に見合わない速度で突進し、式神をたやすくおしつぶし、フィンブレードをなぎ払う。

その間、女帝は大蛇の頭に座ったまま、まったくバランスを崩さなかった。

鍛えられたバレリーナ同様、体幹がしっかりしている。一見、優雅で軽やかに見える身のこなしは、十分な鍛錬が生み出すものだ。

オルガをライバル視していたのも、うなずける。天から授かった才のきらめきで言えば、ソーネチカはシャルや日輪に劣るかも知れない。だが、鍛え方はその二人以上、自動人形の制御に限って言えば、ロキと同等のレベルにある。

「くっ……これならどう？ ラスターセイバー！」

シャルが大蛇を切断にかかる。ラスターセイバーは基本的に「流れ流し」。装甲を貫通するまで放射をやめないつもりだろう。

しかし、いつまで経つても大蛇の装甲は貫けなかった。消滅する側から新しいいうろこがせり出してきた、滅元素を阻み続ける。

「再生してる……!?」

シャルが驚愕する。その頭上を飛び越え、優美な剣が天を舞った。

ロキのジブリール。回転しながら炎を噴き上げ、ますます加速する。

（火炎の魔術に変わった——これが回路の切り替えてやつか！）

イオネラ発案の断機銃。魔術喰いと名の戦いを思い出す。あのときは、魔術回路の再装填はできず、使い捨てだったのだが……

ロキが腕を振り下ろす。剣は灼熱の風を噴きながら、大蛇の肩間を狙った。しかし、剣

は大蛇をすり抜け、舞台に突き刺さる。

ロキがじろりと雷真をにらむ。雷真はへへっと笑って、小紫にウイंकした。

「いけるぞ。この使い方なら、剣帝陛下にも有効だ」

瞬間的な八重霞で空間認識を狂わせた。上級者であればあるほど、短時間で複雑な操作と判断をする。ゆえに、一瞬の狂いが大きな結果の差異を生むのだ。

「行くぞー 吹鳴八衝！」

意図は伝わる。小紫は音の刃をかくぐり、真正面から突っ込んだ。

「ごめんね、わんちゃん！」

ラビの装甲を蹴っ飛ばす。ラビはひやうんっと高く鳴き、場外に転げ落ちた。ロキが舌打ちをして、いまいましげに叫ぶ。

「犬どもを下がらせろ！ 散開していては、各個撃破される！」

「う、うん——」

「好きにはさせませんわ！」

ソーネチカが大蛇で割り込む。大蛇が長大なため、広い舞台が狭くなった。

位置関係が乱れ、戦場が混乱する。八重霞には数の力が有効だが、数では大蛇の防衛を突破できず、しかし大蛇を切断できるジブリールには八重霞が有効——

結果的に、ぐちゃぐちゃの泥仕合となった。

そのまま小一時間も一進一退が続き、観客の熱気が静まってきた頃。

「女帝さん、俺はそろそろ抜きたいんだが」

「何と情弱な！ あちらはもう虫の息ですのよー」

息が弾んでいる。散歩中の犬みたいだなど思いながら、雷真はさらに言った。

「そう言うな。今日退けば、明日も楽しめるだろ？」

「——それもそうですわね」

けろつと戦意を引つ込める。どこまで戦いが好きなのか。

……いや、好き嫌いだけではない。ソーネチカは武威を示したがっている。観客に見せ

つけるような、新聞記事になるような、華々しい勝利を望んでいる——気がした。

ソーネチカが大蛇の引き際を探り始める。シャルが気付いて、声を張り上げた。

「逃げるつもり？ 卑怯者！ 逃げるなら手袋を置いていきなさい！」

「その人数で卑怯とか言うな！ こっちも必死にやってんだよ！」

シャルは呼吸を乱している。力を増したシダメントは以前より魔力を噴う。十代の少女

のスタミナでは、そろそろ限界が近い。

フレイはもう大事を取って、ガラムとともに後退している。

日輪はまだ余力を残しているようだが、先ほどから消極的で、瞳が哀しげだ。

（そんな目で見るなよ……つか、そっちが先に裏切ったんだからな？）

結局、この日の勝負はつかないまま。

雷真とソーネチカが舞台を降りた段階で、執行部が終了のチャイムを鳴らした。

「待機義務を達成、交戦要件クリアです。お疲れさまでした！」

そのアナウンスで緊張から解放され、日輪は息をついた。

客席から拍手が飛ぶ。最後は尻すばみだったが、全員が学生離れした技量で、仲間割れというハブニングもあったので、ギャラリーは満足したようだ。

ソーネチカが廊下につつまみ、その後ろを雷真が追っていく。

二人が廊下で語らっているのを見て、ずきんつ、と日輪の胸が痛んだ。

「女帝とつるむなんて、とんだ浮気者だわ。こっちの気も知らないで！」

シャルは腹の虫が治まらない様子だ。帽子の上でシグムントが冷静に言う。

「結果論だが、失策だったな。正面から説得すれば、彼は受け入れたかも知れん」

「あのへそ曲がりが説得に耳を貸すわけじゃない。蛙の顔にお小水よ」

「言い得て妙だが、強情さで言えば、君も大概だ」

「わ、私は素直よ。最近は……比較的」

「……申し訳ありません、シャルロットさま……あまり、お役に立てず」

日輪が謝ると、シャルは笑顔でかぶりを振った。

「謝らないで。ロキとフレイも敵なんだし、上手く動けないのは私も同じよ」

慰めの言葉をかけてくれる。妹アンリの意識は戻ったが、実はいまだに面会謝絶が続き、医学部はシャルとアンリの接触を禁じているという。誰よりも胸を痛めているはずなのに、その痛みを隠して、シャルは日輪を氣遣つてくれる。

笑顔がまぶしい。まるで太陽のようだと思う。

「日輪」と名づけられたのは、わたくしの方ですのに」

本当はシャルのような少女にこそ、その名は相応しいのではないか。

そして、雷真のとなりに相応しいのも——

「今日はお互い様子見だったと思います。私も全力を出したわけじゃないし、ロキもかなり手加減していたわ。ひょっとしたら、ロキも気付いてるのかもね」

「……夜々さんが、残り少ない命であることを？」

「そうよ。貴方の古いでも、そう出ているんでしょ？」

日輪はうなずいた。占術に絶対はなく、未来は常に揺らぎの中にある。しかし、今回のこれは、古いと言うより予測や推定、観測に近い結論だった。

「わたくし……シャルロットさまに言われるまで、そこまでは感じていませんでした。

夜々さんはエリアーデ先生に修復されたばかり」

「すまんな、日輪。シャルは醜聞好きが高じて、盗み聞きの癖がついたのだ」

「そうそう——って、違うわよ！ 今回ののは観察眼よ、観察眼！」

シャルは宝石のような瞳を揺らし、ちよつと寂しそうに言った。

「見てれば……わかるわよ。あのバカの態度、今までと全然違うじゃない。夜々にだけ、見えてイライラするくらい優しいの」

「雷真さまはもともと優しい方です」

「どーだかつ。それに、そういうんじゃないの。いたわりつて言うか、気配りつて言うか……夜々をちゃんと見てる。それがわかるから、夜々も大人しくなったのよ」

日輪は言葉を失った。この数日で、シャルは二人の變化に気付いたのだ。それはとりもなおさず、シャルが雷真をちゃんと見ているということ。

「シャルロツトさまは……よく見ていらつしゃるのですね」

「みみ見てないわー やたらと目につくだけよー」

「何せ四六時中、目で追っているからな」

「黙りなさいシグムントー お昼のチキンに胡椒爆弾仕込まれたいの？ とととにかく、あんな状態の夜々を、マグナスと戦わせるわけにはいかないわ」

それは同感だ。日輪もまた、引き締まるものを感じる。

「雷真さまはおつしやいました。自分はこれから血をわけた兄を殺す外道になると。外道とまでおつしやったのは、己の業に苦しんでいるからです。ならば、わたくしは——その苦しみを、肩代わりしようございます」

日輪はまなじりを決し、凜として言った。

「赤羽天全は、わたくしが殺します」

「そのときは私も共犯よ。私たち、友達なもの」

シャルも迷わずに言い切る。その表情は、どこか雷真に似ていた。

シャルは雷真に似ていると、日輪は常々思っていた。こうと決めたら、シャルはどこまでも突っ走っていく。それは日輪の理想でもある。改めてシャルに憧れを抱く——と同時に、疑問も生じた。彼女はどうして、こんな一生懸命なのだろう？

そして、唐突に気付いた。

本人は否定していたが、そう考えれば、すべてが胸に落ちる。

むしろ、なぜ気付かなかったのか。シャルの雷真を見つめる瞳や、熱っぽい頬や、髪をいじる仕草や、強がりと言う唇に、いつも本心が透けていたのに。

「それにしても、ソーネチカが邪魔よね。あんな大蛇に居座られちゃ」

（シャルロフトさまは……わたくしの悪敵……!?）

「作戦を練り直しましょう。寮に戻って相談——ヒノワ？」

気がつくのと、シャルが日輪をのぞき込んでいた。

「真っ青よ、大丈夫？ 魔力切れ？ 頭痛がする人もいるって言うわよね」

シャルは真剣だ。本当に心配してくれている。日輪は胸が苦しくなった。

「申し訳ありません……少し、気分が」

「やっぱり！ 気付かなくてごめんなさい。シグメントで寮まで送るわ」

「だ、大丈夫です！ ひとりで戻れますからっ」



その場を逃げ出し、放り出すように言う。

「打ち合わせはまた翌朝——それまでに策を講じておきます！」

「わ、わかったわ。お大事にね！」

急いで転移の式神（間土里）を召喚する。黒い水たまりに引き込まれ、異空間に入った途端、間一髪、涙がこぼれた。

暗闇にとどまり、嗚咽をこらえて泣く。

——こんな自分が、ひどく嫌いだ。

雷真の前では理解ある妻ぶって、妄くらいい平気と言っている。だがそれは「自分が彼の一番でいられるなら」の話だ。自分より魅力的な少女が彼の寵を独占する未来など、とても耐えられない。まして、その寵姫が大好きな友達なら、なおのこと——

このようなことで心乱しているときではない。夜々は生きるか死ぬかの瀬戸際にあり、夜会は雷真の復讐が果たされるか否かの大詰めだ。わかつているのに……。

泣きじゃくっているうちに、ふと、何かに腕をつかまれた。

（えっ？ 間土里の中やのにっ？）

愕然とする。日輪は水揚げされる魚のように、異空間から引きずり出された。

飛び出した先は女子寮の一室。書道具や扇子、着物などが目につく。ほかならぬ日輪の部屋であり、そこに今、恐ろしげな鬼の姿をした、筋骨隆々の式神がいた。

「酒吞童子……！」

三メートルを超す巨軀を、狭苦しそうに折り曲げて、あぐらをかいて座っている。その膝に女が腰掛け、怒った眼で日輪を見据えていた。

張りのある肌は若々しいが、髪は既に白く、ひたいには年輪が刻まれている。その厳格そうな面相を見た途端、条件反射で、日輪はその場に正座した。

縮こまって、考える。まさか。そんなはずはない。だって、ここは地球の反対側。転移魔術を駆使しても、一日二日では到達できない。

だが、この息詰まるような威圧感は、どう考えても本物……

日輪の動揺を見て取り、女は冷然と言った。

「阿呆面どすな、日輪。宗家の娘が品のない。おまけに泣き顔や」

「そのお声——やはり、お祖母さま……？」

「そや、お嬢」

横から声がする。鬼のかたわらに男子が二人、日輪と同じく畏まって控えていた。

日輪の従者、昴と六連だ。ともに表情は凍りついている。

昴は大きな体を小さくして、吐き出すように言った。

「正真正銘、お顔さまや！」

3

闘技場の外、屋外灯の下で、フレイが立ち尽くしている。

先ほど雷真と別れてから——否、もっと前から彼女は意気消沈していた。その場にしゃがみ込み、犬たちに埋もれるようにして、眼を閉じる。

その様子を木立ちの中から盗み見て、ロキはため息をついた。

わざと足音を立ててそちらに近付き、丸めたマントを投げつける。

「風邪を引きたいのか。さっさと聲に戻れ」

フレイは目を白黒させていたが、弟の意図を悟り、頭からマントをかぶった。

「ありがとう、ロキ」

暖かそうに顔をうずめる。ロキは舌打ちをして、冷淡に背を向けた。

「こんなところで、何をやっている」

「う。ライシン、待ってる。謝りたくて……」

「その必要はない。あいつと戦うのが嫌なら棄権しろ。オレ一人で十分だ」

「それは、嫌……」

頼りない顔で、はっきり自己主張する。こういうところは、多少強くなった。

「なら、あいつらとは金輪際、闘れ合うな」

フレイが泣きそうな顔をしたので、あわてて言葉を付け加える。

「夜会が終わるまでだ。オレが魔王になるまで。それで奴らは納得する。オレたちにも損のない話だ。神性機巧など、オレたちの知ったことじゃない」

「う……。でも、それじゃ、ライシンの敵討ちは？」

「そんなものは夜会の外でもできる。今となつてはむしろ、そうした方がいい」
ルール変更により、マグナスと戦える者は一人きりとなった。

夜会で一对一を挑むより、舞台の外で集団戦を挑む方が利口だ。それなら、誰かが助けてやれる。シャルや、目輪や、アリスや——気が向けば、ロキ自身も。

「でも、私……カリューサイ先生に、命を助けてもらったのに……」

フレイはふくらみををかきわけるようにして、己の胸骨に触れた。

その下の心臓には、今や薔薇の棘が食いつんでいる。

「それはカリューサイへの恩で、あいつに対する恩じゃない。それに、余計なことを考えている余裕もないんだ。もう、オレとあいつの力は拮抗している」

確信に満ちたロキの言葉に、フレイは驚いた顔をした。

「でも、魔術師としてはまだ、ロキの方が上……」

「だが、（人形使い）としては？」

ロキはあくまで公正に、ひいき目なしでの評価を述べた。

「相手は禁忌人形が三体だ。あんたの犬と同じか、それ以上に立体的に連携させてくる。」

魔力の総量ならまだオレが上だが、あいつの（秘術）は侮れない」

こちらにも機巧心臓を使う裏技があるが、瞬間的な出力ではギリギリ負けている……とロキは踏んでいる。何より、（魔如心解放）は連続使用できない。

半年前なら、術者の能力だけでねじ伏せることができた。

あれから雷真は力をつけた。もともと才気を秘めていたが、夏に魔王グリゼルダの知遇を得て以降、目覚ましい進歩を遂げている。

もつとも、それはロキも同じだ。義父に無様な做北——とロキは思っている——を喫して以来、魔性に磨きをかけ、感覚を磨き澄まし、忌まわしい（心臓）を利用することまで覚えて、貪欲に力を高めてきた。

自分の腰に吊るしたブレードを見る。魔術回路を仕込んだ片刃の魔具は、今日も変わらず、鈍い輝きを放っている。

これまでの人生、ロキは失くしてばかりだった。

だが、失った代わりに得たものがあるのだ。そうでなくてはならないのだ。

「ロキは、ライシンと戦いたいのか？」

不意に投げかけられた質問に、ロキは戸惑う。

姉はこてんと首を倒して、ロキを見つめている。ロキは確的に答えた。

「そんな私情はない」

「お姉ちゃんに嘘ついても、だめ」

にこ、と笑う。ロキは舌打ちしたくなつたが、我慢した。

姉の言うことは間違っていない。確かに、力を比べてみたいと思う気持ちはある。互いに高め合つてきたからこそ、知りたい。互いの技術と才能を。

「まあ……互いの（今）を知っておきたい気持ちは……ある」

「う？　今？」

「そうだ。優劣をつけたとしても、それは現時点での差だ。ひと月もすれば引っくり返る——返すだろう、お互い。どちらかが天井に突き当たるまで」

「だったら、なおさらロキはこれでいいの？　ライシンが負けちゃつて……」

「あいつはまだ負けない。暴竜も魔姫も、どうせ本気で攻撃できない」

「ふっふーん、本当にそうかしらねえ？」

ふと、挑発的な声が入から聞こえた。

少し離れた樹の枝で、小柄な少女が腕組みしている。ドロシアのついた杖を持ち、服装は制服の上から妖術師ふうの黒マントを羽織った女学生——黒薔薇の孫ドロシーだ。

ドロシーは小馬鹿にしたように笑つて、

「お子様のあんたたちは知らないでしょうけど、恋の恨みって怖いものよ？　あんな浮気男、修羅場で刺し殺されちゃうわ！」

「姉貴、もう賢へ戻れ。犬どもが腹をすかせている」

「ちよっ……無視？　あたし無視されてるっ？」

ドロシーは足をバタつかせ、ロキに杖を突きつけた。

「シカトしてんじゃねーわよドグサレ姉弟ー 自分の立場わかってんの？」

「黙れ。殺すぞ」

「ひっ」

ひとにらみただけで、ドロシーは枝から落ちそうになった。

ドロシーも「十三人」の一人だが、ロキとの差は開く一方で、もう相手にならない。

それでも負けを認めず、ドロシーは涙目で威嚇する。快えるドロシーを見かねたらしく、姉がロキの視線をさえぎり、怒った声で言った。

「ロキー ドロシーをいじめちゃ、めー」

「……なぜオレが責められるんだ」

ロキは辞易して、敵意を引っ込めた。この姉は誰にでも優しすぎる。

（ドロシーが敵の一味だってことを、自覚しているのか？）

姉弟が雷真への敵対を決めたのは、夜会のルール変更が原因ではない。このドロシーと、その背後にいる存在こそが、本当の原因だ。

「ドロシーの言ったこと、一理ありますわね」

透明に透き通った、少女のような声が響く。

——早速、お出しました。ロキは唾棄したい気分で、声の主の登場を待つ。

大地がぱっくり割れ、局所的に凄まじい魔力が生じた。むせ返るような熱風の中、樹木

ほどもある骨の腕が突き出され、黒髪くろかみの少女を地上に運ぶ。

一見は年若い娘に見える。黒髪くろかみのことセフィラ・バルゼル・アブラクサス。

「プリューの娘もドモンの娘も、じき必死になります。やらせる方も本気ですもの」
ほほほ、と笑う。結局、ロキは睡業した。

「薄汚い魔女が」

言葉が夜風に消える前に、骸骨の腕がロキをわしづかみにした。

フレイは硬直したが、黒髪くろかみに殺気はなく、むしろ声音こゑは優しくだった。

「言葉に気をつけなさい。それとも、もう冥界の神酒めいけいのかみづは要りませんか？」

――

「ほどなく体は冷たくなり、血は流り、肌は破れます。蠅はえがたかり、蛆うすがわくでしょう。亡者のような姉を見るのは、さぞや楽しいでしょうねえ？」

ロキが抵抗しないのを見て、魔女は口角を上げた。

「ふふ、ものわがりのいい子は好きですよ」

骸骨がロキを放す。ドロシーはこの骸骨が嫌いらしく、びくびくつとした。

地獄の熱気で肌が焼ける。ロキは大傷おほきずを制服の際で隠し、淡々と言った。

「ヒノワはともかく、シャルロットを甘く見ない方がいい。人質を取ったくらいで、言いなりにできるとは思えない。金貨きんがも、銀貨ぎんがも、それで失敗している」

「ええ、どちらも大変痛快でしたわ。ですが、失敗から学ぶのが大人おとなと言うもの。まして

魔女は狡猾こつぱうですよ。そしてもうひとつ——」

「ごうっ、と奈落からどす黒い噴霧が立ちのぼった。

「あの金色ババアが、小僧どもの手で死んだなど、あり得ません！」

黒い瞳に憤怒の炎が踊る。口元はまた唾棄たひきしたくなつたが、姉の手前、我慢した。

「……オレたち全員、面倒な連中に目をつけられたものだ」

果たして、雷真かみまことにはどのようなアブローチがあつたのだろうか？

4

あれだけ決っていたのに、ソーネチカの撤退は鮮やかだった。

早々に舞台を去り、廊下に引っ込んでしまふ。雷真は急いで追いかけたが、急ぐまでもなく、女帝は廊下の中ほどで待っていた。

「今夜の夜会、偷しめましたわ」

それから、ちよっぴり恥ずかしそうに、言い添える。

「これで、借りは返しましたわよ？」

——そうか。一応、恩返しのもりだったのか。

「助かったよ。正直、あいつら四人を相手にするのは骨だった」

「では、同盟成立ということ、よろしくて？」

「ああ、明日もよろしく頼む」

ソーネチカはふんわりと、花が咲くように微笑んだ。

「こちらこそ。では、また明日」

しずしずと去っていく。どうやら、それを言うためだけに、待っていたらしい。

危険な香りもするが、悪い奴とは思えない——なんてことをぼんやり考えていると、

「あつ……」

いきなりソーネチカの胸元から光があふれ、天井を照らした。

魔術式が肌には浮かび、ぼむっと何かが飛び出して、宙に飛ぶ。

胸の谷間から飛んだのは、蒼い色の魔石だった。

魔術で格納していたらしい。ソーネチカがとっさにつかみ、再び胸に押し当てる。魔石

は手品のように消えてしまい、鮮やかだった魔術式も見えなくなった。

その一部始終を、雷真は呆然と見守った。

自分でもわかる。我が目を疑うほどに驚愕している。

そんなはずはない——が、あまりにも似すぎている。

「おい、その石……」

「魔力が切れかけのようです。今夜は帰って休みます——」

「待て！」

雷真はとっさにソーネチカの肩をつかみ、壁に押しつけた。

至近距離で目が合う。ソーネチカはまぶたを見開き、固まっていた。

雷真もまた、固まっている。この体勢からどうするか、考えていなかった。

ソーネチカの胸から出た石は、あまりにも虚無石に似ていた。

本物だとしたら、どうやって手に入れた？

先ほど、街で車の残骸を見た。あのとき、警官はこう言っていた。

『でっかい怪獣に襲われたって』

怪獣。確かにそう言った。そして、ソーネチカの自動人形は大蛇になれる。

(まさか、こいつが硝子さんを……いや、違う！)

雷真は強く否定した。夜々の金剛力を屈けてくれたのはソーネチカだ。策謀を逞らせる

タイプでもないだろう。だが、雷真はまだ彼女の何を何も知らない。

説得して石を譲り受けるか。むしろ強奪か。その前に真贋を確かめたい！

『雷真！ いきなり走って、どうしたんです——』

問がいいのか、悪いのか。夜々を先頭に、三姉妹が駆けてきた。

壁にソーネチカを押しつけているところを、バツチリ目撃されてしまう。

夜々の瞳が闇に沈む。雷真は言い逃れの手段を模索したが、何か言う前に、「ちゅっ」

とわざわざ音を立てて、ソーネチカが雷真の頬にキスをした。

あ、こいつ意外と策士だ……と思ったときには、もう遅かった。



「ふふつ、こういうの、何か久しぶりだね」

笑いながら、小紫が雷真の頬に膏藥を塗る。

場所は変わって、闘技場の医務室。引っかかり傷をこさえた雷真に、小紫が手当てをしている。そのかたわらでは、夜々がいろりの説教を受けていた。

「愚か者！ 戦闘でもないのに、余計な力を使うなど！」

「だって……雷真が悪いんですっ」

「いや俺は悪くねーぞ？ 悪いのは女帝さんとおまえだぞ？」

「違います！ 夜々が怒ってるのは、雷真が鼻の下を伸ばしたからで！」

怒り出す夜々を手で制し、雷真は優しく言った。

「病み上がりなんだから、大事にしろって話だよ。いろりの言う通りだ」

夜々ははっとしたようだ。姉と妹を交互に見つめ、赤い頬でうつむく。皆に心配されていると気付き、反省したらしい。

「……氣をつけます。でも雷真も、悪い虫を出さないよう氣をつけてください」

「最終的には俺か！ 主犯は女帝さんだ！」

「一理ありますね。もう抹殺しましょう♡」

「極端すぎる！ さっきのあれはさ、要するにごまかしなんだよ」

「ごまかし。雷真が持ち出した言葉に、三姉妹がそろって首を傾げた。

「誰か見てないか。ソーネチカの胸」

「……雷真がおっぱい大好きなのは知ってるけどぉー」

「時と場所をわきまえてください。どとどうしてもとおっしゃるなら、我ら姉妹」

「おまえらバカー。そうじゃなくて光！ 魔術式が浮かび上がったろー！」

姉妹は互いに顔を見合わせた。残念ながら、目撃したのは雷真だけらしい。

「ソーネチカの胸から、あの石が飛び出したんだよ。虚無石とかっていう。俺はそのことを聞いただそうとしたんだ。だが、女帝さんは追及されたくないらしいな。だから、キスのサービスまでして、ごまかした」

「雷真っ……やっぱりサービスだと思ってる……！」

「ですが、それが本当に本物なのだとすると」

いろりが頬に手を当て、考え込むような仕草をした。

「ソーネチカ殿は先日、夜々の金剛力（こんごうりき）を持ち帰ってくださいました。同じように、あの石も拾ってくださいったのでしょうか？」

「そんなはずはない。硝子（ごし）さんは落としたりしないだろうし」

誰にも、何も、わからない。小葉が柱時計を見て、思い出したように言った。

「あ、時間！ イオネラ先生のところ、行かないの？」

「……そうだった。急ごう」

キンバリーもグリゼルダもアリスもつかまらない今、頼みの綱はイオネラだけだ。

果たして、イオネラは協会と上手く話をつけてくれただろうか……。四人は言葉少なに、

急ぎ足で医務室を後にした。

夜道を駆けて、食堂へ向かう。学院のメインストリートまできて、ものものしい一団と出くわした。警備がストリートの両脇を固め、警笛を響かせて車両を誘導している。帰宅途中の夜会観客が集まり、人垣を形成していた。

「今度は何だよ？」

イオネラにトラブルメーカーと言われたのを思い出す。とりあえず迂回しようと、人垣を避けた——のに、八方からライトを浴びせられた。

「止まれ！」

警告とともに警備がどやどや寄ってくる。野次馬が一斉に離れ、雷真の周囲だけ無人になった。一瞬おののいたが、警備の目的は雷真の拘束ではない。

人垣の向こうで黒塗りの高級車が停まり、中から警護兵が降りてくる。

（こんなときに、どここの御大尽さまだ……？）

どうやらVIPらしい。警護兵が後部座席のドアを開け、黒ずくめの貴公子が姿を見せた途端、見物の紳士淑女がわっと沸いた。

一方、雷真は呼吸困難になり、ばくばくと金魚のように口を開け閉めした。

（あいつは——！）

びっちりと整えられた黒髪。普段のぎんばら髪とは印象が違う。気品あふれる玲瓏な笑顔は、いつもの毒が抜け落ちて、不気味なほど爽やかだ。

淑女たちが貴色い歓声を飛ばす。この街では蛇蝎のごとく嫌われていたはずだが、立場を変え、威厳をまとうとって凱旋すると、こうもてはやされるらしい。

貴公子は手を振って声に応え、まっすぐ雷真に近付いてきた。

三姉妹と警備に緊張が走る。その異様な空気の中、貴公子は上品な笑みを見せ、しかし口調はいつものまま、雷真にさきやいた。

「よう、ライシン。元気そうで何よりだ」

漏れそうになる殺気を抑え込み、雷真はうめくようにつぶやいた。

「何しにさやがった……黒太子……!」

「おいおい、そこは〈黒衣帝陛下〉だろう?」

なれなれしく肩に手を置いてくる。盛装したエドマンドは、軽く怯んでしまいうくらいの美男子だった。その細い鼻に鉄拳を叩き込んでやりたくなるが、周囲は完全武装の警護兵に囲まれていて、騒いでもろくなことになる。

雷真は引きつった愛想笑いを浮かべ、嫌みったらしく言い直した。

「本日は何の御用でお越しデスカ、エドマンド陛下サマ」

「ひとつは礼だな。おまえの活躍のおかげもあって、俺は見事、国王陛下だ」

「……………っ!」

「そんな酸っぱい顔をするもんじゃない。国王が御自らお声をかけてやってんだぜ」
今すぐ首をへし斬りたい。無論、そんな真似ができるはずもない。あちらもわかってい

るらしく、エドマンドはからかうような目をした。

「もうひとつは夜会観戦だ。おまえの戦いをたっぷり愉しませてもらおう、とウキウキしながら駆けつけたのに、今夜はもう終わっちゃったそうだな？」

「観戦？ そんな場合じゃねえだろ、この国は今……」

遊興が許される状況にはない。先日の一件は「王妃によるクーデター」とされた。王妃が国王を暗殺し、王子を謀殺しようとしたのだと。帝國議會は日々紛糾し、王妃に味方した貴族院は下院の追及を受け、国政は大混乱に陥っている。

エドマンドは小さく肩をすくめ、くさすように言った。

「王は君臨すれども統治せず——それがこの国の『古き善き伝統』だ。お飾りの王は大人しく、賓客のご機嫌うかがいをしとけてことだよ。今は年寄りどもに従うさ」

にやりと意味ありげに笑って、「今はな」とわざわざ強調する。

雷真の胸に渦巻いていた不安が、一瞬に膨れ上がった。

このタイミンクでこの男が現れたのは、おそろしく偶然ではない。

また、何かが始まるのだ。夜々を実戦に駆り立てるような、面倒な事が。

こちらの動揺を見て、エドマンドは面白がるような目をした。

「だいぶ焦ってるようだな。困り事なら、手を貸してやるぜ？」

「二度とてめえの世話になんぞならねえ……」

「こりや徹底的に嫌われたな。ますます燃えるね」

「もういいだろー 俺たちに関わるな！」

「落ち着けよ。そして機嫌を直せ。ちゃんとヒントをやる。今夜はどうだった？」

「どうって——」

仲間たちが雷真を攻撃した。裏切られた気分も味わった。だが——

「……予想の範疇はんちゆうだった。特に変わったことはない」

「予想の範疇？ おいおい、俺はおまえを見誤ったのか？ がっかりさせるなよ。このまま行けば、すべてを露国が持つてくぜ？」

露国と聞いた瞬間、暴風のごとく、複数の単語が脳裏を駆け巡った。

ロシア。襲撃。女帝。ソーネチカ。虚無石。ラザフォード。そして人造靈魂！

エドマンドは意味ありげに笑って、再び雷真の肩に手を置いた。

「俺はそうさせないつもりで動いてる。今回も俺たちの利害は一致してるな？」

「……二度も言わせんな。てめえの手先になるなんざ、二度とごめんだ」

「なら好きにやればいい。それが俺のためになる」

思い出したようにイヤリングを外し、雷真のポケットに押し込む。

「音声の記録媒体だ。面白い会話が入ってる。後で聴いてみろ」

録音用の魔具だろう。これとよく似たものを、アリスが前に使っていた。

「俺はおまえに聞いている。せいぜい、ババアどもにひと泡噴かせてくれ」

「——待てー それはどういう意味だー」

胛中に手を伸ばす。途端に学院の警備が殺到し、雷真を取り押さえてしまった。エドマンドは悠々と車に戻る。車はそのまま学院長公邸の方へ走り去った。

引き潮のように紳士淑女が立ち去り、通りに静寂が戻ってくる。

警備が雷真を解放すると、夜々が雷真の胸に飛び込んできた。

「雷真っ……寿命が縮みました！」

なじるように言う。雷真は言葉に詰まった。

「——悲かった」

ボーカーフェイスに少し手固取る。寿命が縮む——嫌な言葉だ。

夜々を引きはがそうとして、自分の手が汗ばんでいることに気付く。

……胸騒ぎがする。夜会が始まる前よりも、より一層。

果たして、萌子は無事でいるのだろうか。脈絡もなく、そんなことを思った。

5

「遅くなってすまない——ってほどでもないね」

快活な声が、機巧都市の礼拝堂に響く。

古き善き時代を髣髴とさせる、重厚な石造りの建造物。外観はもちろん、内部まで優雅な装飾が施され、国教会の信徒でなくとも、敬虔な気持ちになるだろう。

「むしろ、早いくらいかな？ 今夜の夜会は一時間で済んでしまつてね」
機械式の大蛇を引き連れて、さらびやかな淑女が入ってくる。

彼女の周囲は紅白の衣装を着た者たちが固めている。服の下に鎧鎧子を仕込んでいて、中世の騎士のようだ。それぞれ自動人形に従え、刀剣で武装している。

淑女は高い円蓋を見上げ、楽しげに笑った。

「堂々としたものだね。さすがは魔術師協会の秘密基地。ちょうどいいから、夜会が終わるまで、ここを拠点にしようよ」

騎士の一人がこうべを垂れ、慇懃に答える。

「可能かと存じます。制圧は既に完了しています」

「ご苦勞さま。そして、お手柄だったね。逃げた鳥を捕まえるのは難しいものさ」

ちらりと奥に視線をやる。説教台の下で、赤毛の女魔術師と、金髪碧眼の少年が拘束されていた。女は「灰十字」の所属を示す黒コートをまとっている。

「やあキンバリー先生、上手く逃げてくれたものだね。一体どんな魔術なんだい？ 離脱の暇はなかったし、確かに仕留めたと思ったんだけどな」

淑女は親しげにキンバリーに笑いかけ、そのとなりの少年を示した。

「こつちの坊やは何者だい？ とうるか、どこから湧いて出たのかな？ まさか、この子の魔術が空間転移——ううん、そのわりに、この子からはまるで魔性を感じない。つまり、さっぱりわからない。本当のところを教えておくれよ」

「……この人数をどうやって人回させた。金儲けですら、手勢は三十程度だった」

キンバリーが周囲を一瞥する。数百人以上の魔術師が無言で視線を浴びせていた。協会の監視をかくぐつて、機巧都市に置ける人数ではない。

淑女は麗しく微笑み、いきなりキンバリーの横つ面を蹴り倒した。

「質問したのは私だよ？ この坊やは誰なんだい？」

少年は十歳そこそこ。穏やかな笑みすら浮かべて、静かに座っている。状況がわかっていないのか、馬鹿なのか、あるいは精緻な自動人形かも知れない。

キンバリーは冷笑しただけで、答えなかった。

淑女は片肩を上げ——いきなり大蛇をけしかけた。

大蛇の牙がキンバリーの右腕を食い破り、毒液を血管に染み込ませる。それだけでも相当な深手だが、牙を抜いて数秒後、いきなり腕が爆発した。

血と、硝煙と、焦げた肉の臭いが立ちこめる。さすがのキンバリーも意識を飛ばし、血の海に倒れ伏した。淑女はそれを引き起こし、叩き起こす。

「まだ眠らないでくれよ。それで？ この子は誰？」

ほとんど瀕死で、キンバリーは皮肉っぽく笑った。

「……おまえも魔女なら……魔術で訊き出してしろ」

「ふふっ……ははは！ 大した覚悟だ！」

淑女が笑い出す。腹を抱えて、転げそうになりながら。

「そう笑わせるものではないよ。女帝の威厳が損なわれるじゃないか。まあ、そこまで隠すってことは、協会の重要な客人なんだろう。生かしておいてあげるよ。この子に価値があるのなら、教父も取引に応じるかもしれないからね」

淑女は意地悪な目をして、キンバリーの傷口を念動でもみほぐした。

キンバリーの喉から絶叫が、傷口から血があふれる。

「あはは、いい声だね、先生。先生でも痛みは感じるものかい？　なら、後でじっくり、教父の居場所を吐かせてあげるよ。こうやってね！」

爆発で崩れた骨に、念動をねじ込む。キンバリーはびくんと跳ねて、気絶した。

「あはっ、さすがに意識が飛んだみたいだね。さて——ここには牢獄（ガウゼ）みたいな設備もあるかな？　あるだろうね？　この二人はそこに放り込もう！」

命令を実行すべく、騎士が礼拝堂を出て行く。淑女は飽きたようにキンバリーを投げ出し、あくび交じりに笑った。

「ん……いい感じに眠くなってきたことだし、私は休ませてもらうよ。明日の夜会も特等席で楽しみたいからね。大勢の観客が待っているんだ」

そつと胸に手を添え、くるりとその場でターンを決める。

「この私、女帝ソーネチカの勇姿をね！」



Chapter 4 服従の対価

1

「要するに——ご承認はいただけない、と？」

落胆したようなエドマンドの聲が、残響をともなうて響く。

響き具合から言って、おそらく聖堂のようなホールだ。同席者は少なく、声がよく通る。だが、彼一人ではない。衣擦れや髪の流れる音が、かすかに聞こえる。

エドマンドは大きな言い回しで続けた。

「偉大なる同志にして先達、稀代の大魔女金蓄藏さまは、俺を後任にとおっしゃいました。つまり、俺が新たな金蓄藏です。何の不都合がありませんか？」

「証明できる者がいないでしょう、愚息よ」

不意に聞こえた女性の声に、雷真は愕然とした。

しっとり濡れたような声質に、覚えがある。実際に彼女の肉声を聞いたことはないが、この記録媒体を通して聞く音は、機械人形を通して聞いたものと同じだ。

何より、エドマンドを「愚息」と呼んだ。銀蓄藏グロリアと見て間違いない。



彼女は失聲し、政府に捕縛されたのではなかったか。雷真は無意識に呼吸を止め、聴覚に全神経を集中して、会話の流れを追いかけた。

「いやはや、継母上は頭が固いですね。そんなだから俺に出し抜かれちゃう。——ご覧ください。この印章が何よりの証拠、俺の継承権を証明してくれます」

「ええ。おまえがアストリッドを殺したのでない限りね」

エドマンドは乾いた声で笑い出した。

「滅相もない。俺は金満家さまを今なお敬愛しております」

「何もかも、笑わせますわー」

はつきり怒りをにじませた声で、ほかの魔女が言った。

「あの貴ババアを学生風情が倒したと？ 何とも馬鹿馬鹿しいっ……あれはくびり殺して

も死なないうような、亡者のごときババアですよ？」

「おっしゃる通りですが、学生風情は聞き捨てなりませんね。俺のライシンは上王です。

少なくとも《完全なる獣》を破壊するくらいの頓知は働く」

「……でしたら、貴ババアの最期の言葉を聞かせなさい。記録してあるのでしょうか？」

「録音魔具の持ち合わせがありませんでした。痛恨の極みです」

嘘に決まっている、と雷真は思った。この会合を盗み録りしているくせに。

魔女たちも嘘の臭いを感じ取ったらしい。銀鬚は厳しく言った。

「ぬけぬけとよくも申したもの。愚息よ、確たる証拠を出すがいい」

「それは無理です。金薔薇さまと俺の、信頼の中にしかありません」

「では、探すことですね。今は円卓から去りなさい。我らは師団の行く末を語らう必要があります。彼女の薔薇株五十万——全体の三分の一にも及ぼうかという、大きな議決権の配分も決めねばなりません」

「それでしたら、実に気の利いた、おあつらえ向きの解決方法がありますよ」

エドマンドの思いがけない言葉に、薔薇たちが顔を上げるのがわかった。

「誰が金薔薇さまの御意志を継ぐか、夜会ではつきりさせてはいかがです？」

エドマンドはたつぷり間をとって、可能な限り印象深く、薔薇たちに訴えた。

「誰が魔王となるか、賭けましょう。ご承知の通り、教父の予見にはこうある——魔王の玉座のかたわらに神性機巧は生まれる、と」

いくぶん独自の解釈が入っているが、硝子の推測と同じ理解だった。

「皆さま、とくに手駒を仕込んでいらつしやる。そいつが魔王になれば、神性機巧が手に入るってわけです。ならばついでに、セト家の財産もつけちまいましょう」

つまり、（金薔薇の座）と（神性機巧）の両方を、賭けの勝者が手に入れる。

エドマンドは楽しげに、そして饒舌に語った。

「俺は皆さまに比べりや若輩者ですが、そのぶん敬意をもってお仕えしたいと思っております。俺が金薔薇となった晩には——経緯上、セトの戦力と英国王の威をもって、貴女を今の窮状からお救いいたしましょう」

「紫善哉さま。俺は貴女が誰より欲している男に、さんざんコナをかけてあります。俺の就任に賛成してくださるなら、お力添えもできましょう」

ふん、と鼻で笑うような声が聞こえた。

そのあしらい方に、なぜだか、雷真のシナプスが強烈に刺激された。

俺は……知っている。昔、こんなふうにあしらわれたことが……ある。

「灰善哉さまを口説く材料はありませんが、忠誠心だけは持っておりますよ」

「とても面白い冗談だよ、黒太子。君の口から忠誠心なんて言葉を聞くとはさ」

皮肉ではなく、本当に可笑しかったらしい。機嫌のいい笑い声があがった。

「夜会が善哉の代理戦争になる——ってわけだね。それはとても面白そうだ。私は楽しいことが大好きだからね。その点では、アストリッドとも気が合ったんだよ」

「では、灰善哉さまはご賛成くださるのですか？」

「愚息よ。現時点で仕込みを終えていない者は、どうなるのです？」

銀善哉が言う。エドマンドが肩をすくめたのは、なぜかはつきりわかった。

「そんなうすのろに、金善哉の座は相応しくないとしよう？」

黒善哉、銀善哉、紫善哉、灰善哉の四人が、その通りだと言わんばかりに、含み笑いを

漏らした。——それでどうやら、話はまとまってしまったらしい。

少なくとも四人の善哉が、もう賭け馬を用意しているということ。

胃袋が石をのんだように重くなった。夜会で生き残っている者は、マダナスをのぞけば、全員が仲間のようなものだ。彼らに善哉の夢が伸びていたのか……。

「では、ゲームを始めましょう。偉大なる魔女に、茨の冠を捧げよ！」

エドマンズの暗れやかな声を最後に、音声はそこで途切れた。

2

しばらく、誰も口をきかなかった。

夜の中央食堂。照明がついているのはこの一角だけで、全体に薄暗い。ガラスの壁を通して、外の冷気が容赦なく忍び寄ってくる。

テーブルには雷真と雪月花、イオネラとエヴァがいて、テーブル上の再生機を見つめていた。再生機はイオネラがこの場で組み上げたものであり、近くには部品を置き取られた時計、電話、照明魔具の残骸などが無惨な姿をさらしている。

「紅茶が冷めてしまいましたね」

というエヴァの声で、雷真は我に返る。エヴァは手つかずのカップを取り上げ、

「淹れ直します」

「あ——ああ、悪い」

全員が金縛りを解かれる。雷真は頭を抱え、張り詰めた声で言った。

「結局、こないだ逃げた金善藏は、エドマンドが殺した……らしいな」

そして、彼が金善藏の後髪にすわろうとしている。

金善藏は配下を多数従えていた。〈金の林檎〉とかいう破壊兵器や、腐毒の瘴氣を推る秘術を持っている。その力と英国の両方を、あの狂人が手中に収めつつある。

幸い、と言っているのか、善藏たちは不服の様子だが――

「俺はおまえに賭けている」

先ほどの言葉が脳裏に甦り、雷真は絶望的な気分になった。

ふと、となりのイオネラが震えていることに気付いた。

「イオ？ 硝子さんの心配をしてくれてんのか？」

「もちろん、先生のことにも心配だけど……」

硝子が襲撃された――らしい件は、既に協会も把握していた。その上で、生存を前提に搜索してくれている。

「私が心配なのは雷真くんだよ。エイミーちゃんもゼルダちゃんも学院にいない――その手薄な状況で、結社はもう夜会を掌握してましたって話だよ、これ」

雷真の知らないところで、仲間たちまで巻き込まれていた。

手駒が魔土になれば、背後の善藏が金善藏の家督を継承し、神性機巧を手にする。

（くそつたれ……何だ、この展開は……!?）

これ以上、夜々を戦わせないのに。運命の女神などというものが存在するなら、腹

を抱えて笑っているだろう。

「これが全部あいつの策で、この録音が芝居ってことは……ない……よな」

イオネラはうなずき、再生装置に手をかざして、音声を巻き戻した。

「これは演劇じゃなくて、実際の録音だと思う。アストリッドを殺したんじゃないかって言われたとき、あのイカレた王さまが、らしくないくらい怯んだもん」

「怯んだ……あいつが？」

イオネラには確信があるようだ。雷真の不安が大きくなった。

「なら、連中の言う『手駒』ってのも……事実だよな」

「計算も合うよ。ロキちゃんとフレイちゃん、シャルちゃん、目輪ちゃん、雷真くん、女帝ちゃん、五輪——書庫は銀、黒、紫、灰、陛下を入れて五輪でしょ」

かつて、シャルの父エドガーとかわした言葉が、今さらのように思い出された。

「一度でも書庫のつるにからみつかれた者は、もう逃れられない」

エドガーはこうも言っていた。

「シャルやアンリが、そんな目に遭うかも知れないと言ってるんだよ」

自分自身を殴り飛ばしたい。夜々のことばかりに気を取られ、仲間たちから目を離した。その挙げ句がこのざま——まんまと結社の思い通りになっている。

「口ばっかじゃねえか、俺は……！」

「それは違うよ。雷真くんはいつだって、行動で示してきたんだもの」

——イオネラの言葉に、どれだけ救われただろう。

だが、慰めに思えたのも事実だ。人知れず、覚悟を決める。善哉を焼き尽くしてでも、仲間を護ると。そうしなければ、今まで吐いてきた言葉が偽りになってしまう。

雷真は思考を研ぎ澄まし、目の前の問題に集中した。

「五秒、つったよな。マグナスはどう考えりゃいいんだ？」

「学院長の賭け馬だよ。マグナスくんが魔王マダモウになったら、そのときは結社の負け——ってことだと思ふ。そうだったら、一致団結して襲ってきそうな気がするけど」

少女たちの意味ありげな視線が雷真に集まる。

結社と学院の対立を利用すれば、マグナス打倒が容易になるのでは？

そんなつもりは毛頭ない。雷真は視線に気付かなかったふりをして、

「結社の連中が俺たちをネタにして遊んでるのはわかった。シヤルと目輪が俺を攻撃してきたのは、また理由が違うと思うんだが——まあ、わかったことにする。わからねーのはソーネチカだよ。あいつは何で、誰に襲われてんだ？」

「女帝ちゃん？ 襲われてたの？」

イオネラが反応する。雷真は夜会の前に見たことを、かいつまんで説明した。

イオネラは腕組みして考え込んだ。

「ロシア製の人形兵器……ね。ほかの善哉の妨害だと思ふ？」

「それだと善哉同士が戦争になるんじゃないかな？ そもそも、何でロシア人同士でやり

合つてんだよ?」

それまで黙っていたエヴァが、助け舟を出すように言つた。

「ロシアは現在、不安定な情勢です。革命の機運が高まっています」

「革命——そうか、日露戦争の撤退理由が、それだったな」

「(血の日曜日) 事件以降、ロシア帝室は国民に畏れられ、疎まれていきます」

「血の……何? 悪いが、世界史はさっぱりで——」

「雷真——っ! 一緒に勉強したじゃないですか!」

夜々が雷真を悩まぶる。怒っているというより、すねている。

「ペテルブルグで十数万人のデモがあつて——軍が武力で鎮圧して——」

「あ、あー、あー、そういや、そうだった……かな?」

夜々がずるつとすべる。エヴァはくすりともしせず、真顔でうなずいた。

「犠牲者は五千人超とも言われています」

「五千……!? うろ覚えだが、数百人じゃなかったか?」

「雷真くん、オモテに出てる数字が全部じゃないよ。ロシアなんだよ?」

イオネラがめちやくちやな理屈を言う。だが、妙な説得力がある。列強国の中でも欧州の中心から遠く、広大な国土を持つがゆえ、謎めいた印象がぬぐえない。

「凄惨な事件だったのは間違いないよ。広場に血煙が漂つたって話だし」

「皇帝は憎まれてるってことか……。じゃ、あいつも大貴族の娘とか?」

誰も答えない。知らないからだ。

結局、ロシア情勢をおさらいしたところで、何もわからなかった。

日本軍なら把握しているかもしれないが、軍と硝子の関係はもう険悪——独断で結社にくだったのだから当然だ——なので、軍に問い合わせるのも危険な気がした。

「——そうだ、硝子さんの捜索は協会がやってくれてんだろ？ 見つかりそうか？」
イオネラは眉間にしわを寄せ、難しい顔をした。

「市外に連れ出されていたら、捜索は難航するだろうね……。とりあえず、この記録媒体を渡して、解析を頼んでみる？ 手がかりになるかも？」

「そうしてくれ。俺が持つてても仕方ない」

「OK。女帝ちゃん襲撃事件のことも探ってみるね」

「ありがとう。何から何まで、助かる」

イオネラは微笑み、エヴァと一緒に食堂を出て行った。

静寂が戻ってくる。既に午後八時を過ぎ、食堂はもう営業していない。ひと気もなく、普段は聞こえない時計の音が聞こえてきた。

（くそ……俺はどうすりやいいんだ……!?）

どうすれば、全員を護れる？ 夜々を護り、仲間たちを護れる？

硝子の捜索は協会に任せるしかない。心当たりも手がかりもないのだし、雷真は毎晩、夜会に参加しなければならない。だが、硝子が見つからないことには、ラザフォードとの

契約が果たせない。捜索の進展を待つだけというのは……つらい。

せめて味方がいればとも思うが、いつもの面々は頼れない。

情報が欲しい。事件の全貌をつかみたい。いっそ、エドマンドに――

（冗談じゃねえ！ あいつを頼るなんざ！）

もう二度とごめんだ。あんな男に関わって、惨劇の手助けをしてしまうのは。

（ああ、くそ！ もっと頭使えよ、俺……！）

考えろ。極力夜々を戦わせず、しかし蓋蔽の思い通りにはさせず、夜会の進行も妨げず、それでいて虚無石を手に入れ、学院長の密命を果たす手段は――

（ある！）

何と言う難な方法だろう。自分で閃いておきながら、雷真はそのアイディアに驚く。

「雷真。何か思いついたんですね？」

相棒が期待に満ちた目を向けてくる。雷真はうなずいた。

「ああ。だが、とんでもない……見当外れなやり方かもしれない」

「雷真のやり方が見当外れだったことは、ありません」

信頼のこもった眼差し。雷真は意気に感じながら、

「それじゃ、今から美人を口説きに行こう！」

と、いきなり信頼を裏切るようなことを言った。

女子寮の廊下を、ひりつくような沈黙が支配していた。

再建されたばかりなので、調度類は真新しく、まだ生活感がない。ソーネチカが自室に近付くと、留守番の黒服——最年長のベテラン士官が気付き、敬礼した。

「お帰りなさいませ。夜会、お疲れさまでした」

「そちらも、機体を任せますわ」

「は。ただちにヨルムンガンドの整備にかかります」

三体の機械式、ゴレムに黒服たちが取りつき、装甲をはがし始めた。

メンテナンスは一貫して彼ら任せ。銃器の扱いや格闘術にも長けているが、彼らは技師だ。魔術師としては心もとなく、機巧戦闘の役には立たない。

ソーネチカはソファに身を沈め、息をついた。ひどい疲労感に襲われている。ベテラン士官が近付いてきて、ひれ伏すようにして言った。

「畏れながら意見具申いたします——英国を脱出しましょう」

「どこへ逃げようと言うのです？」

ソーネチカはあくまで気のない言葉を返す。

「海路は既に抑えられているはず。よしんば出国できたとしても、バルト海ルートは手が回ったと考えるべきです。一度そこを使ってますもの」

「フランスに渡り、陸路で東を目指すのはいかがでしょう。道は幾つもあります。あるいは、新大陸回りはいかがです？　かなりの遠回りになりますが、それゆえに、敵の盲点と
なっているはず。アメリカとシベリア、両大陸を横断し——」

「長旅になれば、それだけ危険も高まります。そもそも」

ソーネチカは身を起こし、強い口調で言った。

「今戻るなど、あり得ません。夜会が終わるまで、てこでも動きませんわ」

「……もう十分に、ご活躍なされました。幸いにも学院は日々、紙面を賑わせております。今、ご身分を明かされれば、国民の見る目も変わりますよ」

「いいえ、まだまだ……この程度では誰も納得させられない。議会も、民衆も——」

テールを叩く。それから、己の激昂を恥じるように、取り澄まして笑った。

「〈魔王殺し〉と同盟を結びましたの。約定をたがえること、なりません」

「我々ではお譲りできない、と申しているのです！」

士官の言葉に熱がこもる。不甲斐なさが声ににじみ、痛々しいほどだった。

近衛を任された者にとって、これを言うのはどれほどの屈辱だろう。

ソーネチカは穏やかな口調で、彼の忠義をいたわった。

「貴方たちはよく尽くしてくれました。武器の調達から、移動手段の確保まで、獅子奮迅の働き——ごめんなさい、慰めに聞こえますかね？」

「もったいなく存じます。ですが、優秀な魔術師がお側にあれば、とも思います」

それはないものねだりだ。ソーネチカの父は魔術師の掌握に失敗し、敵を増やし過ぎた——もう誰が敵かもわからない。名の知れた「優秀な」魔術師を国外に連れ出せば、それだけソーネチカの身分が敵にバレやすくなるという事情もあった。

「どうかお考え直してください。連中はどうやら〈因果性置換〉を手にした様子。先ほどの貯水池での襲撃、敵はその術を……」

数時間前の戦いで、敵は最後、いろりの氷牢からたやすく抜けた。

空間転移とは様子が違った。幻覚が解けるような、そんな消え方。だが、彼らの攻撃は本物であり、決して幻覚などではなかった。

あの魔術は、ソーネチカの自動人形が搭載しているものと同じ……。

「学院を離れるべきです。一刻も早く！」

「……わたくしが入学したのは、名を上げるばかりが目的ではありませんのよ」
お互いに承知していることを、ソーネチカは空しく口にする。

「ここならば、彼らの追撃がないと——ここが地球上でもっとも安全な場所だと、誰もがそう考えたからです。総主教さまも、そうせよとおっしゃいました」

「学院の警備体制は弱体化しております。先刻も援護がありませんでした。もともとそういう場所ではありますが、いかにも薄情です。留まってよいことはありません」

議論がふりだしに戻る。ソーネチカは目を伏せ、弱々しく微笑んだ。

「……わたくし、夜会をととても楽しみにしていました。オルガとの対決こそ逃しましたが、

シャルロットやヒノワ・ドモンとは、楽しく戦えると思っています」

視線を戻し、凛として告げる。

「国に戻ったところで、弱みとなるのが國の山。ならばいっそ、自らの手で——」

「殿下！」

四人の士官が一斉に声をあげた。ソーネチカはふふつと笑つて、

「殿下はおよしなさい。ともかく、結論はこう——嫌ったら嫌、ですわ！」

つんとそつぱを向く。わがままな姫君を前にして、士官たちは閉口した。

「要するに、わがままの理由は夜会か。何でそこまで戦いたいんだ？」

「なぜって、それは——」

違和感に気付いた途端、ソーネチカの細い腰は、三センチも宙に浮いた。

あまりにも自然だった。割り込んできた様子もなく、初めからそこにいたかのような、

くつろいだ声——ゆえに、のせられてしまった。

士官たちも同様だ。まばたき一回ぶん、反応が遅れる。

だが、スイツチが入った後は速い。まさしく稲妻のごとき動きで、雷真をその場に押し

倒し、ナイフ、拳銃、ワイヤーなど、それぞれの得物を突きつける。

ソーネチカ自身はとくに機械ゴーレムを連結させ、大蛇の姿に変えている。大蛇の舌、

機銃を兼ねた鋼の刃先がちろちろ揺れ、雷真の鼻先をくすぐった。

だが、彼は涼しい顔で室内を見回し、軽い調子で言った。

「余計なお世話だけだよ、こんな穴だらけの結果、魔女よけにはならねーぞ？」

ソーネチカは面喰らい、戸惑った。どうやら、彼に敵意はないらしい。ベテラン士官がソーネチカの表情をうかがう。ソーネチカは決断した。

「……彼を解放なさい。もしその気があったなら、ひとりふたりは死んでいます」

士官たちは不服そうだったが、命令通り解放した。雷真が立ち上がり、平然とほこりを払う。ちよっぴり腹立たしくなつて、ソーネチカは彼をなじつた。

「不作法ですわね。こんな夜更けにノックもなく、淑女の部屋を訪うなど。ああ——これが日本の流儀、すなわち夜這いというものですのね？」

「そんな風習は江戸時代に置いてきたし、夜這いなんぞ考えたこともねえし」

「わたくしでは不足だとしても……!?」

「いでででっ、この舌、刺さる！ 蛇をしまえ！」

「さっきと用件を言いなさい！ 毒牙で穿刺しますわよ？」

「あんたに頼みがあつてきた。どうしても恵んでもらいたいものがある」

「恵む？ 何を？」

雷真はソーネチカの胸を指差した。コルセットで胸を締め上げているので、ふくらみが強調されている。ソーネチカのひたひたに冷や汗が浮いた。

「やはり目的はカラダ……噂通り破廉恥な男ですわ……！」

「違うっつもの！ あんたのそこから飛び出した石！ あれを讀ってくれー」

何も知らない士官たちが、怪訝（けげん）そうに視線をかわす。

胸元を押さえ、ソーネチカは冷笑を浮かべた。

「……嫌（いや）かなことを。これは、おいそれと余人に渡せるものでは」

言葉尻が宙に浮く。ソーネチカは少し考え、確かめるように訊いた。

「どうしても、欲しいと？」

「ああ。どうしても欲しい」

「（取引）のつもりできたのでしょうか？ 石の対価に、何でもしますか？」

「そいつが本当に俺（おれ）の捜しているものなら、する」

即答だ。質問したソーネチカの方が驚く。

この男は、とにかく言いなりにならないことで有名だ。多くの者が言いなりにしようとして失敗している。その男が、自分から、何でもすると言っている……。

これは、利用できるのではないか？

「わかりました。差し上げましょう」

「……本当に約束だな？ 詐欺（ぎせき）じゃねえな？」

「詐欺はそちらの得意技です。特に女は騙（だま）してばかりと聞いてますわ」

「風評被害（ふうへいぎさ）だー俺は何をすればいい？」

「もう察しがついているのでしよう？」

つかない程度の阿呆（おろこ）なら、こんな取引は願（ねが）い下げだ。

雷真はこちらの反応を探り探り、言葉を並べた。

「とりあえずは護衛。ひょっとしたら相手の調査。最終的には討伐……だな？」

「いいえ」

正解だったが、もっといい条件が浮かんだので、ソーネチカはこう言った。

「わたくしに忠誠を誓いなさい！」

4

「そうと決まれば、警護体制について詰めましょう」

意気揚々と文帝がのたまう。当然だが、黒服たちは矍然としてゐる。忍び込んできた男を護衛にしようと言うのだから当然だ。

雷真は黒服たちに同情しながら、しかし好都合ではあるので、話を合わせた。

「その真疑、この部屋が見える位置に警備の詰め所がある。ボロい掘っ立て小屋だけだな。そこを排他すりゃ、夜通しあんたを警護できる」

「何を言っているのです。今夜からここにお泊まりなさい」

「——は？」

「女子寮とは言え、ここは最上階の角部屋。ほかの学生に迷惑がかかることはありません。現にわたくしは供の者たちを入れていきますし」

黒服たち、そして雷真を順に見やる。

「貴方には特別、寢室へ入ることを許可します。わたくしのかたわらで警護なさい」

「いや……そりや、まずいだろ？　まずいよな？」

「口答えは致しません。わたくしと貴方は今や主従関係ですよ」

「あんたが憤め！　下僕と同じ部屋で寝たがる主がどこにいる！」

「下僕ではなく近衛です。貴方はわたくしの騎士。自覚をお持ちなさい」

主人の威厳を見せつけるように、ソーネチカは厳しく論じた。

「貴方が先ほど言ったことではありません？　寢所を護るのは穴だらけの結界のみ——有能な魔術師を配すれば、結界を構築する手間も省けます」

「……まあ、評価してくれるのは嬉しいけどよ」

「やはり好色ですわね。同室のお泊まりが嬉しいなどと」

「恣意的な抜粋やめろー　じゃあ、俺と雪月花もここに泊まり込む！」

「そんなことが許されるわけないでしょう。貴方は敵国の人形使いですよ？」

言われて気付く。黒服たちにも、まだ雷真に対する警戒心が残っている。

「あんな高性能人形を三体も寢室に置いて、わたくしたちが安眠できるとでも？」

「だからって、マジで俺だけか？　それでいいのか？」

「あまり期待をせぬよう。わたくし、下着はつけたまま寝る主義ですよ」

「そこを残念がることを俺に期待するな！」

「ほかの者は持ち場へ。今夜はもう休みます」

一方的に会話を打ち切る。黒服たちが機械式ゴーレムの整備を終え、次々に退出した。そうして、雷真だけがぼつんと取り残されてしまう。

雷真は落ち着かない。貴族の娘と一晩中二人きり——これは少々、刺激が強い。

「何を呆（呆）けているのです。わたくし、今から入浴します」

「あ……ああ、わかったよ」

ドアへ向かう。その背中に、怪訝（くわいぜん）そうな声がかかった。

「どこへ行くのです。介添えをなさい。洗いものの始末も騎士の務めですわ」

「……俺は一体、どこの国の常識を学んできたんだろう？」

「ごちゃごちゃ言わずに！」

脱いだ衣服を投げつけてくる。ちらりと黒レースの下着が見えたが、視界はすぐ布地に覆い隠されてしまった。甘い残り香と移った体温に包まれ、頭がぼうつとなる。

動きの鈍い雷真を見て、ソーネチカが冷ややかな眼をした。

「使用人は主の肌を見ることなく、目を伏せておくものですわよ。いやらしい」

「……まだ研修期間中なんだよ。つか、俺は騎士さまじゃなかったのか？」

「口答えは赦（ゆる）しませんと言いました。バスルームに行きますわよ、従僕」

「格下げすんな——っておいおいおい！」

半裸のソーネチカがうるきそうに振り返る。雷真は仰天した。

「中にまで……俺を連れて行くつもりか……!?」

「愚かなことを言いますわ。この状況、護衛なしでは危険です」

「なら俺の代わりに相棒が入るー。それでいいだろ!?」

「いいはずがないでしょう。危険な禁忌人形と、丸腰で二人きりなど」

「だったら、あんたのゴーレムも一緒に入れろー」

「駄目です。錯びます」

「ともかく、それだけは駄目だー。俺は絶対、中には入らねーぞー」

強情に拒む雷真を見て、ソーネチカは興奮めしたような顔をした。

「やむを得ません。ドアの前で見張っていなさい。——それならば?」

「……まあ、そのくらいなら」

と承諾してしまったがゆえに、雷真は長風呂に付き合わされることになった。

バスルームのドアの前に陣取って、ソーネチカがあがるのを待つ。

（敵が襲撃してくるなら、今だな）

本人が言った通り、ソーネチカは丸腰だ。雷真は（天眼）のスキルで周囲を警戒しよう

とした——が、困ったことに、天眼は薄い壁一枚程度なら透過でき、あちら側の様子が、

ありありとわかってしまう。せめて薄衣一枚身につけてくれれば……。体表から二センチ

程度は相手の領域内なので、簡単には透過せず、目隠しになってくれる。

（いや駄目だ。女帝さんも天眼をマスターしてたら、俺の魔力波を察知されて、のぞきが

バレ——って、いやいやいや、何を言ってるんだ俺は——

そんなつもりもないのに、誤解されるのは勘弁こうむりたい。

ドアの隙間からかくわしい香りが漂ってきて、雷真の理性を危うくする。まさしく蛇の生殺し。地獄のような一時間が過ぎ、かちやりとドアが開いた。

ほかほかと湯気を立てながら、ソーネチカが出てくる。雷真は手で顔を覆った。

「阿呆！ タオルくらい巻け！」

「何と用意の悪い……バスローブを出しなさい。熱い熱くないで！」

そうだった。雷真はあわててタオル地のローブを取り、ソーネチカにかぶせた。

「……そんなやり方がありませんか」

ソーネチカは不満げだったが、さすがに体を拭けとは言わなかった。

代わりに髪を拭かせる。ゆるやかにウェーブした髪から、壊れものを触るような手つきで、雷真が水気を切っていく。

先ほどから、頭の中で般若心経が繰り返して流れている。上気したうなじは美しく、真珠の肌をすべる水玉が極ましく、思わず苦情が口をついて出た。

「いい加減にしろよ……俺を木石か何かだと思ってるじゃねえのか……？」

「木石でなければ何だろう？」

「男だ！ 健康的な男子！」

「びくりとするくらいは許しますが、鎌首をもたげたら蛇の頭を落とします」

「縮み上がる——どこのことを言つてんだよ、わかるけど——」

介添えが終わると、雷真は洗ひ物をまとめつつ、天眼で周囲を探った。

となりの部屋に黒服が二人、廊下に一人、残る一人は寮の外にいる。三階下の裏庭では、夜々がばつんと、警備の番小屋前で待機していた。

「悪い、ちよつと意圖ける。ベッドに潜つてろ」

そうソーネチカに言い置いて、返事も待たず、雷真は窓から飛び降りた。

「——あ、雷真——」

相棒が気付いて、駆け寄ってくる。雷真は手を振り、後ろの番小屋を観察した。

即席の宿泊所なので、いかにも立てつけが悪い。

「悪いな、夜々。こんなあばら屋に泊めることになつちまつて」

「そんなことはどうでもいいです。夜々が知りたいのは、どうして雷真から女狐の匂いにするかつてことです……」

「せ、洗濯物を押し付けられただけだ。こつち寒くないか？ 毛布足りたか？」

「足りません。ですから、雷真とあつたため合う必要があります♡」

「足りてるようだな。小紫はどうした？」

「言いつけ通り、雲雀さんを探しています……けど」

見つからないらしい。剣の腕は確かだが、師は風来坊気質で、アテにならない。

「あの……雲雀さんって、その……怖い方ですよね？」

「まあな。俺もあの人の全部を知ってるわけじゃないし……。けど、硝子さんのことも、俺たちは全然知らなかっただろ。同じことだよ、きつと」

もつとも、そうあつて欲しいという願望に過ぎないのだが。

一応は納得した様子で、夜々は話題を変えた。

「例のへかなめいし」ですけど。ソーネチカさんのは、本物でした？」

「まだわからない。折を見て確かめるつもりだが、今日は無理だ。あいつも俺たちを警戒してるだろうし——本当に本物なら、本物だとは言えない気がする」

真に価値あるものなら、信頼もしていない相手に、事実を明かせないだろう。

だから、今たずねたところで意味はない。それに——

「あいつの不興を買うと、物騒なことになるからな。だから、まずは信頼を得ることだ。

夜会ではパートナーとして、それ以外では護衛として役目を果たす。その労働の報酬として、石をもらう約束をした」

「時間がありませんね」

ときりとする。だが、夜々が言っているのは、自分の残り時間ではない。

「そうだな。学院長の切った期限まであと三日しかない」

「ソーネチカさんの持っているものが、まったく別の魔石だったときは？」

「ソーネチカにや悪いが、かわつてる暇はない」

「またそんな言い方して——」

夜々がこぶしを振り上げる。雷真はあわててなだめた。

「見捨てないよう努力するよ。けど、こっちはギリギリなんだ」

「私がこつそり借りてきちゃおつか？」

空間が波打ち、小紫が虚空から姿を見せた。一緒に、いりりも現れる。

小紫は小さな体をびんと伸ばして、雷真を見上げた。

「寝てる間に雷真の糸でこちよこちよしたら、ほんって飛び出すんじゃない？」

「俺は痴漢か。バレたら大蛇に食われちゃうぞ。いりりも危険と思うだろ？」

「……私はただ、雷真殿のご判断に従うのみです」

視線を合わせずにつぶやく。夜々が怪訝そうに姉を見上げた。

「姉さま？ 何を怒ってるんですか？」

「お、怒ってなどおらぬ！」

逃げるように顔を背ける。夜々はしきりに首をひねっていたが、雷真はいたたまれない気分になり、言い訳のように頭を下げた。

「硝子さんのこともあるってのに、面倒をかけてすまない。それでも、おまえたちだけが頼りなんだ。ここは俺に預けてくれ」

夜々はどこか誇らしげに、小紫は元氣一杯に、そしていりりは不承不承、三姉妹はそれぞれに雷真を見て、うなずいた。

「ありがとよ。それじゃ、俺は戻る。上で夜明かしするよう命令されたんだ」

寝室で、というのは黙っておく。夜々は見ると見る涙ぐんだ。

「新婚なのに……夜々の体が夜鳴きしちゃいます……っ」

「そういう冗談やめろ。露国にまで俺の悪評を広める気か」

「いつまでここを開けておくつもりですー 湯冷めしますわー」

頭上からソーネチカの雷が落ちる。と同時に、夜々がびしりと固まった。

「……雷真」

「なっ、何もないぞ！ あいつが勝手に風呂に入ったただけだぞ！」

「どうして雷真から石けんの匂いがするのか、納得のいく説明が聞きたいです♡」

説明しても納得してもらえないだろうことは、説明する前からわかっていた。

5

翌朝、雷真はソーネチカの寝室で目を覚ました。

ソファの上で、ミノムシのように毛布にくるまっている。時刻はまだ夜明け前で、外は薄暗い。時計の表示は六時半——ちょうど「起こせ」と言われた時刻だ。

雷真は毛布をたたみ、ソーネチカのベッドに近付いた。

「朝だぞ、女帝さん。起きろ」

うん……、と悩ましげな吐息が漏れ、ソーネチカがこちらに寝返りを打った。

その頬が、きらりと光る。

（……涙？）

確かめようと顔を近付けた途端、ふわっと甘い香気を感じて、あわてて身を退く。思いがけずあらわになった寝姿は、息をのむほど美しかった。

薄いまぶたに長いまつ毛。この首の細さ、肌の白さはどうだろう。自分が吸血鬼なら、とつくに犬歯が伸びている。眺めているだけで、妙な情動が込み上げてきた。

雷真は邪念を追ひ払い、ガタガタとベッドを揺すった。

「起きろー ほらー 朝だ朝ー」

いきなり騒が飛んできて、雷真のひたいを直撃する。

ソーネチカはのっそりと身を起こし、不機嫌そうに腕を伸ばした。寝起きでも顔はむくまず、いつもの美しさが維持されている。ただし、多少寝癖のついた髪が、いつもの彼女らしからぬ隙を感じさせ、それがかえって魅力的だった。

「……無粋な男ですわ。フランス人を見習えとは言いませんが、魅力的な少女を起こすにあたり、もう少し気の利いたやり方は思いつきませんでしたの？」

「うるせー文句言うな。別にあんた、俺にロマンスとか求めてねーだろ」

「口の利き方もなってませんわ」

「……それは認める」

ソーネチカは白らシーツをめくり、すらりとした足を雷真に差し出した。

「……何だ？」

「ストッキング。はかせなさいな」

「靴下くらい自分ではけー」

ソーネチカが半眼になる。怒った顔も美しい——ではなく、雷真は仕方なくクロゼットを開け、靴下を引っ張り出して、ソーネチカの足にあてがった。

くるぶしをつかんで持ち上げる。手触りは想像以上にやわらかい。彫像のごとき足先に靴下をかぶせ、上へ上へと上げていく行為は、何やら背徳の香りがした。

なめらかなすね、シャーブな腰、ほっそりとしたふとももへと布地は上がり――

「下着を見てはいけません」

「……見てねえ」

「見たら目玉がなくなりますわ」

「えぐる気か！ だったら自分ではけ、意け者！」

無事に靴下をはかせ終わると、ソーネチカはベッドを降り、寝巻を脱ぎ捨てた。

雷真は両目を覆った。

「あんたも痴女かよ……。何かもう、慣れてきたけど……」

「使用人の前で着替えをするなど慣れています。さつきと衣装をお持ちなさい！」

雷真は観念して、慣れない手つきで（お召し物）を着せて行く。

着替えの次は洗顔の介添え。それが終わってリビングに戻ると、黒服たちが朝食の用意



をととのえていた。テーブルクロスを替え、食器を並べている。

朝食が始まる。ほかの学生と一緒にではなく、寮のメイドがこの部屋に届け、黒服が給仕するらしい。ほんやり驚めていると、黒服が椅子を引き、雷真を見た。

——座れ、ということらしい。

なるほど、テーブルには確かに、二人分の食器が用意されている。

「どうぞ、召し上がれ。同じものを人形にも出しますわ。食事をするのでしょぅ？」

「ああ、頼む。それじゃ、イタダキマス」

ソーネチカに付き合つて、朝食をとる。今朝焼いたと思しきパンは、まだ温みがあり、生地が甘く、香ばしい。ベーコンとジャガイモは湯気を立てている。赤いスープには独特の酸味があり、少し遅れて、トマトのものだとわかった。

「ゴルシチ——風味と言ったところですわね。お口に合いました？」

「ああ、美味しいよ。……なあ、何で態度を変えた？ これじゃ賓客扱いだぞ？」

ストレートに疑問をぶつける。女番は試すような視線をくれて、

「初めて言葉を交わしたときのこと、覚えてらして？」

「ああ——闘技場の前だったか。あんたの気性が荒いつてこと、あのとき理解した」少し踏み込んだ話もした。そして、お互いに共感のようなものを覚えた。

だが、雷真にとつてもっとも印象深いのは、オルガとシャルが最初に戦ったときのこと。シダムントが致命傷を負ったとき、ソーネチカの大蛇が割つて入った。炎のような瞳、嵐

のような魔方に、当時の雷真は圧倒されたものだ。

紅茶をすするソーネチカの口元が、満足げにゆるむ。

「あるとき貴方に興味を持ちました。お茶くらいご馳走したいと思っていましたわ」

「そりゃ光栄だが、風呂とか着替えを手伝わせるのはどうかと思うぞ」

「それは、貴方の心根を試したのです」

ソーネチカはカップを置き、真顔で雷真を見つめた。

「屈辱的な扱いを受けても、わたくしを主として尊重できるか。おかしい氣を起こさないか。わたくしだけではなく、彼らを納得させるために」

黒服を見やる。いかつい顔のベテラン士官は、澄まし顔のままウインクした。

つまり、観察されていたのだ。雷真は冷や汗がにじむ思いだった。

欲望をこらえて正解だった。洒落ではなく切り落とされるところだった……。

ソーネチカはかすかに頬を染め、言い訳のように付け足した。

「着替えも、入浴も、朝起きるのも、普段はひとりですわ。わたくし、自分のことは自分でしますのよ？」

「ああ……独立独歩の（女帝）さんだもんな」

「そうですわ。怠け者ではありません」

すねた口ぶりが不意打ちのように可愛らしい。雷真は思わず笑ってしまった。

「あんだ、案外、可愛いところある——」

ずどんつ、と大蛇の尾が床を打つ。カップが揺れて、雷真は青ざめた。いつドッキングさせたのかもわからない。バスタブほどもある大蛇の頭部が、雷真の頭をひとのみにしようと、至近距離から見つめていた。

主たるソーネチカもまた、冷徹な瞳で雷真を見据えている。

「わたくしの不興を買わぬが賢明と、警告しましたわよ？」

「……ワタクシのどこが不興を買ったんでゴザイマスか、女帝サマ」

「痴れ者ですわー たった今、馬鹿にして笑ったではありませんのー」

「してねえー 親愛のスマイルだ、親愛のー」

「親愛——そういう笑いも……あるのですか」

ソーネチカがちらりと黒服をうかがう。黒服はうなずき、雷真に理解を示した。

それで大人しくなる。雷真はほっとして、大蛇を押し返し、話を進めた。

「夜会で味方してくれたのはなぜだ。前は味方なんか要るかって態度だったろ」

ソーネチカは目を伏せ、言葉を遣ふようにして、慎重に言った。

「貴方は己の損得ではなく、義憤で動く義勇の士と見受けました」

「おい、そりゃとんでもない誤解——」

「そういう聖人ぶった輩を、わたくしは信用できません」

「……ますますわかんねえぞ、なら何で俺を雇う？」

「貴方は石が欲しいと言った。利害で動く人間は、利を与える限り信用できます。ゆえに、

護衛を依頼したのです」

「……利害で動くなら、『あんたを殺して石を奪う』って選択肢もあるぜ?」

びりっ、と黒服に緊張が走る。だが、ソーネチカは涼しい顔で受け流した。

「貴方はそうはしません。なぜなら、貴方の目的が遠のくからです」

「——その通りだ」

読まれている。雷真が彼女に何かすれば、夜会参加資格の停止もあり得る。

なごやかな空気が戻ってくる。黒服が息をつき、ふところの銃から手を放した。

「それで、報酬はいつもらえる?」

「——その話をしなかったのは不誠実でした。夜会が終われば、と考えています」

「それじゃ駄目だ。もっと早く譲り受けたい」

「報酬を手にしたら、貴方は任務を放棄するのでは?」

「俺は約束は守る。……可能を限り」

ソーネチカは細い首を傾けた。巻き髪がさりと肩に垂れる。

「口約束を信じる?」

「なあ、もう腹芸はやめにしないか。お互い」

雷真はフォークを置いて、ソーネチカを見つめた。これを言えば、取り返しがつかない。いつも通り厄介事に巻き込まれ、深みにはまるとわかっていながら——言う。

「あんたを襲った敵の名を教えろ」

「……それを聞いて、どうしますの」

「近くにいるなら、俺が黒幕をぶっ倒す。それで任務達成だ」

ソーネチカは眉に視線を落とし、ぼつりと言った。

「……不可能ですわ。あの敵を倒すなど」

「その理由を話してくれと言っただ」

「腹芸はなし……と言いましたわね？」

「ああ、言った」

「では、胸標を聞いてたずねます。貴方、これまで何人の少女を抱きましたの？」

ぶふっ、と雷真は紅茶を噴いた。ソーネチカはわざとらしく口を覆った。

「まあ、はしたない」

「はしたないのはそっちだー とんでもないこと言ったぞ今！ 何度でも言っただけが、俺は誰にも、何にもしてねえー」

「あら、まあ、胸を張つてのヘタレ宣言とは恐れ入りますわ。教会のブラザーたちでさえ、もう少しやり手ですわよ。貴方の主張通り、一切誰にも手を出していないのなら、そこは不能を疑うところではなくて？」

なぶっているのではなく、本当にわからないという顔だ。雷真は赤面した。

「別に……不能じゃ……ねえー」

「同じことです。使えない道具など、ないのと同じですわ」

「なんつーことを言いやがる……このお嬢さまは……」

背後の黒服が肩を震わせる。明らかに笑いをこらえていた。

「で、伝家の宝刀ってやつだよー やたらと刃物を振り回すのは素人だ。本当に切れ味のいい刀はな、イザってときまで抜かねーもんだ」

「カタナどころか、本当は可愛らしいテーブルナイフではありませんの？ それに、試し切りの相手もなしに、どうして切れ味がわかるのでしょうか」

「うっ……それは、だな……」

「服だとか、人形だとか、ソーセージの皮で試してみましたの？」

「いい加減にしろー 何だその下品な婉曲表現！」

「ふふっ……ふふふっ」

ついに、ソーネチカが笑い出した。お腹を抱えて、しかし、あくまで上品に。

「ああ、可笑しい……っ」

ドネタで大喜びの淑女とは、何ともシュールな光景だ。それとも、西洋の宮廷では普通のことなのだろうか。雷真は恥ずかしいのも忘れ、笑い転げる女帝を眺めた。

謎の塊だったソーネチカが、少しずつ、わかってくる。

言動は高圧的だし、危険人物ではあるが、決して高慢ではない。

義勇がどうのと言うなら、ソーネチカがまさにそれだ。危険を冒してシャルをかばってくれた。学院が危機に見舞われるたび、率先して戦いに身を投じた。

好戦的だが、馬鹿ではない——どこか、思っていた以上に聡明だ。不正を憎む一方、他人の高潔さを疑うことも知っている。そして、好敵手にはぶつからずにはいられない。

高貴な姫君どころか、『血気盛んな田舎侍』のようで、急に親しみがわいた。ようやく落ち着いたのか、ソーネチカは涙をぬぐって、謝った。

「ふふっ……失礼……こんなに笑ったのは、生まれて初めてですわ……！」

「ああ、そうかい。そりや控えめなこった」

苦笑で流す。その途端、違和感に気付いた。

初めて？ 初めてと言ったのか？

（バカ笑ひする機会が、ない？）

改めてソーネチカの所作を見る。その洗練された手つきや物腰は、一朝一夕で身についたものではないだろう。彼女は一体、どんな人生を歩んできたのか。

ソーネチカの生き方——強者に戦いを挑み続け、頂点を目指す姿勢にも、性格のひとつで片付けてはいけない、宿命的な理由があるような気がした。

現に昨夜、言っていた。夜会に挑んだのは、議会や民衆を納得させるため……。

彼女の（身分）とは、一体いかなるものなのか。

（殿下って……まさかな）

思い浮かんだ考えを雷真は否定した。さすがにそれはないだろう。時期的にも、立場的にも、この程度の警備人数で、そんなご身分の方がやってくるわけではない。

「なるほど、親愛の笑いというものがわたくしにも理解できたように思います。テーブルナイフ——ぶふっ」

ソーネチカはまだウケていた。雷真は洗面になつて、

「あんたのそれは嘲笑だぞ？　そこ間違えるなよ？」

「いいえ、親愛です。——今宵は夜会の再開（二日目）ですわね？」

「え？　ああ……そうだな」

「貴方の働き、頼りにしてますわ」

にこり、と麗しく微笑む。二人のあいだに存在していた高い城壁のようなものが、いつの間にか、崩れ落ちてしまつていた。

……上手く話をはぐらかされた格好だが、腹は立たない。勧められるままジャムを舐め、紅茶を飲みながら、雷真は今日の夜会に思いを馳せる。

からみついた笑のつるから、仲間たちを護れるだろうか、と。



Chapter 5

太陽が見ている



1

食事の後、雷真はソーネチカに頼み込み、側を離れる許可をもらった。

女子寮のロビーでは、男子学生は非常に目立つ。脂汗をにじませながら電話に張りつき、交換手に工学部への接続を頼むと、しばらくして、眠そうな声で返事があった。

「もひもひ……らいひんくん？」

「おはよう、イオ。進展はあったか？」

たちまち目が醒めたようだ。イオネラはすまなそうに、低い声でささやいた。

「ごめん……まだ全然みたい。だけど、ロンドンから応援がくるって」

硝子捜索の人手が増員されるということだ。それはいいニュースだろう。

もつとも、その捜索で見つかるものが生者である保証はない。

「そっちはどう？　っていうか、何でそういうことになってるの？」

すねた声。おそらく、電話の向こうで口をとがらせている。

「また新しい子に浮気し？　欲求不満のはけ口なら、私がなってあげるのに！」

「夜々みたいなと言うな。理由は言えないが、必要なことなんだ」

「気をつけなきゃだめだよ。女帝ちゃんが善哉の手駒なら、全部が罠かも知れないから」

「——罠？」

「使われている場面をわざわざ見せたのかも、つてこと」

なるほど。もしそうなら、ソーネチカの虚無石は確実に偽物だ。都合よく持っているのも、それを雷真に見せたのも、すべて芝居だろう。

だが、上手くは説明できないのだが……

「……騙されてるとは思わない。それに、今は釣られる以外の選択肢がない。ふところに突っ込んで、あっちがボロを出すのを待つ」

「ふところに手を突っ込む——雷真くんらしいね」

「その『手』はどこから出た！」

「喉から！ 日本の慣用表現だよ、喉から手が出る——」

雷真は受話器を置いて、強制的に会話を終了した。

通話が終わるのを待ち構えていたように、着物姿の乙女が近付いてきた。

「雷真殿。ちよっと、お話があります」

いつになく強引だ。いろりは雷真を階段下に連れ込み、ぶちまけるように言った。

「私はやはり、納得いたしかねます！」

ずっと我慢していたのだろう。ほとんど息絶さず、一息にまくし立てる。

「硝子^{硝子}だけでなく、キンバリー殿や、グリゼルダ殿も行方知れず——シャルロット殿や、ロキ殿、日輪^{日輪}さまも、今度ばかりは敵阿然^{アラン}なのですよ？ 雲雀^{雲雀}殿をあてにしているらしいやるなら、浅はかと言わざるを得ません。軍は明らかにあの石を欲しています。そもそも、日本と露国の仲は険悪で——」

「わかってるよ、全部」

いろりは切なそうに身をよじった。

「敵は手繰れです。協会の車を白昼堂々撃い、学院に兵器を持ち込めるような……。結社の息がかかっているのは間違いない、魔女と戦わずに済むとは思えません！」

いろりの必死な瞳が、雷真を責め立てる。

夜々を戦わせるのですか、無駄死にさせるのですか、と。

まばたきするほどのひと刹那に、雷真は一生ぶんの煩悶^{はんもん}をした。

「……こうは考えられないか？ ソーネチカが見てきた通りのいいやつで、見たまんまに命を狙われて、本当に困ってる」と

「それは……もしそうなら、お気の毒ではありますが……」

「ここまで関わっちまった以上、俺は助ける——と夜々は信じてる。夜々が、俺に、期待してるんだ。なら、俺は相棒の期待に応えたい」

いろりは床に視線を落とした。震える肩を通して、彼女の忍耐が伝わってくる。

「なあ、いろり。俺は夜々を死なせるつもりはないんだ」

「私とて、同じ気持ちです！」

「石で取引して、（レーテの水）ってやつを手に入れて、すべてが上手くいったとしても、夜々が次に目を覚ましたとき、俺が生きてるとは限らないだろ？」

何年かかるか、わからないのだ。夜々を完全に修復する手段が見つかったとき、幾星霜が経過しているか……。

夜々が水い眼りから醒めたとき、雷真が墓の下ということとは、十分あり得る。夜々が生きてても、死んでも、この日々は、二人が過ごす最後の時間——

「もうこれっきりなら、俺は最後まで、夜々の望む俺でいたい」

いろりの眼に涙の玉が盛り上がった。こぼれ落ちた粒は床で砕け、ダイヤモンドの輝きを散らす。声を殺して泣くいろりを、雷真はそつと抱きしめた。

「泣くな。ひよつとしたらの話だよ。俺が何とかする。今までもそうしてきたろ？」

「はいはいっ……はいっ……！」

「頼むから、夜々の前でそんな顔しないでくれよ？」

「わかっております……っ」

駄々をこねるように言う。いろりがこんな子どもっぽい言い方をするのは珍しい。落ちて着くまでこうしていてやりたかったが、そうもいかない。雷真は冗談っぽく、

「女帝陛下を待たせすぎると、戦争になっちまう。俺はもう部屋に戻るぞ」

「……人を何だと思つていますの？」

頭上から不満げな声が降ってきた。

階段の上、二階の手すりにもたれて、ソーネチカが立っていた。義衛が警護対象をほったらかしにしたので、様子を見にきたのだろう。

「侮辱ですわよ。野蛮人のごとき扱いは不本意です」

「……俺も色魔扱いされるのは不本意だからな？ そこんとこ配慮してくれよ？」

雷真はいろりを送り出すように、身を離して言った。

「外を頼むぞ。それから小紫の見回りも、急ぐよう言ってくれ」

「はい……お任せを」

いろりは髪をぬぐい、普段の彼女らしい凛とした表情に戻って、玄関に向かった。

見送って、雷真は階段を上がる。女帝が黙っているのも、こちらから言った。

「今の、訳かないのか。どこに電話してたとか、何でいろりが泣いてたとか」

「……主従関係を崩にとり、それを問うのは不作法と言うものでしょう」

その通りだが、意外でもある。逆の立場なら、そんな甘いことを言えたか？ 彼女から

見れば、雷真は敵の一味かもしれない、得体の知れない東洋人だ。

ますます彼女を信じたくなってくる。

「あんたは、立派だな」

「立派……？」

「考え方とか、生き方とか。なかなか思つた通りには生きられないもんだぜ」

こうありたいと思つても、その通りには生きられない。誇り高くありたいと思つても、正しくありたいと思つても、強くありたいと思つても。

雷真はそのことをよく知っている。嫌と言うほど、思い知らされてきた。

ソーネチカはふっと、荒んだ笑みを浮かべた。

「……載れ言を。本当のわたくしを知れば、貴方は幻滅しますわよ？」

彼女がそんな表情をするとは思わなかったので、雷真は呆氣に取られた。

ソーネチカは自嘲をしまい込み、ぼつりとこんなことを言う。

「そう言う貴方の生き方は……損ばかりですのね」

「……ご挨拶だな。好きで引いてる貧乏くじだ。損でもないさ」

「けれど、太陽はきつと、見ていますわ」

「太陽？」

「こちらでは言わないのかしら。北の大地では太陽を神聖なものと考えますのよ」

「——彼の国でも似たようなこと言うぜ。『お天道さまが見てる』ってな」

それこそ雲間から太陽がのぞくように、ソーネチカは美しい微笑を見せた。

「そう、太陽はいつも見えています。悪いことなんて、できませんのよ？」

微笑みを交わす。その瞬間、確かに何かが通じ合ったような気がした。

それから半日が過ぎ、夜会が始まる時刻になった。

雷真は三姉妹を連れ、ソーネチカとともにコロセウムへと出発する。道中、日輪とシャルを見つけた。

「お二人の様子、ちょっと変です……ね？」

夜々がひそひそとささやく。雷真もまた、同じことを感じていた。

昨日まで夫婦のように寄り添っていたのに、日輪とシャルは距離を取り、会話もない。日輪の顔色が明らかに悪かったので、雷真は彼女の肩に手を伸ばした。

「日輪、どうし——」

「触らないでくださいまし！」

声とともに機嫌が飛び、雷真の手を阻む。

そのまま、日輪は小走りに去った。雷真はめげずに、シャルにも声をかける。

「シャル、アンの様子はどうか？ 意識、戻ったんだろ？」

シャルは何か言いかけたが、ぐつとこらえて、小さく笑った。

「……大丈夫よ。ありがと」

早足で歩き出す。——昨日と違う。たとえ敵対を表明していても、昨日までは親しみがにじんでいたのに、今はもう完全に雷真を拒絶している。

夜々がとてと寄つてきて、疑わしげに言った。

「雷真……傷ついてます。目輪さんとシャルロットさんに嫌われて」

「……まあな」

「やっぱり！ やっぱり未練があるんですね……っ」

「仲良くしてたのに、いきなりあの態度だぞ。傷つかない方がおかしいだろ」

その理屈は、夜々にもわかるらしい。夜々は元気を失くし、つぶやいた。

「これってやっぱり、結社の仕業……？」

「だろうな。いよいよ、バカ王の言葉が現実味を帯びてきた」

夜会は善魔たちの草競馬。参加者はもう、善魔が選んだ賭け馬だ。

脅迫を受けている可能性が高い。追いかけて聞いただすべきか、遑う。

だが、試いたところで正直に話してくれるとは思えないし、こちらにはこちらの厄介事

が山積している。全員助ける、なんてうそぶいたところで、雷真の手は二本しかない。

できることは限られている。ひとつひとつ片付けなければ。

（まずいな……。今夜、本気でかかってこられたら、どうすりゃいいんだ？）

この時点で、雷真の夜会には三つの選択肢があった。

全力で彼女たちを蹴散らす——却下。もし善魔の脅迫を受けていた場合、シャルや目輪

がどんな目に遭わされるかわからない。

夜会にわざと遅刻して、交戦を避ける——却下。暴れん坊のソーネチカ姫は、一人でも

戦うと言うだろう。(同盟)を裏切ることになる。

——やはり、最後の選択肢しかない。

雷真の決面を見て、夜々はぐつと、胸の前でこぶしを握った。

「そんな顔しないでください。相手が誰でも、私たち雪月花は負けません！」

「いや。今夜はいろりと行く。おまえは小紫の護衛を頼む」

「えっ……そんなー」

雷真は夜々の肩を抱き、ソーネチカに聞こえないよう、ささやき声で言った。

「今日の夜会は引き伸ばすことにした。いろりの派手な大技なら、サボりに見えないだろ。

小紫の(調査)は危険をとまなう。おまえが側にいて、護ってくれ」

「……わかりました。そういうことなら、夜々は雷真のお役に立ちます」

「ああ、頼む。危ないことはすんなよ」

笑って手を放す。小紫が夜々からみつき、余計なことを言った。

「それじゃ姉さま、雷真のによー、ほー、役はいろり姉さまに任せて、私と行こー」

「はうっ!? 女房役……うう……やっぱり夜々が……でも……っ」

小紫が夜々を引きずって行く。遠ざかる二人を、いろりは心配そうに見つめていた。

「わたくしたちも参りましょう。開幕の時刻ですわよ」

ソーネチカにうながされ、雷真は足を引きずるようにして、参り出した。

舞台に上がるとまず、雷真は客席を見回し、その姿を探した。

観客は昨日よりも増え、スタンドに熱気が満ちている。探していたエドマンドは、中央の来賓席で、学院長と談笑していた。

二人の悪党は堂々としたものだ。現在あの二人は協力関係にあるが、お互いを邪魔にも思っているはずで、刺客が配されている可能性もあるというのに。

フレイとロキの姉弟が現れ、全員がそろろう。そして、夜会が始まった。

結論から言えば、この夜の戦いは、まったく盛り上がりはなかった。

シヤルと日輪は猛攻を仕掛けてきたが、見た目の派手さとは裏腹に、精彩を欠いている。精度が甘く、攻撃も単調。明らかに遙いが見て取れた。

それを見ると、ロキはフレイを後方に下げ、自らも露骨な安全策を取った。

ソーネチカが道の上でもおかしくない手ぬるさだったが、実際はその逆で、ソーネチカは攻めを怠がず、むしろ警戒を強め、大蛇をもっぱら防衛に専念させた。

かくして、さほど見所のない、大味な試合になった。客にも熱気の低下は伝わったよう
で、二〇分も経つ頃には、ぼつぼつと会場を去る者が始まった。

これまでも、決着がつかないことは多々あった。だが、今夜は少し様子が違う。

（この会場のどこかで、薔薇の誰かが俺たちを覗いている……？）

そう考えると、とす里い痺気が舞台を覆っているような気さえした。

観客の顔ぶれが気になる。だが、それらしい者は見つからなかった。

寮に戻り、最初に命じられたのは風呂掃除だった。

「自分のことは自分でやるんじゃないかなかったのかよ……」

愚痴りながらバスタブを洗っていると、黒服の一人が顔を見せた。

「うっかりしていた。普段は我らがやっていることだ。代わろう」

ロシアなまりの英語で言われる。最年長、熊のようにがっしりとした士官だ。

「いや、気にしないでくれ。風呂掃除くらい、どうってことない」

「そうか。——少し話さないか、日本人？」

雷真の顔をのぞき込むように、バスタブの前にしゃがみ込む。

「自分はロマーシニコフ大尉だ。政府より（留学生）直衛の特務を与えられている」

「俺は赤羽雷真だ。つっても、知ってるよな？」

「そうだな。貴殿の素性を調べたのは自分だ」

「気まずい。空気をほぐそうと、雷真は世間話のつもりで話題を振った。

「露国は革命騒ぎで大変なんだってな？」

「そうだ。極東での戦争が激化した途端、過激派のクソどもに隙を突かれた。停戦がもう

少し早ければ……とは思う。自分の兄も海戦で命を落とした」

——地雷だった。雷真は自分の浅はかさを嘆った。

「すまない」

「なぜ謝る？」

鋭い視線を寄越す。敗者への侮辱と思われただろうか？

あれは戦争だった。ロシアの南下政策と日本の大陸進出策は帝国主義の衝突だ。日本がロシアを押しつけたこと、それだけの近代化を遂げていたことは、雷真が説くことではない。そんな義理はなく、そんな資格もない。

では、なぜ謝ったのか。わからないなりに、誠実な気持ちで答える。

「いや。つらい話をさせちまったなと思つてさ」

ロマーシニコフは沈黙した。雷真の膝に視線を落とし、何か考え込む。

怒りを買っただろうか。逆に吹っ切れて、雷真はさらに言つた。

「女帝さんは何者だ？ 昨日、あんた言つてたよな、（『身分』）がどうとか」

「……それは、ご本人から聞くべきことだ」

その通りだ。だが、そうやって秘密にされたことで、かえって疑惑が再浮上する。

（おいおい、まさか本当に——ってんじやねえよな……う）

雷真は一計を案じ、別の角度から質問した。

「ともかく、やんごとなきお方なんだな。でもって、英国に逃げてきた——わからないのはそこだよ。何で夜会で罵れてる？ 目立つだろ？」

「……自分は今でも陛下のご判断は正しかったと考えている。だが、（血の日曜日）以降、帝室——貴族政治は完全に憎悪の対象となった」

ロマーシニコフの彫りの深い顔に、濃い影が落ちた。

「夜会を制し、魔王となれば、（ロシア人留学生）の名は天下に轟くだろう。そのとき、ソーネチカさまが高貴なご身分を明かされれば——」

時代は帝国主義が跋扈する（戦争の世紀）。魔王は本人が強大な戦力であるという証明であり、かつ禁忌研究が許されるという国際的なお墨付きだ。

ロシアの民衆にとって、自国の留学生が魔王というのは、誇らしいばかりでなく、実利の匂いを感じさせるニュースだろう。しかもそれが——

「人氣はうなぎ昇り……だよな」

「ご本人もそうお考えだ。国威発揚、民心安定。すかさず懸撫して、国体を建て直す」
雷真は衝撃を受けた。

あの細い肩に、どれだけの重圧を背負っているのか。ソーネチカが夜会に賭けているのは、雷真やシャルのような個人の問題ではない。国家の命運を賭けて臨んでいる。

ロマーシニコフは再び目をそらし、床をにらみながら言った。

「正直に言おう。自分は貴殿が気に食わない」

「……そりゃまあ、気に入る理由がないよな」

「貴殿は東洋人で、無礼な小僧で、夜会における障害であるのに、ソーネチカさまの信頼

を得ている。何より、自分よりはるかに強者だ」

「……………」

「だから、頼む。貴殿のその力で、我らの主を護ってください」

軍人らしい実直な言葉が、雷真の胸にずしりと響いた。

「……ああ。できる限りのことをする」

「十分だ。ありがとう」

雷真の肩を叩く。大きな手はあたたかく、幼児期に触れた父親の手を思い出させた。

そのまま出て行こうとする。熊のような後ろ姿に、雷真は言った。

「あのよ。あの姫さんが安眠できるのは、あんたたちのおかげだと思うぜ」

「……………」

「俺もそうだ。一人で終すの番とか無理だから、あんたたちがいてくれて助かる」

ロマーシニコフはその場で回れ右すると、左右の踵をぶつけ、横九〇度に肘を張って、

固い敬礼をした。スーツの黒服が、その一瞬だけ軍服に見えた。

信頼が生まれたような気がして、雷真の胸が震えた、そのとき――

活動写真のフィルムを差し替えたように、ロマーシニコフの表情が変わった。

実直な軍人の顔ではなく、憎悪に満ちた鬼の形相に。

「くたばれ！ 日本人！」

怒号とともに銃を抜く。引き金が引かれる前に、雷真は自ら距離を詰めた。

彼の腕に取りつき、(腕ひしぎ十字固め)に極め、もろともに倒れる。

衝撃で骨を折ることもできたが、直前の会話が脳裏をよぎり、手加減してしまう。相手は自由な方の手でナイフを抜き、雷真の腕を切断しようとした。とつさに紅翼陣を使い、魔力で神経系に干渉して、身動きを封じる。

格闘の物音を聞きつけ、ほかの黒服たちがなだれ込んできた。

「大尉！ 何事です!?」

「くるな！ 殺すぞ！」

狂気すら宿る眼で、ロマーシニコフが威嚇する。ロシア語で何かを言い合い――直後、黒服の一人が発砲した。弾丸は雷真ではなく、ロマーシニコフの肩間を貫く。

雷真は愕然し、そして激怒した。

「なぜ撃った!? あんたたちの仲間だろ！」

「もちろん貴殿を護るためです。それに、これは大尉じゃありません」

「何だって……? 何で言い切れる?」

「我らの合言葉を知りませんでした。答えられぬ場合は敵性魔術師の変装を疑えと、ほかならぬ大尉の指示であります」

雷真は遺体を見下ろした。ロマーシニコフはロマーシニコフのまま、彼そのものにしか見えない。そもそも、紅翼陣を浴びている。魔術の変装なら、解けたはず。

変装(?)が解ける気配はなかったが、その代わり、驚愕すべき現象が起きた。

肩圖にうがたれていた弾痕が、フィルムを差し替えたように、消えてしまう。絶句する一同の前で、ロマーシニコフはまばたきをした。

「……何だ、これは？ セルゲイ、どうなっている？」

はっとするより先に、雷真は戦慄した。

真つ先に幻覚魔術を疑う。次いで、自分は夢でも見ているのかと思った。

皆が狐につままれたような顔をする。しかし、ただ一人、そうではない者がいた。

「彼を拘束なさい！」

ソーネチカの鋭い声が、寝室の方から響く。

「何をしているのです！ 大尉を、早く！」

黒服も、当のロマーシニコフも、困惑している。ただし、指示には素直に従った。

「殿下、これは一体……？」

「……これから訊き出しますわ。オストロフスキ、大尉の尋問を念入りに。手のすいた者はヨルムンガンドを解析なさい」

黒服二人がロマーシニコフを左右から挟み、運び出す。ソーネチカはひどく青ざめていて、震えているようにも見えた。

「おい……どういふこった？」

「さあ。調べが終わるまで、わかりませんわ」
嘘をつけ、という言葉が喉まで出かかった。

ソーネチカは今の現象を知っている。少なくとも、心当たりがある。そうでなければ、この豪胆な姫が青ざめるとも思えない。

だが、ソーネチカはそれきり口を開かず、ふさぎ込んでしまった。

何を言っても返事をしない。別室で尋問している黒服に代わり、雷真が慣れない給仕を務めようとしても、夕食を拒み、寢室から出てこようとしなかった。

4

深夜。雷真はソーネチカを気にしながら、小紫の掃箒（こむらさき）を待っていた。

調査は進んでいるのだろうか。雷真の見立てでは、あちらもそろそろ、手がかりを齎越（よこ）してくれると思うのだが。

待ちくたびれて、うとうとする。ソファで舟をこいでいると、ふわっと、ソーネチカの髪が鼻先をくすぐった。ソーネチカは薄い寝巻き一枚で、雷真の膝にのっていた。

「……何やってんだ。膝から降りろ」

「なぜですか？」

「なぜってそりゃ……重いからだー」

「飽辱（はくじく）ですわー 重いかどうか試して御覧なさいー」

きわどい部分にぐいぐい尻を押しつけられ、雷真は悲鳴をあげそうになった。

「どうしたんだこいつー ロマーシニコフの一件で、気でも触れたのか……!?」

雷真の胸を背もたれにして、ソーネチカは自分の居場所を確保した。

「……おい。そこは俺の膝だぞ。領有権を主張する」

「却下です。今はわたくしの騎士ですもの」

「何ダダこねてんだよ……!」

この危険な武闘派が、どうしてこうなってしまった?

しかし、不思議と既視感も覚える。何に似ているのかを考えて、気付いた。

「撫子——」

そう、妹が甘えてきたときと、そっくりだ。たとえば昼寝で怖い夢を見たとき。あるいは

嵐の夜。雷さまが怖いと言って、膝からどうとしなかった。

微笑ましい、とは言えない。幼い妹とは違い、そこそこ育ってしまった女体だ。

「あのな……何度も言うが、俺は健康な男子なんだが……」

「不能の男?」

「不能じゃねえつつただろ!」

「では——わたくしに、情欲を感じますか?」

ちらり、と雷真を見上げ、煽情的な流し目をくれる。

唇に行ってしまう。あわててそらした視線の先には、角度的に極めて危険な、「上から見下ろす」衣服の隙間があった。雷真は理性を総動員して、欲望に抗う。

「……ちよつとは感じる。だから離れてくれ」

ソーネチカは従わない。それどころか、胸元を指で引き、隙間を広げた。

「望みとあれば、抱かせて差し上げますわよ?」

「はあ? 何を、馬鹿な、ことを……!」

「学院で過ごしたこの日々……わたくしも思い出が欲しいですわ」

首筋にやわらかな髪が当たり、脳髓が痺れるような気がした。

欲望の機関車が激しく蒸気を噴く。あるいはそのくらい、ソーネチカが魅力的な少女と
いうことかもしれない。短い時間だったが、ともに過ごし、彼女の魅力を知った。

それゆえに——このソーネチカには、よろめかなかった。

雷真は深呼吸して、ぱいっと彼女を放り出した。

ソーネチカは魔力を暴れさせ、ちよつと傷ついたような顔で、雷真をにらんだ。

「淑女に対して何たる狼藉……わたくしの不興を買うなどあればど——!」

「何を弱ってんだ、らしくもねえ!」

叩きつけるように怒鳴る。氣迫負けして、ソーネチカが鼻白んだ。

「俺の知ってる女帝さんはな、殴り合いが大好きで、そのための努力を惜しまなくて、脳みそまで筋肉でできてんじゃねーかっていう武闘派だ! ソーネチカ・スニートキナつてのは、もっとこう……^詰みてる女なんだよ!」

「けなしてますの!? 貴方^{あなた}の人物評は要領を得ませんわ!」

「だからー 普段はもつと『いい女』だつて言つてんだよー」

ソーネチカが目を見張る。雷真はちよつと赤面しながら、続きを言った。

「太陽が見てるんだろ。あんたのその、情けないところをよ」

すつとソーネチカから怒気が消えた。

何事もなかったかのように、となりに座る。そして、横目で雷真を見た。

「……性的挑発とは難しいものですのね。アリスのように上手くいきません」

「勘違いしてるようだが、あいつも上手くはいつてなかったからな？」

「わたくし、女としての魅力で負けてます？」

本来は自信満々の女帝が、自信を失くしたようなことを言う。雷真は思わず噴き出してしまい、またしてもソーネチカの不興を買った。

「また侮辱を……！ いい加減、その粗末な蛇を引っこ抜きますわよ……!?」

「やめてくれ。実はこないだ、小娘じゃ絶対勝てない、とんでもなく色気のある女の人に誘惑されてさ。そっちを突っぱねておいて、あんたになびくわけにはいかない」

「他人と比べられての敗北とは、ますます屈辱ですわ」

「その話はもういいだろ。さあ、全部ぶちまけろ」

雷真はソーネチカの正面に回り込み、ひざまずくようにして訊いた。

「もう言っちゃまえ。あんたの敵は誰だ？ ロマーシニコフに何があった？」

「大尉のことは気にせず、今夜はもうお休みなさい」

雷真は面喰らった。さすがに、これは予想外の答えだった。

「先ほど大尉を抑えるのに、血を使ってしまったのでしよう？　早く休んで、少しでも力を取り戻しておきなさい。明日の夜会に差し支えます」

「おいおい……ここまできて、だんまりで通すつもりかよ!?」

ソーネチカはそっぽを向いた。今になって気がついたのだが、先刻までのふきどんだ沈黙とは違う。ソーネチカの中で、とつくに変化があったようだ。

「すべて、わたくしが決着をつけます。貴方あなたにも、夜会にも、迷惑はかけません」

穏やかな笑み。死を覚悟したように見え——ようやく雷真は理解した。

だからだ。だから、こんな誘惑まがいの馬鹿をやった。

「貴方の不作法に、心よりお礼を言いますわ。己を取り戻すことができました」
情熱の炎が戻った瞳で、まっすぐに雷真を射貫く。

美しい。こっちの彼女に誘惑されていたら、やばかったかもな……と思う。

「……それで俺おれが納得するとは思ってねえよな？　俺はあんたを助けると決めたぞ」

「物好きもいたものですね。なぜ、わたくしのために、そこまで」

「約束だからだ。主従契約を結んだろうが」

「あくまで約束は果たすと？」

「ああ、果たす。あんたにも果たしてもらいたいからな」

ソーネチカは目を伏せ、沈黙した。ややあつて、からかうようにつぶやいた。

「約束がなかったとしても、貴方はしゃしゃり出てきた気がしますわね？」

「……あんたが襲われてるのを見たとき、俺は一度見捨てようとした。そしたら、相棒に叱られたんだ、俺らしくねえってな。だから、最初は相棒のためだった。さっきまでは、単に石が欲しかった。だが今は、俺もあんたを見殺しにしたくない」

ソーネチカに視線を戻し、決意を秘めた声で言う。

「あんたには、バカな下ネタで大笑いしてて欲しいと思ってる。この先もずっと」
くしゃ、とソーネチカの表情が崩れた。

背を向け、表情を隠す。そのまま、ソーネチカは数十秒、何かを唸みしめていた。
目を指で撫で、緊張をはらんだ顔で振り向く。

「(血の目曜日) 事件の真相を、一存知？」

硬い声で問う。雷真は戸惑いながら、正直に答えた。

「要点だけだ。十数万人相手に軍が発砲したって」

「あれは、暴動などではありません。わたくしの罪です」

「……あんたの、罪？」

「彼らは対話の糸口を探していただけでした。わたくしは……己がその受け皿になれると
騙ったのです。彼らに理解を示した——その傲慢が、五一八七人の命を奪った」

ソーネチカは顔面蒼白だったが、覚悟は揺るがず、よどみなく告白した。

高まる労働者の不満に対し、政府主導の労働組合を作って、ゆるやかに利害調整しよう

という動きがあった。帝国の姫は民衆に親しみ、積極的に関わったという。

だが、もとより政府主導の「ガス抜き」であり、待遇改善は遅々として進まない。進歩的な皇女に好意を抱いていた人々は、皇帝にも一種の幻想を抱いており、皇帝に直接請願書を提出するという強硬策に訴えた。

停止命令に従わない一四万人の民衆に対し、皇帝は鉄弾でもって応えた。

「死者の中には労働者の妻子もいました。わたくしの眼前で、顔に穴をうがたれ、親子が折り重なり、雪の中に倒れたのです。子どもも……母親も……わたくしのこの身は、彼らの血を浴びました。湯気が立つ、温かい血液を——」

「よせ。あんたが殺したわけじゃない」

「同じことです。人間が死ぬという意味を、貴方はご存知ないんですの？」

「私のせいですってな顔をやめろ。背負い込む立場にねえと言ってるんだ！」

ソーネチカのせいではない。そもそも一四万人なんて規模のデモが起こっている時点で、帝政は行き詰まっている。だが、ソーネチカが責任を感じる気持ちもある。皇女とやらが労働者たちに冷淡な態度を見せていれば、事件は起きなかったかもしれない。

民衆に理解など示さず、むしろ踏みつけにしていれば——

（できるわけねえだろ、こいつに……！）

何と声をかけていいのか、わからない。だが、雷真の下手な喧めは必要なかった。

「貴方が何と言おうと、これはわたくしの罪。わたくしの罪は、わたくしが踏（ふ）まなければ

なりません。五千人を殺したのなら、一万人の人間を救う。それが」

決然とした顔で、ソーネチカは己の身分を明かした。

「皇帝アレクセイの娘として生を享け、いずれ女帝となる、わたくしの責務です」

——どれだけの葛藤を乗り越えて、その境地に達したのだろうか？

大衆の非難を浴び、憎悪を向けられるとわかっていて、帝位に就こうとしている。

魔王の座を手にし、実力を世界に見せつけ、露国の民衆に頼いようと。

「あんた……やっぱ、皇女さまだったんだな……」

本来であれば、雷真が気安く口をきくことも許されない相手だ。

「この秘密を明かしたのです。わたくしの誠意は伝わりましたかね？」

もういいだろう、これで納得しろ、とでも言いたげな顔をする。雷真はあきれた。

「そんなに他人と組むのが嫌いなのか」

「寄りかかるのが嫌いなだけです」

「男に寄りかかるうとしたくせによ」

「……その秘密を知っているのは貴方だけですわね？」

「口封じするなよ？　なら、支え合うのはアリなのか？　対等の同盟なら？」

「……どういう意味ですか？」

こつん、と窓に小石が当たる。雷真はにやりとして、窓枠に近付いた。窓を開ける。向かいの枝から小鳥が飛んできて、弾けるような笑顔を見せた。

「硝子の居場所がわかったよ！ 結社の魔術師がいっぱいだつて！」
呆けた顔のソーネチカに、雷真は悪戯小僧のような笑みを向ける。

「さんざん挑発されて、こっちはその気になってんだ。最後までやらせろ」
ソーネチカはしばし、見定めるように雷真を眺めた。

彼女が身分を、そして黒幕を明かさずとも、この男は勝手に進めていた。
やがて、噴き出す。お腹を抱えて、楽しげに。

「まったく……おかしな男ですわ！ わたくしが『猪』なら、貴方は――」
「牛か？ 虎かな？」

「中国の故事に言う、馬と、鹿ですー」

そして、作戦会議が始まった。

おなじみの光景だが、メンツが違う。雷真と雪月花、イオネウとエヴァ、ソーネチカと黒服たち。全員がソーネチカの部屋に集まって、まずは状況を整理する。

「じゃあ小紫、調べの結果を教えてください」

「おっけー」

小紫はもらったココアをふうふう吹きながら、語り出した。

「シャルロットさんと日輪さん、やつぱり連携してないね。夜会が終わってから、会話ゼロだったよ。それから、日輪さんのところに誰かきてるみたい」

「誰かって誰だ？ 顔を見たのか？」

「ううん、気配だけ。中も探りたかったけど、式神がいたから」

「そりや危ないな。こつちを片付けてからやろう。学院長の方はどうだ？」

「そつちはもつと近付けなかった。王さまの家来が魔術で見張ってるの」

「警備は厳重——か。寒い中、ありがとよ。少し休んでくれ」

雷真（ライマ）はイオネラに向き直った。イオネラは先ほどから鳩を膝に抱き、恍惚とした表情で、いとおしそうに羽を撫でてゐる。

「イオ、協会の方はどうだ？」

「えへへ、小紫ちゃんから聞いたと思うけど、花柳斎先生とエイミーちゃんの拘禁場所はつかんだよ。灰十字は今、突入作戦のリハーサル中」

「場所はどうやって突き止めた？ ひょっとして、その鳩——」

「そう！ 花柳斎ブランドの自動人形！ あああ今すぐ解体したい♡」

人語は解さないとはいえずだが、鳩がびくつ、とした。これは硝子が使い魔のように使う動物人形であり、精霊を構造材に使っているので、雪月花の姉妹機とも言える。

それがここにあるということは、硝子自ら情報をもたらしたということ——

「先生から直筆のお手紙もらっちゃったの！ すこいでしょ！」

「ああ、すごいな。何て書いてあった？」

「すべて協会に任せて、坊やは夜会に専念なさい」

「俺宛てじゃねーか！ いいけどーでも、そうか、硝子さんは無事なんだな？」

「……それはまだ、わからないよ」

冷水を浴びせるように、イオネラは低い声で否定した。

「もちろん、手紙を書いた時点では生きていたと思うけど。そこは勘違いしないで」

「……ああ。ともかく、協会は突入して、救出してくれるんだな？」

「決行は明日の夜会合わせ。雷真くんはどうするの？」

「もちろん突入作戦に参加する。そして、首謀者をぶっちめる」

ソーネチカが驚いた様子で口を扶んだ。

「お待ちなさい。協会の敵は、そこらの犯罪者ではありませんわよ」

「もちろん知ってる。だが、そいつらがあんだの敵でもある——だろ？」

「……雷国の支配を狙っているのは、おそらく舊敵の魔女です。共産主義の理想を掲げて労働者階級をそそのかし、実態は絶対王制の国家を築くつもりですわ」

やはり結社の仕事か。特段、驚きもしない。雷真は軽い調子で、

「今さらだな。その程度は想定して動いてる」

迷いのない言葉に、黒服たちが息をのむ。そのうちの一人は、後ろ手に縛られたままのロマーシニコフだ。彼らはそれぞれに顔を引き締め、うなずき合った。

彼らの信頼に満ちた視線が気恥ずかしい。雷真は軽口のように言い添えた。

「ま、損得勘定だよ。あんたのあの石、学院長に取ってこいと言われてる」

「雷真!? それはさすがに——」

「いいんだ。女帝さんには正直に言っておきたい」

あわてる夜々を制し、彼女の寿命には触れないまま、雷真は事情を説明した。

ラザフォードの研究に虚無石が必要なこと。それを奪ったのが雷真であること。奪還の宿命を受けたこと。達成しなければ、何をされるかわからないことを。

「なるほど……それでわかりました。貴方はこれを、わたくしがカリューサイから奪ったのではないかと考えたのですね?」

「ああ……まあ、そうなるか……」

「その心配はありません。これはまったく別のルーツを持つ石」

三姉妹と雷真に衝撃が走った。思わず腰を浮かせてしまう。

「なら、それはまったく別の別物——!?」

「いいえ、確かに虚無石ですわ。伝承の通りなら、この世に二つあるのです。——新教が興る前、あるいはバビロン捕囚より昔に、教会は既に分裂していました」

雷真の頭に無数の疑問符が浮かぶ。女帝は何を言い出した?

「一世紀にローマ教会が離脱したことで、旧教は二つの流れを汲むことになります」

「……聞いたことあるな。東方正教会ってやつか」

「そうです。今より七百年の昔、悪名高き第四回十字軍がビザンツの帝都を攻撃したとき、分裂は決定的となりました。そのとき西方が奪った秘宝こそ、この虚無石」

胸に手を当てる。肌は魔法円が浮かび上がり、内側から魔石が飛び出した。

「———と思い込んで持ち去った、複製です」

てのひらにのせ、高く掲げる。神秘的なきらめきが、室内を鮮やかに照らした。

あまりに途方のない話を聞かされ、雷真はしばらく口がきけなかった。

イオネラが眼をまん丸にする。鳩が腕から脱出し、となりの部屋に逃げて行った。

「……その話が事実なら、それはとんでもない……人類の至宝だろ？」

「と代々の総主教は伝えているのですが、実際のところはどちらが複製かわかりません。

それでも、教皇や教会の権威を集める石です———どうぞ」

無造作に雷真の手に落とす。背中から、どっと冷や汗が出た。

蒼く輝く、美しい寶石。手にした途端、魔力を吸い込むような、独特の手触りを感じた。

その感触は、地下大空洞で触れたものと同じだ。

「教会は〈原罪石〉、史学者は〈G1晶体〉、工学者は〈要石〉、理学者は〈虚無の石〉と

呼びます。搜しているのは、本当にそれですか？」

「……ああ。つか、これを渡されりゃ、学院長も文句言えねえよ。歴史的価値はわかった

が、結局のところ、これは何なんだ？」

「世界でもっとも普及し、機巧魔術体系の根幹を成す、ある重要な魔術回路の基部」

「普及した魔術回路って、あれだろ……イブの」

「そう。(生命)の魔術回路」と(イブの心臓)です」

思わず、魔石を凝視してしまふ。

「(イブの心臓) ってのは、仕組みがわからねえ……んだろ？ 複製用のマスターが工房にあるだけで、ゼロから作るのは不可能だって……」

「そうです。では、最初のひとつは、何から造ったと思います？」

「こいつから……？ ジャあ、これは誰が造ったんだ？」

「生命の奇跡を可能にする石ですよ？ 無論、救世主ですわ」

「——？」

「なんて、ただの伝説ですけど。ルネサンスの少し前、イタリヤの不信心者が持ち出して仕組みを『再発見』し、能力の一部を抽出して、(イブの心臓)としたのです」

ソーネチカはそつと微笑み、過去を懐かしむように石を見た。

「それは母から受け継いだものです。常に身に帯び、決して人に見せてはならぬと。母は姑——祖母から、祖母は曾祖母から、帝室に懸々と受け継がれてきたのでしょうか。帝國は今や、東方正教会最大の庇護者ですからね」

「……そんな大事なものを、くれちまっつていいのかよ？」

「まだ差し上げません。貴方が高貴を打ち倒し、生きて戻ったとき」

麗しく微笑み、手を差し出す。雷真も微笑み、その手に石を返した。

「あんた、女子たちと決着をつけるって言ったよな？」

「ええ、言いました」

「なら、存分にあいづらを蹴散らしてくれ」

この発言には、ソーネチカだけでなく、雪月花の姉妹たちも唖然とした。

シヤル、フレイ、目輪を、ソーネチカに倒せと言っている。

「俺が親玉とやつてるとき、標的以外の舊敵に、チャチャを入れられたくないんだ。手駒がやられそうになりゃ、他人のことなんか気にしてられない」

つまり、陽動だ。夜会の方に、結社の注目を惹きつけておく作戦。

「だから、あいづらと本気で戦え。ただし、フレイの犬ころと、シグムントは殺さないで欲しい。それだけは頼む。あんたが大暴れしているうちに、俺が親玉をやる」

「お待ちなさい。わたくし一人で全員を倒すなど、無理ですわ。特に剣帝は」

「大丈夫だ。俺がいないとわかりゃ、ロキは引き下がる」

「……彼は確かに紳士ですけど、そんなことが、なぜ」

「わかるんだよ。だから、俺を信じて、夜会で粘れ。そしてできれば、勝ってくれ」

「……倒してしまってもいいんですの？ 貴方のお仲間でしょう？」

「あんたがやらなくても俺が倒した。あいづらの人生、とっくに背負い込んでる」

「お待ちください雷真殿。脱走した方には、舊敵の報復が待っているのでは？」

見かねた様子でいろりが口を出す。しかし雷真はあわてず、軽く答えた。

「そつちも大丈夫だ……と思う。連中、利用価値があるあいだは手駒を捨てない。最後の最後に、武力で神性機巧を分捕れる可能性がある以上——」

夜会の最終戦が終わるまで、生かしておくはず。それが雷真の読みだ。

「そしてもう一つ。舊蔵なみに危険な親父に、ケツを拭かせる手がある」
にやりとして、ソーネチカの手の中、人類の至宝を示す。

この魔石の価値を知った今、学院長の密命は「報酬が安すぎる」のだ。せめて仲間たちを護らせるくらいはしないと、割に合わない。

「せいぜい追加報酬をもらうとするさ。だから何も心配せず、女帝さんは夜会で悪目立ちしてくれりゃいい。帝室の人氣を急上昇させるような、大活躍をな」

ソーネチカは感じ入ったように雷真を見つめ、やがて極上の笑みを浮かべた。

「わたくしは、夜会を」

「ああ。俺は親玉を」

すつと白い手を差し出し、雷真と固い握手を交わす。

「日露の同盟、ここに締結ですわね」

「学生レベルだけだな」

「未来は常に、若者が作りますのよ」

笑い合う。互いの瞳に映る自分は、既にもう、迷いのない眼をしていた。



Chapter 6 夜会、彼女たちの終わり



1

ソーネチカが舞台上に上がると、（手袋持ち）が一斉にこちらを叫び出した。
ロキとフレイ、シャルと日輪。そして、それぞれの自動人形たち。

ソーネチカは自分のゴーレムに魔力を送り、大蛇の姿に結合させる。シャルは怪訝そうにゲートを見ていたが、痺れを切らしたように訊いてきた。

「あのバカはどうしたの？ 遅刻？」

「彼はきません」

「え、逃亡？ 待機義務はどうするのよ！」

「他人の心配をしている場合ではありませんわ。今宵、貴女たちは敗北しますのよ」
はつきり発表する。ざわついていた客席が静まり返った。

シャルが不審そうに眉をひそめた。

「……この前と言っていることが違うじゃない。貴女ひとりでやろうって言うの？」

「貴女たちが手を結び、わたくしを総力でつぶすと言うなら、それはたやすいことですわ。」

ですが、貴女たちの誇りはそれで守られますの？」

客席にも聞こえるよう、声を張り上げる。

「夜会は学院二百年の伝統を支える催しです。智謀は魔術師に必須の素養ですが、多勢に無勢はいささか卑しい——魔王に相応しい行為ではない。違ひまして？」

観客席を見回す。ギャラリ―は皆、ソーネチカの言説に耳を傾けていた。

手ごたえを感じ、ソーネチカはさらに煽った。

「我こそ魔王に相応しい——そう自薦する以上、おのが才覚のみを頼みとし、実力で玉座を奪い取るべきです。ご観覧の方々も、それを望んでいるのでは？」

おお、と客席がどよめく。ボルテージが上がり、さざ波のように広がっていく。

昨日の戦いが伏線だ。気の抜けた時間つぶしに、観客はすっかり飽きている。

ここが作戦の成否をわける。ソーネチカは大観衆を味方につけ、言い放った。

「わたくしと、一対一で勝負なさい！」

盛大な拍手が巻き起こった。客は明らかに、ソーネチカに同調している。

「さあ——まずはどなたがわたくしと闘ってくださるの？」

「う……私が、やる！」

意外な人物が、意外なほどよく語る声で、主張した。

フレイだ。その決意表明に迷いはなく、取り巻くガラム犬も気合十分に見える。

「最初は私。私が一番、順位が下だから」

「——確かに貴女の順位が一番下ですわね。けれど、貴女は誰よりも多くこの舞台に立ち、そして生き残ってきました。剣帝や（下から二番目）よりも、です。その戦果と、何より貴女の勇敢な魂に、わたくし賛辞を惜しみません」

ソーネチカの言葉を肯定するように、客席からも声援が飛んだ。フレイの頬が染まる。

「女同士の誇りを懸けた一騎討ち、よもや無粋な邪魔は入りませんわね？」

ロキはふんと鼻であしらった。

「そんな小細工は無用だ。挑発せずとも、一対一でやらせてやる」

あつさり後退する。この展開には、むしろソーネチカの方が驚いた。日輪も、シヤルも、姉のフレイでさえ、意外そうにロキを見ている。

（ライシンの言った通りですわ……！）

ソーネチカを倒す好機でもあるのに。つい二日前は、是が非でも姉を護るという態度でいたのに。彼の背後にいる悪魔は、これを許すのだろうか？

（男同士、女にはわからぬ何かがあると……？ あるいは、ライシンが何か始めたと勘付いたのかもしれませんがね）

いずれにせよ、邪魔が入らぬのは好都合。

（わたくしも、己の務めを果たします！）

内蔵機関のごとく魔力を燃やし、ソーネチカはフレイを見据える。

フレイはきゅっと口元をすぼめ、ソーネチカを見返した。そうして、夜会二百年の伝統にのっとり、一對一のつぶし合いが始まった。

2

本当は、膝が震えるくらい、怖かった。

だが、フレイは逃げない。弟の背中に隠れていた、幼き日の彼女はもういない。その弟は、後ろでこちらを見守ってくれている。

シャルが心配しているのがわかる。先ほどから、声をかけたそうにしている。

だが、今はお互いの悩みを打ち明けることができない。なぜなら――

肌^{かわ}に薔薇^{ばら}の茨^{いばら}が食い込む。そんなビジョンが浮かび、消えた。

「戦いに集中しろ。大どもを死なせたくないだろう？」

ロキが戦しい声で言う。後ろにいるのに、ロキはフレイの視線すら把握している。

深呼吸をひとつ。息を吸って吐くまでのあいだに、過去の記憶が蘇^{よみがえ}った。

両親の死に責任を感じ、弟の顔をまともに見られなかった日々。Dワークスに引き取られ、おぞましい手術を受けてからは、笑うこともできなくなっていた。心を支えてくれたのは、今は亡きラビと、ガラム大たちだ。

だが、雷^{かみなり}のくれた光が、フレイとロキを照らしてくれた。

それから、すべてが変わった。プリューの姉妹が友達になってくれた。信じてくれる仲間ができた。私は一人ぼっちじゃない。だから、怯える必要はない。

不器用ながらも磨き上げ、高めてきた、そのすべてを――

私の全部を、見せる！

「散開！」

号令と同時に、ガルムの群れが放射状に駆け出し、舞台を取り囲んだ。

ソーネチカの視線が走る。位置を確認したのだろう。フレイは対応の際を与えず、

「砲撃！」

がおんっ、と綺麗に吠え声がそろう。それは魔術で変質し、音の砲弾となった。

舞台の表面をえぐりながら、衝撃が大蛇に迫る。大蛇はその場でとぐろを巻き、身を盾

にしてソーネチカを守った。砲弾が命中――いや、それる！

装甲が細かく震え、振動で音を逃がした……らしい。

（すごい……すべるみたい……！）

あれなら、口舌の斬撃すら防げるのではないか。

とぐろを巻いていた大蛇が、一息に体を伸ばし、鋼鉄の尾を振り回した。

ガルムは敏捷だ。大きいのも小さいのも、跳躍して身をかわす。一回、二回――まるで

サーカスの動物芸のように、縄跳びの要領で尾をさける。

観客は大喜びで手を叩く。フレイは拍手に押され、次の攻撃を命じた。

砲撃が一層厳しくなり、ソーネチカのひたいに汗が光る。

一三頭がかりの集中砲火。大たちの意志がフレイを助けてくれる。彼らと過ごした年月が、彼らにかけた愛情が、そのままフレイの力となっていた。

ついに、大蛇の装甲が砕ける。……が、決定打にはならない。砕けた装甲が脱落し、下から新たな装甲がせり出してくる。まるで脱皮のようだ。

フレイは焦らず、そのまま現状を維持した。

持久戦なら、（約束された子ども）のフレイも自信があるし、ガルムは全頭が禁忌人形なので、魔力のバッテリーとしても機能する。ガルムは位置を入れ替えながら、しつこく砲撃を続け、ソーネチカの魔力を削っていった。

ソーネチカはどこか窮しそうに魔力を燃やす。風向きが変わるほどの凄まじい出力に、はつきり押されるのを感じた。単純な力だけではなく、気迫に怯む。

ソーネチカが防衛を捨て、攻撃に転じる。大蛇を加速させ、正面突破でフレイに迫った。突撃してくる大蛇の首を、しかし、フレイはかわきなかった。

「狙撃！」

ダックスフンドに命令を飛ばす。待つてましたとばかり、小型犬が鋭く吠えた。飛び出した吠え声が、大蛇の肩間に突き刺さった。

絞り込んだ一発。大蛇の中心線突き抜ける。

大蛇の頭部が裂け、果物の皮がむけるように、右、左、下顎の三つに割れた。



——合体機構のキモとなる、接続ジョイントを撃ち砕いたのだ。

観客があつと息をのむ。執拗な砲撃で消耗を狙っているように見せかけ、フレイはそれ、狙撃のチャンスがうかがっていたのか……！

周到な試合運び。好機を待つ忍耐。胆力。狙いの精密さ。何より、潤沢な魔力！
 どれをとっても一級品。観客の驚嘆は本物だ。ソーネチカもまた、落下するゴーレムを
 尻目に、うっとりとしてフレイを見つめた。

「いつの間にやら……素晴らしい腕前ですわ……！」

「うー！ 私だって、人形使い！」

「そう！ そして、わたくしの好敵手です！」

ゴーレムを立たせ、再び結合させる。ジョイントはもう復元されたいらしい。

どうやら、狙撃は無意味だ。フレイは気持ちを切り替え、次の命令をくだした。

「みんなー 合唱ー！」

大たちが一斉に遠吠えを始め、舞台から音が消えた。

音の伝導を妨害する、得意の（無音）結界。一瞬、ソーネチカは怪訝そうにした。音を
 消したから何だと言うのか。しかし、すぐに気付く。

「……………」

魔力を大蛇に伝達できず、大蛇は酔っ払ったように不安定になった。

仕組みを理解し、ソーネチカが目を見張る。音圧操作の本質は、音に魔力を「のせる」

こと。たつぷり魔力をのせた音波が今、相手の心臓に（共振）作用で集中している。結果的に、雷真の紅翼陣とよく似た、（魔封じ）の効果が生じていた。

ソーネチカは大蛇の位置をずらそうとしたが——ひと呼吸、遅い。

（ラビ！）

一番の相棒が、もう主の慰みに応えている。遠吠えの代わりに、おんつ、と叫ぶ。その一角だけ結界が途切れ、（音の砲弾）が発生した。

その後の数秒で生じた現象は、のちのちまで語り草となる。

音の螺旋が結界に突っ込む。音で造った砲弾なのに、無音の効果に妨害されない。結界が自ら脈を聞き、砲弾を受け入れてるように見えた。

大たちの和声によるものだ。結界と砲弾が干渉しないよう空間を譲り、あるいは調和し、刹那のズレで崩れてしまうような、繊細な攻撃を実現している。

このとき、フレイは楽団の指揮者となった。

魔術を封じているので、装甲の再生はできない。砲弾は見事、大蛇を破壊する——

——はずだったが、いきなり爆炎が生じ、音の砲弾をせき止めた。

フレイは信じられない思いで大蛇を見る。どうやら命中の瞬間の、魔封じが消えた一瞬に、火炎魔術で相殺したらしい。

しかし、それは、おかしい。火炎の魔術？ そんなものがなぜある？

だが現実には、大蛇はあざとを聞き、さらに火炎弾をぶつ放してくる。

きやうんつと甲高く鳴いて、火だるまのシェバードが飛んでくる。フレイは急いで毛を叩き、火を消してやった。火は消えたが、爆風のダメージは馬鹿にならない。

「う……みんな！ もう一回、結界——」

「遅くてよ！」

大蛇が火焔をまき散らす。大たちは次々に炎を浴び、合唱するどころではなくなつた。ラビの尾にも火が燃え移る。このまま放っておけば大火傷だ。

消火しようと、フレイが思わず愛犬に手を伸ばした——その瞬間、「にゆるん」という感触が手の甲を襲い、手袋を奪われた。

気がつけば、大蛇の舌先に手袋がからめ取られている。

「よい戦いでした」

ソーネチカが微笑む。一瞬の間ののち、決着のチャイムが鳴り響いた。

「しょ、勝負ありました！ 夜会九八位（静かなる騒音）、敗退です——」

執行部のアナウンスが、大歓声にかき消される。

割れんばかりの拍手。そして、スタンディングオベーション。

拍手と歓声に打たれながら、フレイはしばし、呆然とした。

尾を焦がしたラビが、遠慮がちに近寄ってきて、くうん、と鳴く。

謝っているらしい。それでようやく、敗北の実感がわいてきた。

涙が込み上げる。だが、それは決して、つらい涙ではない。フレイは腰につき、大たち

を集めて、一頭一頭を抱きしめた。

「ありがとう……みんな、ありがとう……！　ずっと私を助けてくれたね……！」
頭を撫で、首をさすり、頬擦りをする。

そうして一三頭に感謝を伝えると、フレイは涙を払い、舞台の外れへ歩き出した。ロキが冷然とした顔を取り繕い、ぶっさらばうに言う。

「一番手が出るべきではなかったな。女帝が疲労していれば、勝機はあった」
「う。そうかも……」

「……あんたを尊敬する。後のことはすべて、オレに任せろ」

そっけなく背を向ける。誇らしさとぬくもりで、フレイの胸がいっぱいになった。

「うん。ありがとう、ロキ」

舞台を降りる前に、フレイはぐると客席を見回した。

大勢の顔、顔、顔。これまで、こんなふうに眺めたことはなかった。

ガルム犬を整列させ、観客に一礼すると、拍手がさらに大きくなった。

夜会第二夜から今日まで、フレイは半年にわたって戦い続けてきた。

フレイが本来、才気に恵まれない少女であったことは、観客にも知れ渡っている。その彼女が、この夜会で見せてくれたものに、観客は拍手を惜しまない。

ガルム犬が誇らしげに首を上げる。フレイは作法通りに礼をして、舞台を降りた。壇の下では礼服姿の学生時代オルガが待っていて、両手を広げて迎えてくれた。

学生総代に抱き締められながら、フレイは雷鳴のような拍手を聞く。それはこれまで体験したことがないくらい、清々しい瞬間だった。

こうして序列九八位、フレイの夜会は終わった。

歴史に名を残すことはないかもしれないが――

彼女が歩んだ軌跡は、人々の記憶に長く残るだろう。

3

「フレイちゃんが負けたよ！」

魔具のイヤリング越しに、イオネラの声が聞こえた。

既製品にイオネラが工夫を加えた、通信用の魔具だ。信号を（音声）として出力でき、使い手本人のみならず、周囲の者にも音が聞こえる。

今、雷真は三姉妹とともに、夜の機巧都市を駆けている。

小紫は軽々と屋根を渡り、尿脛を兼ねて先行している。夜々は雷真の少し後ろを併走。しんがりはいりだ。異様な四人組を見て、通行人が次々に振り返る。

だが、雷真は気にしない。走りながら、イヤリングに魔力を流す。

「情報ありがとよ。フレイはここで退場か……あいつの戦い、どうだった？」

「ものすごく、立派だったよ。嫉妬しちゃうくらい」

「……そうか。なら、よかった」

フレイにも悔いはないだろう。それに、フレイが負けても、彼がいる。

雷真はちよつと可笑しくなつて、

「そんなに立派だったなら、ロキのやつ、鼻高々だろうな？」

「うん、まんざらでもないって顔してるね」

「残るはシャルと目輪か。こつちも急ぐ」

「OK！ 気をつけて！」

通信が切れるかと思つたが、イオネラは緩けて、はふーつとため息をついた。

「それにしても、悔しいな」

「何が？」

「ソーネチカちゃんの大蛇。途中で魔術回路を切り替えたみたいなの」

「何だつて？ 詳しく話してくれ」

思わず足を止める。小紫が異変に気付き、こちらに戻ってきた。

イオネラも驚いた様子だったが、かいつまんで戦闘の様子を話してくれた。

「——つまり、最後だけ火の魔術回路になったんだな？ どういう仕組みだ？」

「あのね？ それがわからないから悔しがってるんだよね？」

「今ここで考えてくれ。ソーネチカの大蛇はゴーレム二体が合体してできたもんだ。なら、

それぞれ一体ずつ、別の回路を搭載してるとか、どうだ？」

「ちょ……どうしたの、雷真くん。そんなに食いついて」

自分でも、どうしてこんなに気になるのか、わからない。

だが今、何かとてつもなく重要なことに、気付きそうになっている。

雷真の剣幕に押され、イオネラも一緒に考えてくれた。

「えっと……大蛇は全体で（同一のボディ）だから、三つも回路を入れたら干渉するよ。

合体の瞬間に絶縁できるならアリかもだけど——絶縁っていうのは封印と同義だからね、

一瞬で切り替えるのは簡単じゃないよ」

イオネラはさらにデメリットを並べた。いわく、仮に切り替えが可能だとしても、合体する必要性は薄く、三体別々に動かした方がいい。ソーネチカの支配力なら三体くらいは余裕で操れる。実際、彼女は普段、ゴーレムを分離している。などなど。

「直接訊いときばよかったな……。女帝さん、訊けば教えてくれただろ」

今さら後悔しても遅い。試合中のソーネチカに訊くわけにもいかない。

「回路の切り替え、イオのやり方とは違うのか？ ジブリールとは？」

「私がやったのは、ある意味するつこで……ロキくんの素質に依存したやり方なの。ロキくんとか、ゼルダちゃんくらいの念動がないと実現しない。女帝ちゃんもまずまずの使い手だけど、ロシアは機巧でやってると思うよ」

「……ぞっとするな。機巧装置なら、制御できるだろ」

局面に応じて魔術回路を変更できるなら、汎用性の高い兵器を作れる。

「最勝はね、大蛇の装甲や体長を変化させたみたいに、魔術回路も変化させたのかならうって思ったんだけど。魔術で魔術回路を変えらるって、魔活性不協和的にどうなのって話だし。」

——うん、やっぱりすぐにはわからないねー ちょー悔しいー」

「おい待て！ 魔術回路を変化させる？ そんな考え方もあるのか……」

イオネラの結論とは逆に、雷真はその着想に強く惹かれた。

「あ、雷真！ お迎えがきました！」

夜々が背伸びして、ストリートに向こうを示す。背の高い建物の上に、黒コートの魔術師が立っていた。あちらも気付き、するりと急動で降りてくる。

雷真はイヤリングに手を当て、早口で言った。

「灰十字と合流できた。ここからは、あっちとやる」

「OK。それじゃまた後でね——」

「あ、待ってくれ」

向こうで「ふえ？」と怪訝そうな声がある。雷真は真心を込め、優しく言った。

「悪いな、イオ。学院に戻ったばっかなのに、ずっと動いてもらってる気がする」

「ええっ………どしたの？ 君って、そんなの気にしない子だったよね？」

「何言ってるんだ。俺は気遣いの男だよ」

「絶対嘘だ！」

「そーです！ 雷真は女心を無下にして、まったく気遣わない大馬鹿者です！」

「こら夜々ー！ ここそとばかりにのつかるな！」

「でもね、私はちょっと嬉しいんだー」

イオネラは歌うように言った。三姉妹が一齐に耳をそば立てる。

「雷真くんといっぱい話せて。もうちょつとこのままでもいいなって思うよ」

「のんきなこと言ってるな。こんな非常事態、さつきと終わらせる」

「もちろん、ハッピーエンドでね。私、花柳斎先生ともゆっくりお話したいなうって、

ずっと思ってるんだから！」

「ああ、そうしよう。必ず」

約束して通話を終える。そのときにはもう、黒コートの男が距離を詰め、最初からそこにいたかのように、雷真の正面に立っていた。

肌は乾燥し、少し荒れている。金の瞳は鋭い眼光を宿し、口元には年輪が刻まれていた。それが年季を感じさせ、発散する気配に凄みを加えている。

「山鳩さん——でいいのかな？」

「そう呼んでくれ。これより、我らの同僚——おまえさんが『キンバリー先生』と呼ぶ者と、ミス・カリューサイの邂逅作戦を行う」

山鳩はコートをひるがえし、ついてくるよう身振りで示した。

ほとんど足音もなく、影のように動く。急いでいる素振りはないのに、彼を追いかける

には走らなければならなかった。

ここからは八重葎を使い、姿を隠して移動する。やがて、山鳩が語り始めた。

「状況を説明しよう。敵はこの先の聖堂、我らの拠点に立てこもっている」

「俺の知っているとこか。敵は結社の魔術師だよな？」

「そうだ。精銳ならば、我らと同程度の練度と考えてもらってかまわない。敵は人形込みで一大隊規模。数百人は覚悟してくれ」

「数百……こっちには坂十字がついてんだよな？ どのくらい戦力がある？」

「同数が八分隊あるが、市街と学院の（監視）のため出払っており——十人だ」

たったの十人！ 雷真は氣力が萎えるのを感じた。

今さら數的不利で怯みはしないが、苦戦すれば、夜々にかかる負担が増す。

「こちらには（迷宮の魔王）がいるし、拠点の内部構造を熟知している。手順さえ間違えなければ、不可能ではない」

「そりゃ、まあ、お師匠さま本人はそう言うだろうけどよ……。そんな大所帯が機巧都市に入り込んだのに、何の対策も打てなかったのか？」

つい、恨み節が口について出る。これには、山鳩も苦笑いを浮かべた。

「何を言っても言い訳にしかならないが、把握できていなかった。ロシアの同胞からも、そんな大部隊が出動したという情報はきていない」

「情報がない？」

「いきなり湧いて出たようなものだ。一年前には東方からの使節団が機巧都市を訪れたと聞くが、まあ、そのとき以来の規模だろうな。連中の目的は我らの教父——」

説明は続いていたのに、男の声が遠のいた。

天啓のような閃きが脳を支配する。加速する思考に追いつかず、頭がくらくらした。

これまで見た数々の事象が、それぞれに連絡し、ひとつに結びついていく。

最初にソーネチカが襲撃を受けたとき、とらえた魔術師たちが消えたこと。

まだ明るい街中で硝子を乗せた車が襲撃されたこと。警官が言った「怪獣」の目撃情報。

ロマーシニコフの約束。装甲を再生する大蛇。そして魔術回路の切り替え——

「どうした？ 聞こえているか？」

急に足を止めた雷真に、山鳩が声をかける。だが、雷真は返事もできない。

これまで体験した不思議がすべて、同じ魔術の仕業なら？

そういう大魔術が、存在するのなら？

足場が崩れ落ちるような気がした。そんな魔術が実在するなら、この世なんてものは、

雷真が思っていたよりはるかに曖昧で、脆弱なものとなる。

だが——キンバリーがこれまで、何度も教えてくれたことだ。魔術の思考、魔術の理屈。

それは世界をねじ曲げる。往々にして、机上の空論が物理法則に勝る！

「魔術ってのは……理屈に合わないことをやってのけるよな？」

雷真は山鳩にたずねた。山鳩は注意深く雷真を見つめ、慎重な口ぶりで言った。

「いかなる魔術効果も、魔術の理屈には合っている」

「なら訊くが、現実を書き換えちまう魔術は、魔術の理屈に合ってるか？ たとえば一年前のできごとを、今日のできごとにするとか。ここにいたはずの人間を別のところにいたことにするとか。そういうすり替えた」

山鳩は戸惑ったような顔をした。雷真は彼の肩をつかみ、

「あるのか。ないのか。どうなんだ？」

「……その手の大魔術は巨大な儀式を必要とする。個人が扱えるものではない」

「金銀貨の（万物流転）は実在したぞー あれも儀式があるんだろ？」

その通りだと思つたらしい。山鳩は重い口を開き、理知的な声で言った。

「（因果性置換）という魔術理論が存在する。だが、あり得まい。万物流転はその性質上、

魔力と威力がリニアな変動関係——」

「わかるように言ってくれー」

「……入力が入きいほど出力が大きい傾向にある。だが、因果性置換はそう単純ではなく、まず最初に（因果の連続性）を破れるだけの莫大な魔力、巨大な回路を必要とする。その回路は複雑怪奇で、人形一体に収まらないだろう。これは単純なサイズの問題ではなく、イブの心臓の許容量に関わることだ。まず例外はない」

雷真はゆっくりとうなずいた。気がつけば、手に汗を握っている。

（……喜べ、イオ。女帝さんの大蛇は、機巧でやってるわけじゃない）

機巧で魔術回路を換えたのではなく、あくまでも魔術でやったのだ。

「……ご教授、ありがとよ。それで、わかった」

「何がだね？」

「ソーネチカの大蛇が、三体に割れる理由だ！」

4

盛大な拍手喝采を聞きながら、ソーネチカの気分は訝えなかった。

大蛇ヨルムンガンドを見上げる。大蛇は口の先端から、ちよろちよろ舌を出し入れしている。頭部の損傷は修復され、既に万全の状態だ。

先ほどヨルムンガンドを救った（火炎）の魔術が、ソーネチカには解せない。

あんなものを使うまでもなく、音圧操作を魔防で正面から受け止め、呪縛の解けた一瞬に真正面から突撃すれば、勝てる……はずだった。

だが、あの瞬間、ソーネチカは火炎の魔術回路の存在を思い出し、使った。

なぜ、あれが（装填）されていたか。そのことを忘れていたか。

考えてもわからない。それどころか、考えるほどに思考は茫漠となり、疑問に思わなくなっていく。そして気がつけば、当然のこととして受け入れていた。

そうだ。ちゃんと（装填）してあった。疑問はない。

頭が麻痺するのを感じながら、ソーネチカは舞台を見回した。

（気をそらしている場合ではありませんわ。ライシンとの約束があります）
今は使命を果たさなければならぬ。託された役目をまっとうしなくては。

「さあ、お次はどちら？ シヤルロット？ それとも、ヒノワ・ドモン？」

「わたくしがまいります」

日輪が進み出る。シヤルは日輪に駆け寄り、潜めた声で耳打ちした。

「待ってー 貴女を温存した方が、万一のとき、マダナス戦で有利——」

「いいえ。わたくしがまいります」

同じ言葉を繰り返す。日輪は頑なで、シヤルとは目を合わせず、言葉にも耳を貸さない。

ソーネチカに向けた顔には、悲壮感すら漂っていた。

鬼気迫る形相だ。もちろん、魔王の座にはそれくらい価値があるが……。

（舊儀の支配を受けていると見て、間違いないですね）

雷真に教えてやりたいと思つたが、あいにくここに彼はいない。

日輪はふところから匕首を取り出し、白木の鞘から刃を抜いた。

「シヤルロットさま。口をさま。お下がります」

凛とした声。息詰まるほどの気迫が飛ぶ。客席が凍りついたように沈黙した。

「ソーネチカさま。貴女を信頼してこの式を使います——どうか、ご無事で」

匕首を片手に、ゆっくりと舞い始める。美しく、幽玄だ。つま先が魔法円を描き、日輪

を中心に魔力が渦を巻き始めた。

腕が焼けるような、濃密な爆気が漂い始める。ソーネチカは愕然として、

「召喚させません！」

反射的に大蛇をけしかけた。目輪は舞いを停めず、祭文を唱え続ける。

直撃すればしゃんこだ。思わず力んだその瞬間、黒い壁が目輪を護った。

式神（娯守磨）。城壁すら容易に砕く、大蛇の体当たりにはびくともしない。

ソーネチカは驚嘆した。召喚儀式の途中ではかの式神を呼び出すとは。そもそも、召喚のコアとなる依り代は、いつ放ったというのだろうか？

（先ほどの……戦闘の最中！）

観戦しながら、舞台に呪符を設置していた……？

召喚儀式が佳境に入る。大蛇が爆気に揺さぶられ、牙からオイルを滴らせた。

降りかかるオイルを匕首で斬り払い、目輪は刃を高く掲げる。

「三万三千式の王、式大権現式王子、きたりませう！」

刃を振り下ろす。充滿していた爆気が刀身にまとわりつき、竜巻が生じた。

爆気は凝集し、膨張して、巨大なヒトガタとなる。

荒れ狂う黒炎を身に帯びて、くろがねの具足をまとった、炎の武人が出現した。

大きい。先日ダローリアが持ち出した、搭乗式ゴーレムの二倍はある。

式王子が息を吐く。それだけで、焼けつく熱波が吹きつけ、ソーネチカの肌が焦立った。

ここまでの恐怖を自覚するのは、いつ以来だろうか？

それこそ、目の前で多くの知人を失った、あのとき以来――

委えかけた心が奮い立つ。弱点を探し、監視を試みると、燃え盛る火炎の中に、匕首を構える日輪が見えた。何かをつぶやき続けている。おそらく制御の禁文。彼女ほどの魔術師でも、これは容易には扱えないらしい。

式王子が腰を落とし、腰に手をやる。剣を抜くような姿勢だ。ソーネチカは脅威を察し、大蛇に飛び乗って逃げた。

思った通り攻撃がきて、黒炎の太刀が舞台を音めた。火炎の澤布がかすめ、大蛇の装甲が赤熱する。急いで脱ぎ捨てると、装甲もろとも舞台が融解した。

（何という火力！融け方が、セトの腐毒のようですね……！）

客席がどよめき、観客たちが浮き足立った。客席は強固な防弾魔術で覆られているはずだが、この火炎が標的を外せば、おそらく無事では済まないだろう。

「見事と言うほかありませんわ……これが極東の秘術ですね……」

声が震えているのを自覚する。その気になれば、これは都市を焦土にできる。野戦戦艦すら、ひと太刀で轟沈させられる。伝説級の自動人形に匹敵する存在を、日輪はまったく機巧に頼らず、純粹な魔性のみで生み出し、使役しているのだ。

その上――この怪物の真価は、まったく別のところにあった。

式王子が左手で印を結ぶ。それだけで、あたりの魔気が蠢き始めた。嵐のようなもの、

虎のようなもの、多数の式神が生み出され、舞台を埋め尽くす。

瘴氣変じて式神となす——それこそが式王子の能力。

（式神の執事者……魔軍を統べる者！）

そうして、あたかも神話の再演のような、英雄と大蛇の戦いが始まった。

ソーネチカは大蛇の装甲を捨て、あるいは再生して炎に耐える。幸い、ここには大勢の観客がいる。日輪は観客を殺さぬよう、火力を抑えなければならぬ。群がる小さな式神たちは、大蛇の強大な突進力で制圧できる。大蛇のボディは最大数百メートルにまで伸長でき、展開速度も一瞬。これは通常の物理法則から逸脱しているため、速度と衝撃は常識外の強さとなり、格闘能力では巨大化時のシグムントを上回る。

だが、飄散らしても、飄散らしても、数が減らない。式王子が炎剣をふるうたび、瘴氣が補充され、新たな式神を生んでしまう。その上、こちらの攻撃は無効……。

それでも、ソーネチカは焦らない。既に弱点を二つ見抜いている。

（皮肉なことですが、この圧倒的な力こそ、第一の弱点ですわ）

日輪の魔力は湯水のごとく消費され、強制的に瘴氣に変換されていた。長時間の戦いは不向き。ゆえに、先日のグロリアとの戦いで、この大式神を使わなかった。

（そして第二の弱点は——あの刀剣を破壊すれば、終わります！）

日輪が握く（依り代）の匕首。あれさえ破壊できれば、ソーネチカの勝ちだ。

持久戦に持ち込み、日輪が力尽きるのを待って、最大火力を叩き込む！



だが、日輪（ひる）はそんな甘い相手ではなかった。大蜘蛛（おほいづむろ）が三体、いきなり土中から現れ、糸を噴く。糸は大蛇の関節にからみつき、駆動系に急制動をかけた。

——この大蜘蛛、周囲の雑魚より格段に力が強い。別途、個別に召喚したと思われる。その時間をどうやって稼いだかと言えば。

（わたくしを泳がせて、時間稼ぎを……!?）

すべて、作戦だったのだ。火炎の太刀で決めなかったのも、式神の群れで翻弄（ひんろう）したのも、女帝を効率よく追い詰め、殺さずに倒すための手順！

大蛇が舞台に引き倒された。ソーネチカは急動で己を支え、どうにか足から着地する。横倒しになった大蛇に、あちらはもうとどめの一撃を準備していた。

炎剣が数十倍に膨れ上がる。先ほど体験した限り、あの熱は魔毒に似て、装甲を侵食していく。あれだけの威力で溶びせられて、ヨルムンガンドの再生が追いつくとは思えない。やられた——と思った瞬間、ソーネチカは思い出した。

爆発的に魔力を高め、指を式王子の胸に突きつける。

念じて、起爆。遠端に、式王子が露散した。

何が起こったのかわからない、という表情の日輪が空中に投げ出される。

爆破にさらされ、着物が焦げ、肌が焦（い）けている。霊的に強化されているのか、日輪自身に外傷はない。だが、匕首は中ほどからはっきり折れていた。

「どうして、禁刀が……爆発……!?」

日輪が匕首に目を落とし、すすけた断面を見て、はっとなった。

「あらかじめ細工を……オイルを払った、あのとき……!?」

召喚の直前、大蛇の唾液を匕首で払った。あれが女帝の植えたタネだ。

「発火する薬液です。不用意に触れるべきではありませんでしたわね」

「くっ……まだです」

「いえ、終わりです」

日輪の手を示す。手袋は爆発に巻き込まれ、見事に焼け落ちていた。

わあっ、と大歓声が耳朶を打つ。結末はあっけないものだったが、日輪が見せた魔術の

深え、大式神の脅威は、彼らの心を魅了したようだ。

日輪はその場に崩れ落ち、泣き出してしまった。

「勝負は時の運とも言います。どうか、気を落とされぬよう」

罪悪感から、いつになく優しい声が出る。舞台を去る日輪に、フレイのような暗れやか

さはない。ソーネチカの胸が引き裂かれるように痛んだ。

（このどす黒い……わだかまる気持ちちは……何ですの？）

後ろめたい。爆破の薬液？ そんなものが（装填）されていたか？ 自分はなぜ忘れて

いた？ 忘れていたのに、なぜ納得している？ 講釈まで垂れて！

くすぶっていた疑問が大きくなる。それでも、戦いをやめるわけにはいかない。

溶岩が冷えて固まったような、黒々とした舞台を踏みしめ、語る。

「さあ、次は貴女あなたでしてよ、シャルロット！」

5

シャルは心配そうに目輪めわを見ていたが、やがてこちらに視線を寄せた。
まっすぐな瞳。その光の強さに、ソーネチカはわずかに怯む。

「……いい眼めですわ。自信あり、と見受けました」

「自信はないわ。あるのは覚悟だけ」

「惚ほれ惚ほれするような言葉です。では戦いましょう、存分に」

「いや、少し待ってくれ」

冷静な声が、少女たちの昂たかぶりに水を差す。

観客が好奇の視線を注ぐ。ふわりと風に乗り、オルガが舞台上が上がってきた。

「夜会執行部の役員として見解を述べたい。まず、夜会において魔術の使用は原則自由。
いかなる魔術を用いても、それがあたちに不正の要件とはならない」

言いながら二人に近付き、客席に届かないくらいの声量に落とす。

「その上でシャルロットに助言を与えたい。ソーネチカには不利となるが……」

「どうぞ、言いなさい。わたくし、その程度のことにくじらは立てません」

「では、君も聞いてくれ。ソーネチカ」

「——わたくしも？」

オルガは客席に「しばし待て」と身振りで伝え、少女二人を引き寄せた。

「君たちは〈因果性置換〉という魔術理論を知っているか？」

シャルは怪訝そうにした。ソーネチカには既知の単語だが、無表情を貫く。二人の様子を見比べ、シグムントが補足した。

「原因と結果に関わる原理だな。魔剣と同じく、宇宙の根幹に関わる真理のひとつ」

「そうだ。ソーネチカが使ったのは、その原理を応用したものだろう？」

「……いいえ、これは〈分け与えるもの〉。救世主が数切れのパンで千人の空腹を満たした——という聖書の記述に基づき、自己増殖の魔術回路ですわ」

嘘だ。オルガは嘘に勘付いたようだが、シャルは半信半疑で、

「魔剣と同レベルの回路？ そんなの、学生が個人で使用できるわけないわ。サイズ的にも不可能よ。お城みたいな魔術回路を抱えて歩いて言うの？」

「帽子の上を見る。減元素を生成するような回路が、君の頭に乗っているぞ」

「それは、だって、本体がヴァルハラに——ともかく、テオレイシっていうのは真理級の大魔術なんでしょう？ それこそ、金薔薇の〈万物流転〉みたいな——」

言葉が途切れる。オルガは我が意を得たり、とばかりにうなずいた。

シャルとオルガ、そしてシグムント、六つの瞳がソーネチカに向く。

「理論さえ完成しているなら、限定条件を厳しく重ねて、実用レベルに落とし込めるかも

しれない。ソーネチカ、君も今の勝利に思うところがあるだろう？」

かつての好敵手は、真摯な瞳をソーネチカに向けた。

「君の背後にも善魔がいる。そうだな？」

「……そのようなはず、ありませんわ」

ソーネチカは否定した。誓つて言うが、そんな記憶はない。

だが、そんな思い込みは、何の意味がある？

ソーネチカの動揺を見透かしたように、オルガは己のこめかみを突ついた。

「私の記憶が焼きつづぶされていたことを、君も知っているだろう？」

「……ええ。ですが、わたくしに頭の傷はありません。手術を受けたことも」

しかし、善魔の魔女ならば、傷痕の隠蔽も、記憶の操作も可能では？

ヨルムンガンドが搭載しているのは、因果性置換の縮小限定版だ。

現象を好き勝手に変えられるわけではない。あくまでも「実際にあった」過去を呼び出

しているだけ。たとえば、実際に一定期間、火器を搭載して運用しておく。そうすれば、

火器を取り外した後も、過去を（再帰）させて使用できる。ボディが伸縮するのは、実際

にそのサイズだった過去があるからだ。

これを技術者は「因果の装填」と呼んでいた。装甲の再生はこれの応用で、直撃の寸前

に過去の己を呼び出しておき、ダメージを肩代わりさせている。

ロマーシニコフの一件もそれで説明できる。戦争で兄を失ったとき、彼は日本人を憎ん

だはず。当時の彼を何者かが再婚させ、雷真を攻撃させた……。

だが、ソーネチカの思考は、そこからもう一步、踏み出してしまった。

（わたくしにも、大尉と同じように、因果性置換が使われているのでは？）

たとえば、このソーネチカが現在の自分ではなく、過去から呼び出された、純粋だった頃の自分だとしたら？ 本来のソーネチカはとくに薔薇に支配され、自覚がないままに雷真を騙し、薔薇の尖兵として活動していたのでは……！？

その恐怖に襲われ、ふさぎ込んだ。自分が自分だという証が欲しくて、らしくもなく彼に寄りかかった。しかし、そんなソーネチカを、彼は奮い立たせてくれた。

自分が薔薇を倒すと、言ってくれた。

彼が灰薔薇を討ってくれるなら、ソーネチカがたとえ薔薇の傀儡だろうと、そうでなかろうと、関係がない。茨の呪縛を脱し、自由になれる。

そう信じて、同盟を結んだのだ。だから今は――

「おしゃべりは後ほど。決着をつけましょう、シャルロット」

決心を見て取り、オルガは嘆息した。それから、シャルに悪戯っぽい笑みを向ける。

「君が負ければ、私まで女帝に負けたことになる。だから勝て。そして、死ぬな」

シャルはきりと唇を引き結び、うなずいた。

オルガが去ると、二人の少女はしばし、舞台上でにらみ合った。

「仕掛けてこないの？ 先手は譲ってあげるわよ」

「後手は上手が取るものです。そして無碍ですわ。魔竜の真の姿を呼び出さない」

「大きければいいってもものじゃない。私はもう、そのことを知ってる」

思い返せば、シャルは仔竜でオルガに勝っている。

改めて思うが、強敵だ。客席は静まり返り、しわぶきひとつ聞こえない。針が落ちる音すら響きそうな、そんな沈黙の中――

「それじゃ、女帝陛下に敬意を表し、こちらから行くわ。ラスト・カノン」

滅元素の大砲が開始の合図。シャルは真正面から大蛇を消し飛ばしてきた。

大蛇は装甲を潰わせた、滅元素をそらす。もちろんすべては防げず、装甲がたちまち消滅した。しかし、貫通はしない。因果の脱皮を繰り返し、滅元素とせめぎ合う。

まばゆい光芒の中、落下した大蛇の装甲が、小さな蛇に変化した。

八方からシャルに迫る。うねって這い回る蛇の群れは、触手のようにおぞましい。

「ひいっ……つつつ、土よー」

上ずった声で、シャルが精霊に呼びかける。舞台の床が変形し、土壇となってシャルを守った。だが、機械の蛇は土壁に潜り込み、あちら側へすり抜けてしまう。

ついに先頭の一匹がシャルをとらえ、足を這い上がった。

「いやあああんっ、何これえっ」

貴族の顔らしからぬ、なまめかしい悲鳴があがる。だが、怯んだのは一瞬だ。蛇の狙いが手袋だとわかった瞬間、シャルの顔つきが変わった。

「このつ……ラスターセイバー！」

光の刃でなぎ払う。光線は鏡で自在に向きを変え、機械の蛇を次々に切断した。

（何という支配力！ 射撃開始と（鏡）の展開が同時でしたわー！）

相手の才能に見惚れてしまう。精霊と魔術回路を同時に扱うとは。

「貴女に小細工は無意味ですわね。正面から受けて立ちます！」

正面から破壊の光に耐える。あちらの魔力も無限ではない。燃費だけなら、こちらの方がいいはず——というソーネチカの考えは、とっくに読まれていたらしい。

頭上に脅威を感じて、天を見上げる。上空にはもう、不自然な明るさがあった。

天の川のようなきらめき。その星のひとつひとつが（鏡の精）だ。

「ラスターフレア——（タインズフォール）！」

天に光の散弾が飛ぶ。それは途中のリフレクターで分解され、さらに数を増し、やがて天空で反転し、土砂降りの雨のように落ちてきた。

一点照射の攻撃ならば、そこだけの（再帰）で済む。だが、これでは全身の同時再生が必要であり——とても追いつかない。

ソーネチカの口元に、爽やかな微笑が浮かぶ。

夜会の開演前、シャルが（十三人）と聞いたとき、ソーネチカは不服だった。

魔剣に頼った戦い方は、ソーネチカの目には怠慢と映ったし、たびたび起こす問題行動は、シャルの慢心によるものだと思っていた。

だが、ひたむきな研鑽が、愚直に積み上げてきた努力が、プリューの才能を開花させた。本人は気付いていないだろうが、シャルはもう魔王の本軍に達している。

この敵になら、負けても悔いはない。晴れ晴れとした気分で敗北を噛みしめた……のだが、ヨルムンガンドに降りそそぐはずの光が、かすりもしなかった。

大蛇の装甲から無数のノズルがせり出し、銀色の金属粉を散布している。いかなる物質なのか、粉は滅元素を散らし、受け付けない。

（またわたくしの知らない力が……装備が……因果が！）

誰かが（装填）した因果のタネが、ソーネチカの意志とは無関係に発動している。

「用意周到ね、ソーネチカ！ でも、これからよー」

シャルが汗をぬぐい、次の攻撃に移ろうとする。ソーネチカは肩を震わせ、

「不興ですわっ……どこの痴れ者ですのー！ 神聖な戦いを汚すのは！」

そう叫んで、己の手袋をむしり取った。そのまま投げ捨て、客席をにらむ。

戸惑ったような観客の顔が、突然、闇に包まれた。

——否、包まれたのはこちらだ。外界から遮断され、結界に閉じ込められている。

闇色に染まった視界に、ぼうつと女性の顔が浮かび上がった。

ブロンドの美女。コテを当てて巻いた髪に、豊かなまつ毛、大きな灰色の瞳。挑戦的な

微笑は自信ありげで、どこか母の面影を感じさせる。

「……誰ですの？」

「誰って——面白いことを言うね。よく知ってるはずさ」

女は親しげに微笑み、なれなれしく顔を寄せてきた。「無礼者！」と叫んで頬を打ってやりたかったが、ソーネチカは呪縛されたようで、手足はびくりとも動かない。

「……魔術ですのね。正体は知れていてよ。祖国を蝕む敵、灰薙機ですわー」

「当たり前。だけど、外れだね」

笑いながら告げる。からかうようなものいいに、ソーネチカは吐き気がした。

……いや、吐き気の原因は彼女の態度だけではない。頭がひどく重く、視界がゆがんで定まらない。重い頭痛の前触れのような、めまいと違和感に襲われている。

「はつきり言いなさい……！ 灰薙機でなければ、誰ですの！」

「まだわからないのかい、ソーニヤ？」

「わたくしを……そんなふうと呼ぶ……？」

ソーネチカはじつとりと断汗をかき、込み上げる吐き気に抗った。

「これは何の魔術……ですの……まさか、精神をのっとる……？」

「惜しいー だけど、そうじゃないのさ。見つめてごらん。私の顔をもっとよく」

「な……に……を……？」

「気付いてしまえば、楽になれるよ。ほら、この顔に見覚えがあるはずさ！」

「不愉快な……わたくしを誰と……心得ますのっ……わたくしは——」

闇に目をこらし、気付いた。

園の中に浮かび上がるその顔は、毎朝、毎晩、何かにつけて、よく見かける。
つまり、わたくしこそ——

「そうだよ、ソーニャ。君こそが」

鏡の向こうにあるべき顔が、耳元で艶然と微笑んだ。

「灰書機シスマだ」

周囲の闇が一瞬に晴れ、再び舞台上の光景が戻ってきた。

シャルの瞳に警戒心がにじんでいる。彼女ほどの魔術師が何を伏えているのか——答えはすぐわかる。ソーネチカの全身から、膨大な魔力があふれているのだ。

瘴気が混じっているらしく、魔力本来の青白い発光がなく、くすんだ灰色だ。

「……ああ、とてもいい気分だね」

灰色の魔力をまき散らしながら、シスマは言った。

快感に身を震わせ、笑い出す。最初は品よく、やがて腹を抱え、下品な嗤笑になる。

それだけで空風が生じ、シャルをよろめかせる。シスマは上機嫌で笑った。

「上手くすれば、このまま魔王の座に手が届くかと思っただけ——邪魔してくれたね。さすがはエレインの系譜、プリューのお嬢さんだ。銀書機が君たちに執着しているのも、うなずけるといふものさ」

「何を言ってるの……ソートネチカ……!?」

「そうじゃない。私は灰善魔。灰善魔シスマだよ」

「……………!?」

「それじゃ、始めようか。神性魔巧、誕生のときだ」

ヨルムンガンドに魔力を注ぐ。大蛇は舞台に首を突き立て、大地を叩き割った。

そのまま体を伸長させ、地下へ潜っていく。異変に気付き、警備が警笛を吹き鳴らしたが、観客は状況を理解できず、もちろん避難しようとしなかった。

シスマは大蛇を伸ばし続ける。さらに下へ。もっと奥へ。ヨルムンガンドは神話の怪物のように長大となり、ついにそれを採り当てた。

學者の聖堂が呆気なく倒壊し、中に封じられていたものを解放してしまう。

やがて、闘技場の外で黒い火柱が立った。

月光でも照明でも消せない黒。夜の闇の中でも、その暗さはとびきりで、そこだけ墨を流したようだ。その黒い火柱を、シスマはうつとりと見つめる。

「さあ、ひとつになろう、アンドロギエネス」

あるいは、その呼び声に応えたのか。

この世の終焉を思わせる、重たく、冷たく、遠方もない魔力とともに。

地の底から巨大な人影が這い出してきた――



Chapter 2 凍っていく世界の絶対者

1

闘技場の外、大地の裂け目から、巨大な人影が這い出した。

頭の前まで百メートルはある。学内のどの建物よりも大きい。全身に無数の目玉が浮き出し、ボディの表面は流動的で、溶岩の流れを思わせた。

その異形は、ラザフォードにとっても「怪物」だった。

咆哮ロウゴウが響く。あるいは産声のように。

それだけで木立ちがなぎ倒され、闘技場の上空を颪風が吹き抜けた。

衝撃は竜巻を生み出し、別々の方向へと走る。竜巻の直撃を受けた建物は崩れ、屋根を飛ばされる。中央食堂のガラス壁が弾け飛び、植物園のドームが粉々になった。

巨人は別に攻撃したわけではない。ただ、叫んだだけだ。

空気と魔力が反応し、キラキラと鉄琴のような音を響かせる。美しい音色だが、聞く者を無条件に怯おそませる凄みすごがあった。

客席からは破壊の様子が見えないが、威容は確認でき、となりのエドマンドも顔面蒼白めんそうはく。



だ。ただし、狂王の口元には、悦楽の笑みが浮かんでいたのだが。

「何だ、あれは……？」「どうなっている……」「危険……じゃないのか……？」

観客たちがざわめく。ざわめきが恐慌に変わる前に、誰かが立ち上がった。

「客席の魔術防衛は万全です。しばし、その場でお待ちください」

学生総代オルガが、よく通る声で告げる。執行部の役員が彼女にならない、客席を回って人々を落ち着かせ始めた。さすがの自主性に感心していると、エドマンドとは反対側の席から、バーシヴァルが殺した声で言った。

「あの大蛇、（聖堂）を砕いたようだな」

「ああ、ソーネチカは薙薙の手の者と見てよい。ギユネスを奪取するつもりだろう」

「マダナスを出せ。あやつはあれの性質を熟知しておる。再封印できよう」

「それは無理だ。あれが本当に運中の手に落ちたなら、封印は不可能——」

「結社が制御手段を持っているとは限らん。この鳥が地図から消えるぞ——」

ラザフォードは敢えてとばけた顔をして、肩をすくめた。

「だが、これは初めて見る現象だ。対策など、すぐに思いつくものかね？」

「……落ち着いている方が不自然であろうよ。我らが動かず、誰が始末をつける？」

「いつもの面々に任せてみようと思うのだが、どうだろう？」

付き合いの長いバーシヴァルも、さすがにこれにはあきれたようだ。

「失敗すれば、すべて終わりだ。観客はどうなる。五十万人の市民は——」

「無論、護る。だが、そうだな、犠牲者が出た方が好都合かも知れん」
 仙人留の下で、パーシヴァルの眼が光った。

「なるほどな……。おまえさんが要石を日本軍に——実際には渡らなかったが——ほいと
 くれてやった理由がわかったよ。あの小僧に負い目をつくるためか」

たとえば今、ギユネスが何か仕出かせば、雷真はこう考えるに違いない。

俺がああ石を奪い去ったからだ、と。

「彼がどんな少年かは、よくよく把握している」

「悪党め！」

「そうでなくては何者にもなれない。我々は魔術師だ」

「——こんなときにおしゃべりとは、大した余裕だな真ジイども！」

悪魔が飛んでくる。二人の前に、秘書官アヴリルが立っていた。

「いかがされます、学院長？ 警備隊が指示を求めていますか？」

「状況は？」

「動ける警備は六隊です。学生と教授の大半はこの場にいます」

「みな物見高いな。勉強熱心、大いに結構」

ラザフォードは思案した。再編された警備隊は、まだ装備が充実していない。自動人形
 も人員も減り、戦力は半減以下。足手まといの観客をここで防衛するのは難しい。

「災害時規定にのっとり、陛下と市民をお護りするのだ。一人の怪我人も出してはならな

い。警備の総力をもつて敷地外まで誘導せよ！」

「災害……扱いですか？ それは無理があるのでは？」

アヴリルは蔑むような目をした。

「あれはどう見ても敵——そうでなければ人災です。災害なんて表現でごまかせるはずがない。あれが攻撃してくる可能性もあります！」

「避難完了までは教職員で抑える。その後、学院を外界から切り離す」

その言葉の意味を理解して、エドマンドがにやりとした。

「切り離すとは（遮蔽結界）のことかな、学院長？」

「陛下は博識でいらつしやいますな、ですが、用いるのは（断絶結界）です」

「初めて聞く名だ。それはどのようなものだね？」

「遮蔽結界のような（隠蔽）効果はなく、外部からも中の様子がうかがえます。ただし、

魔術も、攻撃も、空気をえ、決して外に漏らしません」

「……つまり、尤子は通すが、魔素および分子サイズのものとは通さない」

「左様です。学院の敷地がどうなろうと——瘴気に汚染されようと、焼き尽くされようと、

市街地に累は及びません」

「そんな結界が学院にあると？ 私は報告を受けていないが？」

「そうですね。陛下の親母君、ミセス・グロリアが構築したものです」

皮肉な返り合わせ。城壁とバリアトリアルに代わる防衛システムとして、グロリア

が建造させたものを、活用しようというのだ。

エドマンドは威嚇たつぷりにうなずいた。

「怪物ごと閉じ込めるわけだな。それで市街地の損害を防げるか？」

「あれが誰かに利用されぬ限り、耐え切れると考えます」

「ふむ。だが、それでは救援が難しくなるのではないかな。敷地に残った君たちを」

「ご心配には及びません。必ずや、事態を収束してご覧に入れます。さき、陛下はお早く学外へ。警備がお連れします」

エドマンドはにやりとして、その勧めを拒否した。

「いや、私には私の護衛がある。ご米場の紳士淑女を優先してくれたまえ」

——そんな名目で、単独行動するつもりだ。この男に自由に動かれては困る。

「ですが、陛下——」

怪物ギユネスが天に吠え、大気が震える。観客が正気を失いかけたので、ラザフォードは急いで警備隊に合図を送り、誘導を開始させた。

そのどさくさに、エドマンドの姿が見えなくなる。

ラザフォードは苦笑して、不機嫌な顔のパーシヴァルに言った。

「そう青筋を立てんでくれ。ギユネスは見事なものだろう？」

「……おまえさんが問題児だということを忘れていた。いや、覚えてはいたのだが、これまで無茶が好きとは思わなんだぞ」



顔の胆義を紙めたような、苦々しげな顔で愚痴る。

「（下から二番目）の小僧に、若かりし日の自分を重ねているのか？」

「私は合理主義者だよ。そのようなロマンチズムを持つ男に見えるかね？」

「見えるとも。おまえさんが神性機巧を求める理由も……」

その先は明言せず、もごもごと口の中で言う。ラザフォードは聞こえなかったふりをして、雄叫びをあげる巨人を見上げた。

「見たまえ、存在しているだけで、天が使えている。あれほどの力を持つ存在、有史以来存在しなかっただろう。過去の偉人、賢人たちですら、これを建造できなんだ」

「所詮は玩具だ。我らの理想はあの先にあつたはず。計画が狂うぞ？」

「いや、これでよい。ここでそれが成るのなら、神性機巧は今、生まれる」

「奴らにみすみす渡すつもり——いや、そんな気はないな？」

ラザフォードは涼しく微笑み、首肯した。

「予見の真に意味するところが、私にもようやくわかったような気がしているのだ。愚痴たちに奪われはしない。予見の子が、それを阻む」

巨人に向き直り、笑みを刻む。その視線の果てで、巨人はまだ咆哮していた。

遠方で立ち上がる怪物を、シャルは瀧えながら見上げた。

一帯の精霊がパニックを起こし、泣き叫び、逃げ惑う。そのビジョンは物理現象を認識したものであり、実際に付近の魔素が乱れ、環境が激変している。

「何をやらしたのよ、ソーネチカ……！」

彼女はもう舞台にいない。捨てた手袋だけがその場に残っている。負けを認めて、ヤケクソになった……わけではない。これはもつと恐ろしい、破壊的な何かだ。

ここを離れる前、ソーネチカは何と言っていた？　確か、「ひとつになろう」とか何とか。言葉通りなら、己の力とする、という意味か。

あの馬鹿でかい魔法生物を、己の武器にする……!?

「やめさせなきゃ！　風よ——」

「待てシャル！　下手に動くな！」

大気の精霊が集まり、シャルの体を浮かせる前に、シグムントが制した。

「ソーネチカに聞わるべきではない。明らかに様子が変わっていた」

「だからよー　ソーネチカは真鍮の息がかかった、操り人形だわー」

「君もそうだ」

シャルは勢いを失い、うつむいた。その帽子に飛び移り、シグムントは道理を説く。

「勝手な行動は控えろ。来賓の手前、学院長も必ず動く。指示を待て」

観客席を振り向くと、そちらも大騒ぎになっていた。学院長がバーシヴァルと話し込ん

でいる。そのとなり、こちらを見下ろすエドマンドと視線が合った。

エドマンドが意味ありげに片目をつむる。刹那、シャルの血が沸騰した。

ブリュエー伯爵家を陥れ、没落の原因を作った王子――

怒りに支配され、魔力が漏出する。その顔面を、銅色の何かが打った。

「いたっ！　つくく、しっぱで顔を叩かないで！」

「落ち着け。再び英国民を敵に回すつもりか」

「シグムントの言う通りだ」

混乱した風の精を巧みに操り、オルガがこちらに飛んできた。

「既に正式な英国王でいらっしやる。それに、私怨に拘泥してるときではない」

「わ、わかってるわよ……　じゃあ試くけど、あの怪物は何なの？」

「何かは問題ではない。学院長は断絶結界の使用をご決断された」

「結界？　怪物を閉じ込めるってこと？　学院に？」

「そうだ。学院は間もなく市街地と切り離される。当然、その後は脱出不能だ。君も市民

を護衛しつつ、敷地外に退避しろ」

「その後はどうするの？　あいつに暴れ放題させるわけ？　冗談じゃないわ！　せつかく

再建した学院を壊されたら、税金の無駄じゃないの！」

オルガは目を丸くして――笑い出した。

「破壊魔で鳴らした（暴魔）が、いつの間にそんな愛校精神に目覚めたんだ？」

「む、む、昔の話を持ち出さないでよ……意地悪っ」

オルガは真顔に戻り、学院長の方をうかがいながら、シャルにささやいた。

「このまま結界内に留まれば、学院の秘密を知ってしまうかもしれない。学院長が世間に隠しておきたいような事実をね。君には家族がいるだろう？」

ぐっと詰まる。何か言おうとするシャルを、オルガは出口の方へ押し出した。

「さあ、行くんた。ソーネチカは私たちで何とかする」

「えっ……貴女は、戦うつもりなの？」

「私は金鬘機(きんそうき)の孫であり、貴女(きみ)だった。金鬘機襲撃(きんそうきしゅうげき)のきっかけとなり、学院を窮地(きうち)に陥れたのは私だ。その落とし前はつけたい。それに、私は学生総代だぞ？」

ふふっと、明るい表情で自虐する。

「護られてばかりでは立つ瀬がない。たまには、それらしいところを見せておくさ」
表情に迷いがない。オルガはもう、戦死を覚悟している様子だ。

彼女の襟(えり)さに胸を打たれ、同時に、シャルは深く己を恥じた。

「私は何をやってるのよ……身内可愛(みうちがひ)さに脅迫(きようはく)には屈(くつ)しない、なんて啖(たん)阿(あ)を切ったくせに、あんな麗女(れいじよ)の言いなりになって、身動きが取れない……」

「それは、考えあつてのことだろう？」

オルガは何の疑問もないという顔で、ほんととシャルの肩を叩いた。

「君は気高い人物だ。まあ、それがおかしな方向に発揮されて、周囲の迷惑となることも

あつたが。君は悪党に加担はしない。いずれ奴らの喉笛を食いちぎる」

それは、心の底から、シャルを信じきつた言葉だつた。

「今は耐える。そしていつか、連中に吠え面をかかせてくれ」

「待って——いくら貴女でも、一人でなんて無茶よ！」

「誰が一人なものか」

おどけた調子で剣をすくめる。その背後に、一陣の風が滑り込んできた。

フルブレートの甲冑をまとつた男子学生。甲冑は自動人形（スレイブニル）だ。術者が装着することで、直に魔力を供給でき、強大な魔術効果を發揮する。

オルガは少し鼻にかかつた声で、彼——ヴェイロンに言った。

「行こうか、ダーリン」

「……ああ。心底、健助だかな」

魔術回路（距離操作）を起動。二人は高速で走り去り、見えなくなった。

オルガが去ると、不意の静けさがシャルを襲つた。舞台に残っているのは、もうシャルだけ。観客の避難はスムーズに進み、客席もがらんとしている。

悔し涙をこらえるシャルに、シグムントがそつとささやく。

「行こう。時を無駄にするな」

「だけど……っ」

自分は成長したと思つていた。精霊術を得て、魔術師としても一度むけたと。

誇り高く生きようと決意した。彼のように、信念を貫いて行こうと。

なのに、このざまは何だ？

「おいシャルー 何やってんだ！」

聞き慣れた声が客席から降ってきて、シャルはあわてて涙をぬぐった。

——ああ、自分は何て現金なのだろう。彼の姿を見た瞬間、揺らいでいた心が決まってしまう。実に簡単に。とても、あっさり。

シャルは雷真に向き直り、訴えるように言った。

「手を貸して！ あのデカブツを善機から護るわ！」

3

学院のメインストリートを駆け抜けつつ、雷真はシャルの話を聞いた。

三姉妹は距離を保って併走している。シャルは馬ほどの大きさのシダムントにまたがり、びったりとなりにつけていた。

「要は、女帝さんがあれを手に入れようとしてる……ってことか？」

地下で見た光景を思い出す。雷真は一度、あの巨人と遭遇している。あのときよりも、かなり大きくなっていて、魔力の総量も桁違いに大きい。巨人が咆哮をあげるたび、命を吸い取られるような気がする。シャルもだいたいぶまいつているらしく、びっしり冷や汗を

かきながら、必死な調子で言った。

「そうよ。それに、変なことを言つてたわ。自分は灰薔薇シスマだつて」

「はあつ？ ソーネチカが、灰薔薇？」

さすがにそこまでは考えていなかった。三姉妹も不安げな目を向けてくる。

「ま……真偽のほどは插まえりやわかるな。一緒に身柄を抑えるぞ！」

「……怒らないの？」

消え入りそうな声で、シャルが言う。頼珍漢な覺言に思えて、雷真は眉をひそめた。

「あ？ 今度は何を言い出したんだ？」

「だって私、貴方に……敵対……っ」

「ごもる。なるほど、夜会のことを言っているのだ。」

「色々あるんだろうが、今は置いとけ。夜会がなくなつて困るのは同じだろう？」

「——そうね！ そうよね！」

元氣に戻る。普段通りの彼女を見て、三姉妹にも安堵が広がった。

「で、どうするの？ って言うか、灰薔薇はあの怪物で何をするつもり？」

「本人に訊け。あんな巨人、持ち出すだけでも大変そうだが——」

「雷真っ！」

小紫が鋭く叫ぶ。わずかに遅れて、雷真も脅威の到来を察知した。前方、巨人ギユネスがこちらを見下ろし、テニスコートのようなてのひらを向けている。

「夜々ー 跳べ！」

雷真はシグムントの胴に飛びつき、夜々が小紫といろりを抱え、左右にわかれる。次の瞬間、ストリートに石だたみが吹き飛んだ。

テーブルタロスを引きはがしたように、地面がめくれ上がる。破壊現象は左右に広がり、枯れ木をなぎ倒して、一帯を壊滅させた。

雷真はシグムントにしがみついたまま、激流にのまれた木の葉のように、くるくる翻弄される。三姉妹の方はさほどもなく、いろりが水のスロープを築き、着地した。

付近の校舎も屋根を飛ばされ、壁を崩される。それだけの被害を受けながら、炎も焦げ目も見当たらない。つまり、今の一発は爆発ではなく――

（純粋な衝撃力……ただの念動かよ!?）

「ラストーカノン！」

シグムントの背でシャルが叫ぶ。濁流のような光の帯が巨人めがけて走った。ギユネスはかわそうともせず、分厚い魔力の壁で受け止めた。

「魔防……!? 何て厚み――全然、届いてないじゃない！」

「シャル、高度を落とせ！ 野郎が次を狙ってる！ 小紫、こっちに――」

間に合わない。巨人の魔力が膨れ上がり、再び念動の波がきた。

いろりの氷壁が出現し、雷真を護る。戦艦の主砲にも耐えられそうな堅固さだったが、氷壁はたやすく粉砕され、大量の氷を降らせた。

砲撃の軌道がそれ、シグムントを外す。竜は爆風にあおられ、地面に墜落した。ここで八重葎が起動し、一同を巨人から隠してくれる。

ギエネスはしばらくこちらを見ていたが、やがて敵軍を鎮め、また咆哮をあげた。

雷真は脱力して、しがみついていたものにもたれかかった。

それはびくつと体を硬くして、震える声で言った。

「い、いつまでくっついてるのよっ」

「あ、悪い。何か妙に抱き心地がよくて」

「だきっ!? なっ……こっ……ふあっ……」

言葉になっていない。シャルが怒り出す前に、雷真はシグムントを降りた。

改めてギエネスを見上げ、その巨体、そして魔力に圧倒される。

「これは……勝ち目がねえぞ……」

次元が違う。先ほどの急動にしても、渾身の一撃ではなく、「軽く風を送った」程度の力加減に思えた。見た目通りの体格差があるとするなら、体積は数十万倍——魔力の差はもっとある。魔術師ひとりにどうこうできる存在ではない。

「あいつにとっちゃ、街を壊すなんざ、砂場遊びみたいなもんだ……」

「その比喩でいくと、私たちはせいぜい、巻き込まれるアリってとこね……」

「いや、シャルはミツパチくらの強さはあるよ」

「じゃあ、貴方はダンゴムシだわ」

「むー、シャルロットさんはアリジゴクですうー」

軽口を叩き合う。だが、誰も、くすりともしなかった。

目輪の式王子が可愛らしく思える。あれだけ魔力があるなら、雷真の（紅翼陣）を流し込んだところで、支配するのは不可能。おまけに、蘭国より利口になっている。あのときは、念動や魔防のような、高度な魔力運用をしなかったのに……。

（ひょっとしてもう……操られているのか……!?）

絶望感がのしかかる。露微の手に渡ったのなら、どうしようもないのでは？

「雷真殿……虚無石が間に合わなかったのではありませんか？」

と、いろりがためらいがちにささやいた。

「以前、火垂（ひたれ）が言っていたように、あの石が安全装置とか制御装置だったとすれば、それを失ったことで、設計者の予期せぬ状態に陥った可能性があります」

雷真は愕然（ごつぜん）とした。確かに、その可能性もある――

今、ギエネスは叫び続けているだけだ。あたかも哀歌のように、悲しげに。その嘆きが人類への怒りに変わったとき、都市は――英国は――世界はどうなる？

果たして、その未来を想像させる出来事が起こった。ギエネスが頭を抱え、力を溜（ため）める。そして、フラストレーションを発散するように、海に向かって魔力を投げた。

視神経を焼く青白い閃光（せんこう）。普通は淡い魔力の燐光が、閃光弾のようにぎらつき、水平線へと吸い込まれていく。その数秒後、海に壁（か）ができた。

巻き上げられ、消滅する海水。直撃ではなく、かすめただけだ。隅石が衝突したような風情で、あたりは衝撃波で蹂躪され、市街地を強風が襲った。

シャルの超特大ウスターカノンに見劣りしない。角度によっては、マン島が消えていただろう。たかが念動で、だ。

暴風が収まっても、雷真の身体は震えていた。巨人が自力で暴れているにせよ、灰塵の手に落ちたにせよ、こうなってしまった責任は俺に……。

「あれが……神性機巧なのね」

ふと、シャルがそんなことをつぶやいた。

「……神性機巧？ あんな化け物が？」

「だって、そうでしょう。あいつはどうやら人造物——なのに、魔力を外に放出してる。

それに、ソーネチカが言ってたの。「神性機巧、誕生のときだ」って」

「……いや、違う。硝子さんが言うには、神性機巧は「あちら側」の存在で、俺たちとはつきり違うらしい。あいつは確かに化け物だが、まだ倒す方法はある……絶対！」

あつてくれ。そう念じながら、考える。どうすれば、あいつを止められる？

エヴァの絶対王権で——いや、駄目だ。無敵に思える絶対王権も、雪月花の自我を止めることはできなかった。あのレベルの怪物に影響は与えられない。

滅元素も氷面鏡も金剛力も、すべて魔防で阻まれる。魔術で張り合っても無駄だ。では、魔抗銀の砲弾でぶつ飛ばすか——いや、そんなものは手元がない。

そのとき、頭上で白い光があふれ、真昼のように明るくなった。

「照明弾だわ！ オルガ——いえ、警備かしら？」

雷真の脳裏に希望の光が閃く。そうだ！ あいつの弱点は光じゃないか！

怯んでくれと願う。だが、期待に反して、巨人は照明弾にはまったく反応しなかった。

雷真と同じ失望を感じたのか、小紫が唇をとがらせる。

「全然だめだね……おひさまくらい強くないと、だめなのかな？」

「それだ！ でかした小紫——」

「えっ？ なにっ？」

雷真は小紫を抱え込み、その小さな頭を撫でくり回した。小紫は嫌がって逃げようとし、夜々は「あ——」と井轡の声をあげ、シャルは謎の怒りをみなぎらせた。

「誰にでもするのね、そういうこと……！ さっきの返して！ 取り消しなさい！」

「意味わかんねーこと言ってるな！ 作戦を聞け！」

夜々とシャルに小突かれながら、早口でプランをまくし立てる。

しばし、少女たちは絶句していた。おそろおそろ、いろりが口火を切る。

「雷真殿、それはいささか……無茶がすぎるかと」

「他人事みたいに言ってるな。レンズを造るのにおまえの力が必要だ。小紫、おまえの力もあるぞ。あいつの攻撃を一発でも食らえば、俺たちは即死だ」

「う、うん！ がんばる……！」

「雷真、夜々は？ 夜々はどうすればいいんですか？」

「——おまえは俺と一緒にこい。灰薙を止める」

「はい！」

夜々が竊しそくに手をあげる。雷真は胸の痛みを覚えたが、今は相棒を信じるしかない。雪月花が手元に一体も存在しなければ、魔女と戦う手段がない。

「シャル、こいつを持って行け」

イオネラの通信用イヤリングをシャルに押しつける。

「それでイオと会話ができる。最短距離の選定と角度の計算、教授さんにやってもらうぞ。それから、出発前にオルガとヴェイロンを呼び戻してくれ。できるか？」

「まあ、たぶん……オルガも精霊の声が聞こえるから——って、押しつけすぎよ！ その計画、私を酷使しすぎじゃないっ？」

「おまえを信じてる。おまえにしかできない」

真正面から殺し文句を言う。シャルは赤面し、ぶつぶつと文句を言った。

「貴方って……やっぱり……スケール違いの……ジオメトリック・バカ！」

夜々は耳聴く聞きつけ、したり顔でうなずいた。

「それでこそ、夜々の旦那さまです♡」

「えっ？ 貴方たち、ついに結婚したわけ？」

シャルの声が裏返る。シグムントが噴き出し、皆がそれに釣られた。

「じゃあ行くぞ、出たとこ勝負だが——毎度のことだ——」

激しい喉の渴きを覚え、キンバリーは目を覚ました。

水音がする。見れば、艶やかな着物姿の女性が、洗面器でメスを洗っていた。

「……腕が無事なら、あのメスも武器になったんだがな」

「あら、お目覚めね。ご気分はいかが？」

碩子が気付き、水差しを向けてくれる。キンバリーは喉い口から直接飲み、渴きを潤した。麻酔で朦朧とした頭で、置かれた状況の把握に努める。

そこは冷え切った牢獄だった。目につくのは粗末なベッド、鋼鉄製の鉄格子。やはり、灰善藏に拘禁されている。高熱が出ているらしく、焦点が定まらない。

（あの方は……ご無事なのか……？）

視線を走らせ、姿を探す。鉄格子の外、向かいの房に、金髪の美少年が囚われている。相変わらず穏やかな表情で、何を考えているのかわからない。

外傷はない。灰善藏はまだ、彼の正体に気付いていないようだ。キンバリーは安堵の息をつき、己の右腕——が存在していた部分を見つめ、喪失感に苦笑した。

「金善藏とやったときですら……失くさずに済んだのにな……」

「敗血症の怖さはご存知でしょう？　こうしないと命の方を落としていたわ。しばらくは幻肢痛が出るだろうけど、まあ、気を強く持って頂戴な」

「他人事のように……」

「親身になって欲しい？」

キンバリーはそつとかぶりを振った。それから、なじるような調子で言う。

「……せつかく逃がしてやったのに……戻ってきてしまったな」

「だって先生、私を逃がすために插まったのでしょう。後味が悪すぎるわよ」

「貴女が戻ってしまったせいで……私の腕も、無駄な損失になった……」

硝子は目元をなごませ、優しく微笑んだ。

「なら、お詫びをしなくちゃいけないわね。生きてここを出られたら、新しいのをつけてあげる。協会が禁忌に指定している技術でね」

「それはまた……譴責を食らいそうだな……刺き腕に比べれば、安いものだが」

笑ってしまう。痛みに顔をしかめたとき、キンバリーは異常な魔力を察知した。

「この馬鹿げた波動——まさか、ギユネス……!?」

「ギユネス？　ああ、先生がずっと探っていたものね」

「……私が探っていたのは、神性機巧の研究だよ」

「同じことでしょう。学院長はあれをそれにしたいのだから」

「……貴女は番人の陣団にいたのだったな。では……隠すこともないか……?」

向かいの房をうかがう。キンバリーの視線に気付き、少年は純真そうな笑みを返した。実に白々しい。キンバリーは頭に来て、出てこすりのように真実を語った。

「あの巨大な人影を、学院は（ギユネス）と呼ぶ……」

「人造靈魂の集積体。人類が己に似せて造り出した、次の人間」

「……そこまでご存知なのか。やはり、虚無石は貴女の手に？」

「坊やが最初に地下に落ちたとき、坊やは無数の視線を感じたと言った。やがて実験施設とわかり、徘徊する魔物と遭遇し、果ては寶石を取ってきた。これだけ条件がそろえば、ラザフォードさんの狙いも見えようというもの」

二人の視線が交錯し、声が重なった。

「原罪の完遂」

キンバリーはもう否定せず、寝たまま首を縦に振った。

「人間がエデンとやらを放逐されたのは……知恵の実を食べたから……だという」

「この上、生命の実を食べれば、神と等しいものになる」

「そうだ。不老不死の生命力……それは無限の魔力と言え換えてもいい。そして魔力とは、人間の自我が生む（靈魂）のきらめきだ」

「靈魂とは、本当に実在するものなの？」

「わかるはずもないよ……だが、魔術師は合理主義でね……わからないなら、わかるものに置き換えればいい。靈魂ではなく――」

「自動人形の自我……」

ギユネスとはつまり、人工の自我を集積し、魔法生物へと収斂させたもの！

「人類はもう人形に自我を与えられる……だが、それは人間より弱く、魔力を生まない。ならば、大量の自我を圧縮し、強めてやればいい。……実に、初等教育なみの発想だ。そうしてできたのが、ギユネス……あの怪物だよ」

「地下をうろつく魔物というのは？」

「収斂の過程ではみ出した……なりそこないの余剰品だろうな……」

硝子は呼吸を止め、ゆったりと頭を上下させた。

「雲石とは、靈魂をひとつにつなぎ留める（要）の石だったのね」

「そうだ……虚無石を核とし、空間全体を巨大なイブの心臓に見立てた……」

「途方もない話ね。馬鹿げていると言ってもいい」

「それを実際に試してみるのが……あの男の恐ろしいところさ。そして実際、巨大な靈魂構造体ができた……高位の現象精霊を、あごで使えるレベルのね……」

「それはもう人形ではないわね。そして魔法生物でもない。だって、きちんと人間の自我を持つのでしょうか？」

「ああ……だが、本物の人間でもない。肝心の肉体が……ないからな」
まだ神性技巧とは言えない。硝子のひたいが、さっと翳った。

「もし（受肉）したら、どうなるの？」

「ボディを与えたら、ということかね？」

硝子は焦れつたそうにうなずく。キンバリーは質問で返した。

「現代生体機巧の第一人者たる貴女に訊くが……およそ百万人ぶんの魔力を体内に収め、なお自壊せず耐えられるような……強靱なバイオロイドが、可能かね？」

「百万——いえ、それは、私にはできないわ。だけど、負荷を分散する方法があるのかも知れない。魔剣の電が異空間を利用しているように。それに……」

硝子は一瞬、躊躇した。だが、秘密を明かしたキンバリーに、自分も忍えようと思つてくれたのだろう。意を決した様子で、秘密を口にする。

「私が造つた子たちは、進化する」

「……」

「雪月花の魔術回路はすべて、（相転移）の真理に換つてゐるの。あの子たちは使い手の生命を奪い、それを己に組み込んで、己の（相）を売買させて行く。夜々がもう自動人形の枠に収まっていけないことは、貴女もご存知でしょう？」

最初の魔術噴い騒動のとき、キンバリーは既に目の当たりにしている。禁忌人形というだけでは説明のつかない、夜々の爆発的な魔力の高まりを。

「無機物とは違い、精神には進化に堪える柔軟性があるわ。……実際には、思った通りにはいかなかったけれど。もし上手くいってれば、いずれユートリッド空間、物理法則の境界を超え、あちら側の存在になったはず」

そうならば、そのボディは物理的な限界にとらわれない。

壊れない。決して、傷つくことがない。

そういう存在ならば、ギネスの自我と魔力を身の内に宿せるかも――

「……その心配はないだろう？ 貴女にできていないことを、現時点で実現している者がいるとは思えない。いるなら、噂くらは聞こえてきそうなものだ」

「そうね……協会はずっと、舊敵を監視していたのだからね」

お互いに胸騒ぎが消えない。両者とも、己の無力を噛みしめている。

「――ここを出しましょう。うちの子たちが心配だわ」

「地上には……千人近い魔術兵がいた。魔敵らすのはとても不可能だ……。貴女に万一のことがあれば、私がいづらに憎まれる」

「では、ここで朽ちて行くのを待つだけ？」

「……貴女は手ぶらで戻ってきたのか？ とつくに仕込んでいると思ったが？」

「先生こそ、お仲間を呼んであるのでしょうか？」

無鉄砲を絵に描いたような女性を思い出し、キンバリーは可笑しくなった。

「呼んではいけないが……じきに鉄砲玉が飛び込んでくる」

「そう。魔王さまほどじゃないけれど、私にも腕の立つ護衛がいるわ。あの坊やに向こう見ずのお手本を見せた人よ――こんなふうだね」

鎧子の言葉が終わると同時に、通路の向こうで天井が落ちた。

地上への穴があき、外の冷氣と砂はこりが流れてくる。

「いやあ、今夜は冷えますねー」

白い息を吐きながら、人影は廊下に降り立つ。軍刀を右手にぶら下げた、和装の男。彼はマフラーに顔をうずめ、ぶるぶる震えながら言った。

「こんな日は熱燗でキエツといきたいものですが——一緒にどうですか？」

「残念。お酒の持ち合わせがないわ」

「でしたら、長居は無用です。とつとと帰るとしましょう」

「この……愚か者が——」

雲雀の後ろから、誰かの蹴りが飛んできた。

雲雀が泥手に吹っ飛び、ごろごろと床を転がる。今さら警報が響き渡る中、彼はさして痛くもなさそうに、後頭部をさすりながら立ち上がった。

「いたた……何するんです、いきなり」

「こちらの台詞だ阿呆！ 灰十字の突入作戦を台無しに——と言うか、また貴様か！」

「奇遇ですねー。私もまったく同じ台詞を言おうとしました」

「単騎で突っ込むとは……イカれているぞ。自殺志願者か？」

「よく言われますが、それほどおかしい行動でもないと思いますよ。手助けくらいはしてやりたくありません。私は雷真の親代わりですからね」

「親代わり——そうか、日本にいた頃、あいつが頼っていた……」

グリゼルダは急にもじもじして、赤面しながらこう言った。

「お、お義父さま……その……頼みがあるのだがっ」

「足蹴にしたくせに？　と言うか、お義父さまとは一体」

「ふつつか者だが、私はこれで魔王だし、狭いが土地もあるし、嫁ぎもある。だから息子さんを嫁にくださいー　間違ったー　嫁ではなく婿にー」

「いい加減にしろ、ゼルダ……君も大抵、阿呆だぞ……」

キンバリーの弱々しいツツコミで、グリゼルダもこちらに気付いた。

「女史——腕を——？」

「大丈夫だ……が、運んでくれると助かる。早くのが……つらいんだ」

「わ、わかった。ステイグマ、女史の搬送を」

機械天使の一体が盾に姿を変え、担架代わりとなる。キンバリーは苦痛にうめき、

「やれやれ……後先考えない突入のおかげで、騒がしい婚宅になりそうだ……」

霊雀の落とした穴や、その奥の通路から、無数の足音が響いてきていた。

「もつとも……あちらに同情したくなるがね」

突っ込んでくる一団を、魔王と剣鬼が一刀のもとに斬り伏せる。

どちらの斬撃も魔物を帯びている。壁が裂け、数十メートル先まで亀裂が走った。

せめて開けた戦場ならば、あちらは包囲戦術で敵の有利を生かせたはず。だが、広くもない地下道では、ただ斬られるだけの標的と化す。

やがて、背後の石壁から、黒コートの魔術師が這い出してきた。

「すまない、鶯の同胞。二日間、不便をさせたな」

金の瞳の魔術師がキンバリーに頭を下げる。キンバリーは皮肉を言った。

「まったくです……。貴方はどの方が、部下を見捨てて逃げるなど……」

「そう言うな。救出作戦を練っていた」

「それが間に合わず、ゼルダに強攻させたわけですか？」

痛いところを突かれたらしい。山鳩は激面になった。

「まあ、結果的にはそうだった。手に負えないな、君のかつての教え子は」

「彼女は若いですからね……」

「待ってくれ濡れ衣だ！ 私ではなく、その愚かなサムライが！」

グリゼルダが抗議する。だが、戦闘の最中なので、それ以上の言い訳ができない。

魔術師は金髪の美少年を見て、安堵したようにうなずいた。

「……よく護ってくれたな、鶯の同胞。君の手柄だ」

「どちらかと言えば……護られたのはこちらですよ……」

硝子が不思議そうな顔をする。そして、何かに思い至ったように、少年を見た。

砲弾を浴びた車から、硝子と、キンバリーと、この山鳩を救出してくれた者。

あれは転移の魔術だった。遠方から即座に展開し、砲弾より速く、一回をこの建物へと

移動させた。どう考えても高位の大魔術であり、誰にでも扱えるものではない。

あれをやつてくれたのは、まさか――

「お理えが遅くなり、大變申し訳ありません、我らが教父（時の翁）」

少年の前にひざまずく。少年は子どもの悪戯を叱るように、笑つて言った。

「言つてしまいましたね、山鳩。滅体ものですよ」

グリゼルダが哑然として振り返る。硝子もまた、呆然と少年を見つめた。

「……ああ、聞こえますね」

少年は天使の笑みを浮かべ、目を閉じ、はるか遠くに耳を澄ます。

「玉座に続く階梯を、昇る子どもの足音が」

5

私は一体、何者なのか。そんな問いが、何度も浮かんでは消える。

皇女として生まれ、宮殿で暮らした日々は、ありありと思い出せる。当時を知る人々も大勢いるし、宮殿に戻れば侍従たちも、皇帝自身も、証言してくれるだろう。

何より、忘れたくても忘れられない、つらい記憶がある。

この手が護れなかった、五千を超す命。

傷ついた者は一万を超す。彼らの裏切られたような顔、失望に満ちた視線は、今なお夢に見てしまうほどだ。あれが偽りのはずはない。

ソーネチカは今、巨人の体内にいた。

はつきり、強い。指で虫をつぶすような気安さで、何もかもを破壊できる。

「うるさいね、ソーニャ。まだ自我があるのかな？」

自分の口がそう言う。ソーネチカはぼんやり念じた。

（おまえは、何者……ですの……？　なぜ、わたくしの体を……奪って……）

「そうじゃない。教えてあげたじゃないか。君が灰薙（ハゲ）シスマだ——ほら！」

ソーネチカの意識の奥底から、膨大な記憶がよみがってきた。

浴びるほどの血、血、血——目まぐるしく変わる風景、おびただしい死体の山に、嘔吐（おうと）

きそうになる。シスマは残忍な魔女だった。多くの人間を殺めて生きてきた。

シスマは口を押さえ、引きつった笑い声を漏らした。

「おっと、ごめんごめん。楽しいことばかり思い出してしまったよ。だけど、これが全部

じゃない。君の人生は、君が思っていたより、うんと長いもののさ」

実際に記憶をさかのぼり、証拠を見せる。礼拝の風景、かしづく教徒たち、貴族たち、

農奴たち——掘っても掘っても、記憶の井戸が枯れない。記憶は百年以上ある——

自分という存在が崩れる。頭をかきむしって叫び出したい。だが、あいにく、この肉体

は既にシスマの支配下にあり、ソーネチカには指を動かす自由すらない。

「だから、それは違うんだよ。私は君の体を奪ったわけじゃないのさ」

（おまえの妄言など……知りません——帝政を揺るがす悪徳の魔女め……おまえになど、

屈しない……この体、返してもらおう……！」

「すべては道だよ。私の体を君に貸してあげていたのさ！」

一瞬、時間の流れが止まったような気がした。

脈が速くなる。それがシスマのものなのか、自分のものなのか、わからない。

「ソーニヤ。君は本当に、生まれたときから皇帝の娘だったのかい？」

（戯言を！ わたくしには、宮廷で過ごした記憶があります！）

「そうだろうね。でも、赤ん坊の皇女を殺して、すり替わったんだとしたら？」

ソーネチカの自信が揺らぐ。シスマはその頬を撫で、楽しげに続ける。

「次の質問。このあいだ、君が祖国に戻らず、バルト海にとどまったのはなぜだい？」

（それはもちろん、学院への……未練があったから！）

「今日の、この瞬間のためさ。君がライシン・アカバネを側に置いたのはなぜ？」

（おまえの襲撃があったからです！ 護衛のために！）

「運だね。夜会で彼を利用するため、敵対されなかったため、わざわざ部下に襲わせたのさ。」

彼は本当にわかりやすい、扱いやすい男だったね！

シスマは胸に手を当て、魔法円から石を引く張り出した。

「不思議だとは思わなかったの？ この虚無石を都合よく君が持っていたこと。同じものをラザフォードが持っていたこと。これは本来、世界にたった二つしかないのにさ。西方がラザフォードに渡すと思う？」

(……………)

「つまり、学院にあったのは東方の石——じゃないのかい？」

石をつかみ、自分自身を抱きしめて、シスマは体をくねらせた。

「ラザフォードに石をくれてやったのはこの私——これは本当さ。実に上手くできてゐね。私が望んだ通り、ラザフォードはアンドロギエネスを造ってくれた。命令したわけでも、頼んだわけでもないのにね？ 親切だね？」

つまり、この魔女は、ラザフォードを利用した……。

「この肉体は真円の完全体——もうすぐそうなる。そうしたら、無限の魔性——すなわちギエネスとひとつになれる。ほら、人類種の超克だよ。何ができる？」

真円？ 無限の魔性？ 一体、何の世迷言だ？

わからない。わからないが、わかっていることもある。

(この怪物を、己に取り込むつもり……ですのね)

この巨人の力を、我がものにする。既に、その何割かは吸収できている。魔女が巨人の体内で大人しくしていたのは、(融合)の完了を待っているからだ。

「可笑相だね、ソーニャ。君の人生なんて、人形が見た、はかない夢だ」

すべて灰薔薇の脚本通り。ソーネチカの半生など、作り物の幻影にすぎない。

(わたくしは、オルガと……競い合つて)

「ほかの誰でもなく、金薔薇の孫を敵視した理由が知りたいかい？」

（わたくしは……戦いを愛して……！）

「私も戦いは大好きさ。骨の砕ける音も、断末魔の悲鳴もね」

（魔王マダマになって、帝室の権威を取り戻そうと……っ）

「そうそう、これも本当なんだけど、あの素敵な（目曜日）を演出したのは私だよ　誰か
が一度でも発砲すれば、歯止めがきかないのはわかってたからね！」

ソーネチカの心を支えていた、大切に守り続けてきた何かが、音もなく崩れた。
ずっと——己の罪を、贖あがないたかった。

遺族の悲しみに、報いたかった。

死んでいった者たちの死を、無駄にしたくなかった。その家族に、手を差し伸べたかつた。万人に受け入れられる女帝となって、私が国を変えたかった。

そのためだと思えば、どんなことにも耐えられた。

はかならぬ民衆の呪詛のろみにも、折れなかった。襲撃の恐怖など大したことではない。実際に私の前で命を落とした、彼らの痛みに比べれば……！

そう思って、耐えてきたのに。

体の中でただ一か所、綻隙だけが、ソーネチカの意志に答えてくれた。

涙の粒が盛り上がり、視界がにじむ。

何が女帝だ。最強の女だ。ソーネチカ・スニートキナというのは、所詮は虚構こころづかいの存在。演じるための（役）であり、ペテンにかけるハリボテだ。

大切にしていた記憶も、好敵手たちへの敬意と敵意も、すべては偽り。

学院で過ごした日々も……彼と過ごし、つかの間に感じた安息も！

とめどなく涙があふれる。だが、ギユネスの黒い体の中では、それは誰の目にも触れはしない。誰も私を救えない。すべては終わり、私は灰燼^{はいじん}に帰る——

と、そう思っていた。

「大した魔法さまだぜ。いきなり出てきて黒幕ツラかよ」

などというふてぶてしい声が、ギユネスの外側から聞こえるまでは。

ソーネチカとシスマの感情が、この瞬間だけシンクロする。

信じられない。一体どこの馬鹿者^{ばかもの}が、このギユネスに挑んでくる？

「大ボス気取りの魔法に言つとくがな、何ひとつ、一切合切、女帝の涙一滴に至るまで、てめえの思い通りにはさせねえ！」

あれだけ饒舌^{じょうぜつ}だったシスマが、雷真^{らいま}に対しては無言でこぶしを振り下ろした。

ギユネスの鉄拳で地盤^{ちばん}が陥没^{くわんぼつ}し、闘気^{とうき}泉のごとく土砂が噴き上がる。雷真は相棒と一緒に吹き飛ばされ、しかし空中で反転し、体勢を立て直した。

シスマがさらに殴る。だが、とらえたはずの雷真に直撃せず、消えてしまう。

「おいソーネチカ！ その巨人を止めろ！」

雷真が叫ぶ。シスマはさらに攻撃したが、雷真には当たらない。魔力の奔流^{ほんりゅう}で八重霞^{やよぐさ}は簡単に壊せる——が、すぐに新たな幻覚が補充され、位置をつかませない。

シスマが焦れ、思わずと言ったふうに叫んだ。

「私は灰薔薇——灰薔薇シスマだ！」

「違う！ そいつはソーネチカ・スニートキナ——ほかの誰が違うと言っても」

暴風に飛ばされながら、雷真が夜空を示す。

「お天道さまが、見てんだよ！」

刹那、天から光が差し込んだ。

ギユネスを照らす。それだけで、ギユネスのボディが蒸発し始めた。

ごっそりと魔力が減る。シスマは不機嫌になり、急いでギユネスを退いた。

巨体に見合わぬ身軽さ。これだけの魔力があれば、念動で素々動けるのだ。しかし、光は角度を調整し、あくまでギユネスを追尾する。

学院はそろそろ断絶結界に包まれているはず——その壁を抜けてくる以上、これは魔術の光ではない。もちろん、照明弾でもない。光は残照のようなオレンジ色で、光源はどうやら水平線の向こうにある。つまり、これは……。

「日光だって……!? 日没から四時間以上が経過しているのになっ？」

魔女が瞠目する。何千キロの後方、昼の世界から引く張ってきた……!?

ソーネチカは頭の中で計算した。日没が四時間前。経度にして六十度ほど。機巧都市の緯度は五三度で、地球が一週四万キロ。南下すれば日の入りは遅くなる。おそらくシャルの（鏡）が光を集めているのだろうが、シグムントで行ける距離ではない。

そもそも、どうしてギユネスを追尾できる？ 水平線の向こうからでは、射角の微調整ができないはず。距離を縮めた？ 誰が？ 照準を合わせている？ 誰が？

知っている魔力の波長が、ソーネチカの頬を撫でた気がした。

（この感じ……オルガ……！）

姿は見えないが、好敵手の魔力を感じる。光の精霊を駆使し、光を偏向させているらしい。それで、ソーネチカは仕組みを把握した。

はるか遠方で、シャルロットが日光を集め、この都市に向ける。そこまで移動できたのは、距離操作の魔術を用いたから。そうして届いた光をオルガが調整し……。

彼らの総力を結集して、巨人に浴びせている――

シスマもソーネチカの思考を読み、状況を把握したようだ。

魔女が退路を探す。結界を破壊して離脱する……のはナンセンス。市街地では光を避けられない。地下の大空洞へ逃げ込んだ方がマシだが、地下はギユネスの張りかこ――抑え込む仕掛けがあるはずだ。

ギユネスの魔力はどんどん削られ、既に体はひと回り小さくなっている。

一刻の猶予もない。最善の手段は、やはり攻撃――

魔力を圧縮し、日光が差す方角を狙う。（魔砲）とも言うべきそれが、断絶結界を紙のように破いた。そのまま光の発生源を破壊――できない。

日光は相変わずギユネスを焼き続けている。苦痛に耐えかね、制御を離れて暴れそう

になる怪物を、シスマは魔力を高めて強引に押さえつけた。

「またヤエガスミか……忌ま、忌ましい！」

舌打ちをひとつ。周辺を吹き飛ばそうと魔力を集中した一瞬、ヴェイロンの（必殺技）がきた。不意打ちで反応が遅れ、強烈な閃光が巨人の背中にぶち当たる。

巨人の肌は貫けない。だが、意識はそちらに向く。ギユネスの魔砲が距離操作を上回る速度でヴェイロンに殺到し、はるか彼方へ弾き飛ばした。

直撃の直後の、その精神的空間に、紅翼陣の糸が突き立った。

ギユネスの支配が目的ではない。ボディをすり抜け、シスマの胸に当たる。

比喩ではなく、蚊のひと刺し程度のか弱さ。これではシスマを止められない。しかし、たとえば球技において、相手の保持するボールを指だけで弾けるように――

この弱い力でも、魔石を胸から弾き出すくらいは、可能だった。

シスマの胸から石が飛び出し、ギユネスの体外へ落ちて行く。遠端にギユネスの制御が乱れ、魔力が暴れ出した。体内にとどまれない。つぶされる！

魔防で身を護ると、異物が排出されるように、シスマが巨人からはみ出した。

「今だ、夜々！」

雷真の指示に従い、乙女が猛烈な蹴りを放つ。その一発で、ギユネスから完全に蹴り出された。シスマは巨人に見切りをつけ、己の武装を呼び寄せる。

「っ——こい、ウロボロス！」

大蛇が足もとに滑り込んできて、シスマを受け止める。装甲が黒く変化し、血管のような、紅い魔力の走路ができていた。

その大蛇の背を、夜々が駆け上がってくる。魔術で連撃——は、間に合わない。シスマは急動で尾場を固め、夜々に掌打を繰り出した。

当たってもいないのに、金剛力を持つ夜々が吹っ飛ばされた。

こんなものは魔術ではない。ただ、ありあまる魔力を叩きつけただけ。

(いけない……わたくしの肉体にはもう、巨人の魔力がかなり移ってますわ！)

夜々はストリートに叩きつけられ、石畳を滑った。大蛇が追い打ちをかけ、尾で夜々をすくい上げる。空中に打ち上げられた夜々をさらに叩き落とし、滅多打ちにした。

そうして猛攻を加えながら、シスマはちらりと雷真を見た。

相棒がやられるのを、雷真は決して傍観していたわけではない。

紅翼陣の糸を十本、全開で放出している。そのうちの一本は夜々に、残る九本はすべて

大蛇に注ぎ込まれていた。それでも、大蛇の動きは鈍らない。

シスマの素の支配力に、秘術（紅翼陣）が押し負けている。

やがて大蛇の舌が槍のように伸び、強烈な魔術がまとわりついた。

灰色の魔力がギラつく銀の輝きを帯びる。これはたぶん、金剛力を貫通する！

夜々がふらふらと立ち上がる。舌が彼女の胸を貫く寸前、紫電が走った。

眼球から下顎にかけて、大蛇の頭部が撃ち貫かれる。大蛇は的を外し、地面をガリガリ

倒りながら、校舎の方へと転がっていった。

舊蔵の魔女も、光速で動けるわけではない。予期せぬ雷電には反応できなかった。

（この稲妻、アスラ……!? いえ、そんなはずは……）

アスラのインドラは破壊されている。だが、雷真には誰の仕業かわかったようだ。彼は口元をゆるめただけで、背後を確かめようとしなかった。

ただ正面のシスマをにらみ、己の全身全霊を懸け、魔力を燃焼させる。

圧倒的な差を見せつけられ、相棒を叩きのめされても、まだあきらめていない。

ソーネチカの心を羞恥が満たし、同時に、どうしようもなく熱くなった。

（あきらめない……わたくしも!）

気力を振りしぼり、肉体の主導権を奪い返そうとする。シスマが気付いて何か言おうとしたが、夜々の凄まじい蹴りがきて、それは叶わない。

「ソーネチカ! 聞こえてるんだろ! そのまま聞け!」

魔女の攻撃をしのぎながら、雷真が叫ぶ。

「思い出せ! ロマーシニコフがおかしくなったとき、紅翼陣でも解除できなかった――が、大尉はすぐに元に戻った!」

彼は何を言いつけたのだろうか? ソーネチカは必死に耳を澄ます。

「あんたがフレイに（火炎魔術）を使ったとき、どうやって元に戻した? 魔術回路が変わっちゃってるのに、元には戻せないよな?」

いや、それは簡単だ。(因果性置換)がなくとも解除はできる。

「そう、『一定時間で切れる』んだろ？　そして効果は『思いのほか短い』」
 こちらの思考を読んだように、雷真が言う。うなずけないのがもどかしい。

「だったら、おかしいぞー あんたがもし『変えられて』いたなら、どうして途中で効果が切れなかったんだ？　魔術をかけ直した？　自分で？　何年も——何度も？　俺はそんなの見てねえ！　つまり！」

そして、ソーネチカがもつとも聞きたかったことを、

「あんたと医善哉は、別人だ！」

彼は言ってくれた。ひと癖りの迷いも感じさせない声で。

「あんたは思い込んでるだけだ。相手がテオレインを使つたと。だが、それは合理的じゃない。魔術師なら真っ先にこう考えるよな？　まったく別の——」

自分の知らない魔術が、存在するのではないかと。

たとえば、医善哉の魔術が、ソーネチカより上位の大魔術なら、どうだ？

過去を(回想)させるばかりか、別の事象に(改変)できるなら？

ソーネチカに対して、シスマは雄弁だった。あれだけ熱心に、ペラペラと、己の策謀を語ってくれた。その一方、雷真に対してはほぼ無言。あれは誇大妄想を持つ者に特有の、聞かず語りの演説ではない。

(言葉を尽くして、わたくしを納得させようとした……)

では、ソーネチカが認めない限り、この改変は成立しない？

その読みを裏付けるように、シスマは雷真に反論した。

「憶測まみれのご高説をありがとうございます——だけど、無駄な努力だね——虚無石の矛盾をどう説明するつもりだい？　ラザフォードとソーニヤが持っていたのは、同じ石——」

雷真が手を開く。指と指のあいだに、四つもの魔石がきらめいていた。

「あの狸親父は、とつくに量産してんだよ！」

魔女の動揺を見逃さず、雷真は覺み掛ける。

「おい女帝——あんたは誰だ？　どこにでもいる、か弱いお姫さまか？」

シスマが雷真の首をもぎ取ろうと手を伸ばすのを、夜々が横からつかんで止める。そのまま力比べに持ち込み、身動きを封じた。

相棒の背中に手を当て、支えながら、雷真はシスマの瞳をのぞき込む。——いや、彼は

シスマの中に囚われた、ソーネチカを見つめているのだ。

冷え切っていた手足に、熱い血が通うような気がした。

（……ありがとう、異国の友よ）

シスマの唇が、ソーネチカの声でつぶやく。

「わたくしは……ソーネチカ……」

「そう——そうだ——」

「水帝アレクセイの皇女にして——女帝を目指す者ですわ！」



瞬間、弾け飛ぶように、体が二つに分離した。

磁石の反発のように、シスマとソーネチカ、二人ふんの体が大地に転がる。同時に魔力がどつと逃げ、ギユネスから奪ったと思われる、魔性の大半を失った。

雷真の推測は、間違つてはいなかった。

過去の再帰でも何でもなく、二人は別人。それを妙な魔術で強引に融合しようとしていただけだ。分離と同時にギユネスの魔性を喪失したということは、そもそも二人の融合が、ギユネスの負荷に耐えるため必要だったと考えられる。

身を起こし、相手の姿を確かめて、驚く。

「……年増じゃねえかよ」

という雷真の感想がすべてだ。衣装と髪形はそっくりだが、大人の色香がありすぎて、とても少女とは言えない。先ほど自分の顔だと思つたが、それは魔術の作用。思い返してみれば、「これは私だ」と思い込んでから、視覚が影響を受けた気がする。

シスマは荒い呼吸を繰り返しながら、からみつくような視線を雷真に向けた。

——怒っている。ひたいに青筋が隆起して、凄まじい形相だ。

雷真は醒めた眼をして、シスマを見下ろした。

「寂れなもんだな。善哉の大魔女さんが、学生相手に大苦戦とは」

「大苦戦……私が？」

「そうだろ。あんな怪物を持ち出して、俺の友達を人質に取って、大演説をぶった挙げ句、

全部コケてんだ。言っちゃ悪いが、相当のヘタレだな」

魔女は挑発には乗らなかった。——とつくに、怒り心頭を発しているからだ。だが、怒りで言えば、雷真も同じくらいに、怒気をはらんでいる。

「行けるか、夜々」

「もちろんです！」

「……上等。ヘタレの魔女をぶっ飛ばす！」

それこそ真円を描くように、夜々と雷真が左右から襲いかかる。シスマは夜々の魔りを素手で受け止め、眼力だけで雷真を吹っ飛ばす。ソーネチカとの融合が解け、ギエネスの魔性を失くしてなお、魔女の力は雷真を上回っていた。

本来ならば、相手にもならないのだろう。だが、ソーネチカにはこう思える。

仲間、背を押され、魔女の策謀を上回り、相棒と意志を同調させた彼が――

「負ける道理など、ありませんわ！」

黒い大蛇が、ヨルムンガンドに尾をぶつけてくる。ソーネチカはとつきに牙で受けさせ、お返しに尾を見舞った。それが大顎で止められて、二頭はもつれた毛糸のごとく、互いの尾を噛んだまま暴れ回った。

暴れ回る二頭の蛇が、弾みでシスマにのしかかる。

当然、魔女は把握している。だが、夜々が大蛇の頭部に乗っていたことには、この瞬間まで気付いていなかった。

夜々が黒い大蛇を粉砕して跳躍、シスマの腹に蹴りを叩き込む。

魔女が体を（く）の字に折る。突き出された下顎を、夜々は思い切り蹴り上げた。シスマは上空へ打ち上げられ——そのまま、二度と落ちてはこなかった。

上空でバラバラになったのか、どこかに逃げたのか、それはわからない。

力を使い果たし、雷真が前のめりに煩いでいく。夜々があわてて受け止めた。

「雷真——すっかりしてください——」

その相棒を、雷真が抱きしめる。強く、強く。彼女の鼓動を確かめるように。

「ありがとよ、夜々。おまえはやっぱり、世界一の——相棒だ」

夜々は雷真の背に手を回し、誇らしげに微笑んだ。

（……本当に、お見事でしたわよ、二人とも）

ほぼ一対一で魔女を制した。これほどの人形使い、召し抱えたいと思うのは当然だろう。

ソーネチカも今、狂おしいほど、彼を手に入れたと思うっている。

だが、あいにく、抱き合う二人のあいだに、割って入る隙間はない。

そのことを残念に思う一方、不思議と嬉しく思っている——

女帝の口元にも、微笑みが浮かんだのだ。



Epilogue 惜別と、友愛と



灰薙の脅威が去った途端、学院の動きは急に活発になった。

警備隊がどこからかわいてきて、ギユネスに魔封じの網をかけ、魔抗銀の杖、魔力絶縁の鎖で拘束。手足を丸めて袋詰めにされたギユネスは、既に三十メートルほどしかなく、捕獲されたガリバーを思わせ、憫れだった。

雷真は夜々に支えられながら、朦朧とした頭で周囲を眺める。河川が氾濫した後のように、あたりには樹木やら建材やらが転がっていた。

まだ勝利の実感が無い。対峙した瞬間は、都市ごと消滅させられると思った。

もつとも、冷静に考えれば、そんな大破壊をもたらす理由があちらにはない。灰薙の目的はギユネスを手に入れることだったわけで、戦闘での減耗も最低限にとどめたかっただろうし、まだソーネチカさえ完全に掌握できていなかった。

この勝利には、運命の女神とやらが力を貸してくれたような気がする。ほんやりそんなことを考えていると、眼前に魔石が差し出された。

ソーネチカが微笑む。この大騒ぎの発端となった、虚無石だ。

「貴方とシスマがやり合っている隙に、ちゃんと拾っておきましたのよ」

「……さすが、女帝さんは抜け目ねえな」

「ただ、もう必要ないのでしょね。既に量産されているのでしょ？」

「あー、あれな……あれは……嘘だ」

ソーネチカだけでなく、夜々もきよんとした。雷真は頬をかきながら、

「灰蓋の魔術、要は信じさせたもん勝ちっばかったんで……ハプタリかました」

「は？ だって、あの、持っていた石は？」

「私！」

小紫が元氣よく、びよんと虚空から飛び出してくる。

そう——あれは八重葎の応用。ソーネチカの石、それも地面に落ちていたものを、光学

的に分解し、手のあたりに投射して、複製あるよう見せかけただけ。

ソーネチカが被を信じるに至った、最後の根拠が、まさかの偽り。

女帝はふるふると肩を震わせた。怒られるかと思ったが——笑い出した。

雷真はほっとして、軽い調子でたずねる。

「あんた、これからどうする？」

後始末を誰に任せるか、という意味だ。学院か、協会か。一瞬とは言え、ソーネチカは

灰蓋機と融合していたのだから、庇護者を持たなければ日常に復帰できない。

ソーネチカは目を閉じ、さばさばした口調で言った。

「この足で協会にくんだり、祖国に戻ります。今日、明日にでも発ちますわ」

「——マジか。夜会はどうすんだよ？」

「シャルロットに負けました。私の夜会は終わりです」

肩の荷が降りたような、まだ素練が残っているような、そんな表情で言う。

「最後まで観ていかないのか？」

「出番のない舞台を観続けるなど、投者にとってはずらいものです。ただの観客になってしまえば、悔しくもないのでしょうけれどね」

強気な表情が戻る。彼女はまだまだ、魔術の道を究めるつもりでいるらしい。

「お礼を言いますわ。貴方たちがしてくださったこと、そのすべてに」

ソーネチカはちゃんと腰を折り、雷真と夜々にこうべを垂れた。

「貴方が見つけてくれたのです。消えかけていたわたくしの意志、魂のありかを。貴方の言葉があったから、わたくしは己の存在を信じることができました」

「——そういや、そういう話だったな。あんたたちの、意味不明な大魔術」

「魔女のはものは、わたくしのもものより一段上……だったと思います。と言うより、魔女は我が祖国に、劣化版を流したと言うべきでしょう」

盤坐した六体もの機械式ゴーレムを見やり、苦笑交じりにつぶやく。

「今にして思えば、ヨルムンガンドの開発には、不審な点がありましたわ。やけに進捗がよく——どこからか技術供与を受けたと思われます」

当然、それは結社。とすれば、灰薙機の差し金だろうと思われた。

「わからないのは、なぜわたくしを融合の片割れに選んだかという点です。それに、魔女が学院長に流したはずの石を、わたくしは幼少の頃より持ち続けていた……」

「それはたぶん、どっちも同じ理由だ。あんたと合体したがつたのは、あんたがその石を護る帝室の姫だったから、じゃねえのかな？」

「……どういふことですか？」

「つまりさ、あいつは石を持ってなかったってことだよ」

ソーネチカは灰色の眼をまん丸にした。女帝には不似合いな、無防備な表情だ。

「自分がラザフォードにくれてやったとか偉そうに言ってたが、あいつが学院長に流したのはせいぜい設計図——くらいのもんじゃないかね？」

「設計図……ですか？ そんなものがあると？」

「だってよ、その昔、教会が東西に割れたときには、複製できたんだろ」

あくまで想像だが、灰薔薇の系譜は、その製法を継承していたのかも知れない。

「本当のところは知らねーけどな。黒幕ぶったところで、自分の力じゃ造れなかった——それは間違いない。だから裡にやらせたし、あんたという保険もかけた」

「それは……何だか……情けない、ですわね」

「ああ。まるで張り子の虎だな」

「ハリボテだったのは……あちら……ふふっ、ふふふー」

ソーネチカが笑い出す。ほがらかに、屈託なく。

ひとしきり笑うと、ソーネチカは石を雷真に手渡した。

「では、どうぞ。約束のものです」

「——ああ、確かに受け取った」

握りしめる。同時に、夜々を抱く手に力がこもった。

任務は達成された。そして、ソーネチカも救われた。いいことづくめに思えるが、そのぶんの代償は、確かに支払われたのだ……。

「貴方の役に立つかはわかりませんが」

そんなふうに前置きして、周囲を気にしながら、ソーネチカが耳打ちする。

「灰蓋機は（真円の完全体）とやらを指摘していたようです。それがあれば、ギユネスとひとつになれる——神性機巧になれた——ということかと」

雷真の脳に電流が走る。予見に言う「其は完全なる下の如し」か。

確かに、一人の人間が体内に格納できる魔力の量など、たかが知れている。

ギユネスを受け入れるには容れ物が必要だ。灰蓋機はその解決策として、ソーネチカの肉体を欲していた。一体、どういう仕組みだったのだろうか？

真理に近付いたと思ったら、またわけがわからなくなった。何にしても、雷真は勉強が足りない。しよっぱい顔でうなづいていると、ソーネチカがついと唇を寄せた。

「石を体に隠す術、乙女にしかできませんのよ。救世主の母と同じです」

「おとめ？ おとめって——乙女……あ？」

雷真の耳をくすぐるように、意外なほど驚っぽく、意味深にささやく。

「貴方に差し上げようと思いましたが」

「ええっと……それは一体、どういう意味でしょうかね……っ」と

とぼけようとする。だが、遅い。びきーんっ、と夜々が硬直し、震え始めた。

雷真も震えた。別の意味で。

「雷真っ……夜々の知らないところで……女帝さんと成人式を……!?」

「……その勘のよさで、何で文意が取れないんだ。何もなかった流れだろ」

「雷真は嘘つきだから信じられませんー新婚早々、夫婦の危機ですー」

雷真はあわてて逃げようとしたが、力を使い果たした体では、まともに走ることもできない。すぐに夜々につかまって、後ろから押し倒された。

もつれてじゃれ合う二人を見て、ソーネチカが噴き出す。初めは上品に。やがて口元を隠すのも忘れて、楽しげに。小紫も釣られ、一緒になって笑った。

「嘘つきも悪くありませんわ。彼が馬だと言うのなら、わたくし、魔だつて乗りこなせる気がしますもの」

にじんだ涙をぬぐいながら、ソーネチカが言う。

「わたくし、この先も研鑽を怠りません」

「……最強の女を目指してるんだもんな？」

「いいえ、『最高の女』を。貴方とわたくしの人生が、どこかでまた行き合うこともある



でしょう。そのときまでに、最高の女になっておきます」

「そりや楽しみだ」

「楽しい余緒があるかどうか……。そのときはきつと、振り向かせて見せますわよ」
ふわつと麗しく、そして不敵に微笑み、女帝は優麗に腰を折った。

「ご機嫌よう。そのときを楽しみに！」

軽やかにきびすを返す。それっきり、もう振り向きもしない。

颯爽と歩いて行く。女帝の歩みのその先には、四人の黒服たちが待っている――

踏んだり蹴ったりとはこのこと。重腹という表現は、今の私にこそ相応しい。

煮えくり返るはらわたを持て余しながら、シスマは物見高い市民たちの流れに逆らい、学院から遠ざかうとしていた。ストリートは混雑しているが、肩をぶつけてくる愚か者はいない。シスマから発散される殺気は、一般人でもものけぞるほどに濃い。

裏道に入り、野次馬の気配がなくなつたところで、こらえきれずに壁を殴る。三階までヒビが入り、外壁の漆喰が剥落した。

拠点とはつくに奪還された。だが、手下を責めるのは酷だ。シスマの方はそれ以上の大失態を演じているのだし、責めようにも、彼らの（再婚）は既に解け、この都市から消え失せてしまっている。今は本拠地で待機しているだろう。

まったくもって業腹だが、ギユネスを獲り損なつた以上、

「手ぶらで本国に戻るしか、ない……！」

つぶやいた瞬間、シスマの足もとから、地面が消えた。

硫黄と火炎の臭いが吹きつけてくる。熱気を感じたのが先か、殺気を感じたのが先か。気がつけば、シスマの体は巨大な骸骨にわしづかみにされていた。

不意を突かれたとは言え、我ながら油断だ。あるいは、怒りに我を忘れていたからか。シスマはまんまと捕えられ、勝ち誇った少女の顔を眺めなければならなくなった。

巨大な頭骨に腰掛けて、白いドレス、長い黒髪の少女が笑っている。

「あらあらあらあら、実にいいさまですこと！」

マスカラたつぶりのまつ毛を伏せ、黒薔薇セフィラが嘲笑う。

「茶会の取り決めを無視して、好き勝手に出し抜いてくれやがりましたわねえ。お下手を打って、逃げ帰る気分はどうですか？」

「……あの協定は、金薔薇の家督を誰が継ぐかって話だろう？」

灰薔薇はにっこりと、気さくな調子で笑いかけた。

「これは別件、個人的な問題なのさ。薔薇の協定を無視したわけじゃない」

「そう思っているのは、貴女だけではないか？」

「こんなのはただの余興だよ。それに、君だってエドマンズの言い分を聞き取らなかったわけじゃないだろう？ あんな青二才がアストリッドの後継なんて——」

「五月蠅い」

アストリッドの名を出した途端、黒目がちの可憐な瞳に殺意が宿った。

黒善蔵は細い声を低くして、冷え切った声でささやく。

「もちろん認めてはいません。金色ババアが死んだということも」

「……そうだろう？　なら、私と頼まないか？」

「頼む——ですって？」

骸骨の関節が軋む。ゆうに百トンを超すような、凄まじい加重がかけている。際限なく上がる握力に、シスマは必死に抵抗した。

「……私を殺してどうなるって言うんだい？　何の得もないだろう？　私はもうギネスの一語を既に体内に格納している。虚無石の秘密、因果性置換も教えてあげるよ。三つを合わせれば、この先百年は安泰ぶけりゆつつ」

言葉の途中で、黒善蔵はただの肉片になった。

破れたずた袋から、びゅーっと噴水のように血があふれる。

セフィラは汚物を見るように顔をしかめ、小鼻の前で手を振った。

「ああ、臭い、臭い……ひどい小者臭がしますことよ、黒善蔵」

くるみをもてあそぶように、ぐしゃり、ぐしゃりと骸骨がひねりつぶす。

骸骨に汚物を捨てさせて、セフィラは独り言のようにつぶやいた。

「貴女のような者が娼婦マリアの末裔とはがっかり——（女帝）の方がよほど見所がありますわ。あれなら、礼法をしつけるまでもなく社交界に出せますしね。わたくし、マナー

を知らない者とは付き合えませんか」

汚い死骸に囁を向ける。念動が働き、血だまりから薔薇の指輪が飛び出した。それを手元に引き寄せながら、路地裏の間に視線をやる。

「不作法は身を滅ぼす——貴方も氣をつけた方がよくてよ？」

「俺は作法を知る者ですよ。親父さまに教しくしつけられました」

闇の中から、黒ずくめの貴公子が顔を出す。一応はお忍びなのか、礼装の上着ではなく、黒のロングコートを羽織っていた。

「ご足労いたみます、黒薔薇さま」

エドマンドは作法にのっとって一礼した。が、すぐに普段の調子に戻り、

「おかげで手間が省けましたよ。俺が始末しなければならぬと思ってたんで」

「暇つぶしですわ。つぶしたのは豚でしたけれど」

セフィラは興味を失くしたように、薔薇の印章を奈落に投げ捨てた。

「まあ、昔から氣に入りましたよ、この腐れババア。わたくしたちが生まれた頃には、とくにババアでしたし」

「ああ……灰薔薇の席は代替わりしないとか」

「代替わりはするのです。この女ときたら、寄生虫みたいなものです。しまいには自分が誰かもわからなくなっていた——考えるだにおぞましい、バケモノですわ」

「俺に言わせれば、嫌気（いとけ）で若さを保つ金薔薇さまも、それは恐ろしい方でしたよ。何せ、

療氣の原料は人間の靈氣——もとをただせば他人の生命だ」

びん、と空氣が張り詰めた。セフィラの凍てつく殺氣を感じていないはずなのに、エドマンドは氣樂に続ける。

「その点、死をも超越した奈落の女王、黒薔薇さまの魔術は美しいと思います。ご自身も変わらずお綺麗でいらつしやる」

「……おべんちゃらは嫌いですわ。隘口を叩いた奴は殺しますけれど」
骸骨の頭を優しくさすり——セフィラは鋭く訊いた。

「本当のところをおつしやいな。アストリッドをやったのは、おまえ？」
死の氣配があたりに満ちた。

傍若無人の狂王も、さすがに冷や汗を垂らす。だが、彼は普段通り、

「そんな質問に、何か意味がありますか？」

人を喰ったような笑顔で、そう言った。

セフィラは黙った。確かに意味はない。違うと言われても、セフィラは認めない。

「ふん……出歩いてよろしいの？ 王となったのでしょう？」

「近衛どもは大騒ぎでしょうがね。なに、王が急がしいのはこれからです。今夜の騒ぎで夜食が中止にならぬよう、各方面に掛け合なけりやなりません」

「残るは剣帝、暴竜、そして魔士殺し——元帥が勝つということもありますか」

「いえ、それはないでしょう」

エドマンドは断言した。確信を秘めた声で。何の疑問もないとばかりに、告げる。

「俺のライシンが勝ちます」

「……それはどうかしら。（約束された子ども）の方がオッズは低い」

両者のあいだに不穏な火花が散る。セフィラは小さく首をすくめ、

「せいぜい、仕掛けにお気をつけなさいな。今夜のことで、その結果、紫薔薇はとても納得できないでしょうからね。それから」

本立ちを離れ際、長い黒髪を肩で払い、すつと流し目をくれる。

「貴方の継母上にも、小娘のくせに、図々しい女ですの」

「ご助言、ありがたく頂戴いたします」

エドマンドはうやうやしくこうべを垂れ、丁寧に礼を述べた。

この夜、三人の少女が手袋を失った。

残る魔王候補は四人。ブラックメーカーは今頃騒ぎを聞きつけて、明日売り出しのオッズ表を大急ぎで作っていることだろう。

教父が予見し、金薔薇が予言し、学院長が予期する夜会決着まで、あと二日。決着のときを間近に控え——明日もまた、夜会の幕は上がる。

あとがき

こんにちは、海冬レイジです。

アニメ放映後の一発目、機巧少女は巻をお届けします！

夜会終わる終わる詐欺の本編ですが、それでも残り〇人までできました――

次巻はどうなるんでしょうねコレ。すんなり試合だけで終われるような、そんな心配ではなくってきましたが……。特に、今回ひどい敗れ方をした、あの娘さんがこの先どうなってしまうのか、作者もハラハラしています。

今回は……というかここ最近ずっとスケジュールが危険水域でした。

ひとつ遅れると連鎖的にその次以降が全部遅れ、関係者ご一同さまにはこの一年ほど、ひどいご負担を強いておりまあああすみませんでしたあああ！

担当池本さんの采配とサポートとナビゲーシオンがなければとくに詰んでいます。特にるろおさんには本当に申し訳ない……。るろおさんはどれだけスケジュールがピンチでも完全なクオリティで上げてくださるので、僕ら全然気付かないよねっ。

原稿完成後にいただいたソーネチカのアサインは本当に素晴らしいので、ガチ惚れ込んでしまいました。やべえなコレ……。遅れてきた貞ヒロインじゃねえのコレ……。――

運れてきた真ヒロインと言えは皆さま、円盤特典のゼロ巻はもうご覧いただけましたでしょうか（ときどき）。まさに書校の文庫そのもの、冊子ではなくマジ書籍です。るろおさんの美麗イラストもフル収録（カラー3枚をモノクロ10枚）です。一部は公式サイトでも確認できますので、<http://www.milkyway-project.com> まで今すぐアクセス！

るろおさんの沙（さ）かわいいよ沙。「ディーブな人は知ってる隠しヒロイン（レア）」くらいの扱いで、可愛がっていただけたらと思います。ちよつと特典は手が出ない、という方はぜひお友達とご一緒にお楽しみください。まだお悩み中の方はドラマCDつき特装版のことを思い出してください……この手のアイテムは基本「それっきり」です……。

さらにコミックジャンプで連載中、釜田（かま）みきとさん画のスピノオフも佳境です。鋭い方はそろそろ本編とどういう関係にあるか、見抜いていらっしやるかも……？ 白夜（よる）ちゃんがとってもかわいいのでぜひチェックしてくださいね！

広がりすぎて全部追いかけるのは大変だよというアナタ！ どうぞご無理のない範囲でお楽しみください。全部を網羅しないと本編が理解できない、ということはありません。囁めば囁むだけ味が出る、くらいの路線を目指しております！

たくさんの方のお力添えで、ここまでくることができました。

アニメの世界でお会いした方は皆さん凄いタレントをお持ちで、ハタレ文字書きの海冬レイジは圧倒されてばかりでした。僕が外側からイメージしていたものはまったく幻想で

はなく、思っていた通りのすごい世界でした！

緻密で美しい背景や、可愛いキャラクター、髪や瞳の細かな動き、効果も音楽もCGも、どれも本当に素晴らしい——その進行を支える方や、営業に携わる皆さま、魂を吹き込んでくださるキャストさま、関係者さま全員のプロフェッショナルな技術と愛情に深く感謝いたします。皆さま、素晴らしい作品をありがとうございました！

よしもと監督、島山プロデューサーのお二人には、作品でお世話になったばかりでなく、職業人として大切なものをいただいた気がしております。右も左もわからない僕に、さり気なく道を示してくださり、常に「護ってくださいって」いた……はっ、これがヒロインの感覚？ ありがとうございます！ 胸キュン！

ふたつのコミックス、アンソロジー、グッズにゲーム、印刷に出版に流通に各店舗さま——本当に多くの方の情熱が機巧少女を広げてくださいました。

そして誰よりもまず、今日まで支えてくださった貴方に最大の感謝を！

ここまで走り続けることができたのも、この先へ進もうと思えるのも、期待して待っていてくださる貴方がいるからです。物語の行く末をどうか見届けてくださいいね。

ではまた次回、そろりと加速を始める……予定の14巻でお会いできますように！

こんにちは、絵の人です。

アニメ見てくれた方、有り難う&お疲れ様ッス。

夜々のフローグンハートなナースキャップの

マークが素敵にツボて御座いました。





マシンドール 機巧少女は傷つかない13 Facing "Elder Empress"

発行 2014 年 2 月 28 日 初版第 1 刷発行

原書 海老レイジ

文芸点 三巻巻一

編集局 かんた

発行所 株式会社 KADOKAWA
〒303-8577 東京都千代田区金町 3-1-1
03-3238-4321 (内線)

編集 メディアファクトリー
0370-300-800 (カスタマーサポートセンター)
平日午前9時～午後5時 (土・日・休)

印刷 製本 株式会社南有堂

©2014 KADOKAWA

Printed in Japan ISBN 978-4-04-064761-1 (JAN)

<http://www.kadokawa.co.jp/>

※本書の複製権(コピー・スキャン・デジタル化等)並びに無断複製物の譲渡及び配達は、著作権法
上での製作者権を冒しています。また、本書を複製・譲渡などの目的で、無断して複製する行為は
たとえ個人や家庭内の利用であっても一切認められておりません。

※本書はカバーに表紙と表紙裏とを併用しています。

※凡て本・個丁字は通称小社名部にて取替えています。カスタマーサポートセンターまでご連絡くださ
い。お客様が購入したものに ついては、お問い合わせできません。

【ファンレター・お問い合わせをお待ちしています】

〒150-0002 東京都渋谷区はろ 3-3-3 NPO法人g-maze

株式会社 KADOKAWA「メディアファクトリー」編集部宛(〒100-0001 東京都千代田区千代田 1-1-1 株式会社 KADOKAWA)

二重丸線以内は印刷および本書に関するお問い合わせにのみご利用ください。

<http://mf.jp/uynd/>

- スマートフォンにも対応しています！→ 印刷版と異なる仕様もございます。
- お使いの PC の OS 環境や、この書籍で使用する画像の権利等から使用を制限しています。
- ネット・アクセスする際や、印刷・メール送信時にかかる通信費はお客様のご負担となります。
- お申し込みのうえは、保護者のための了承を得てからご活用ください。

